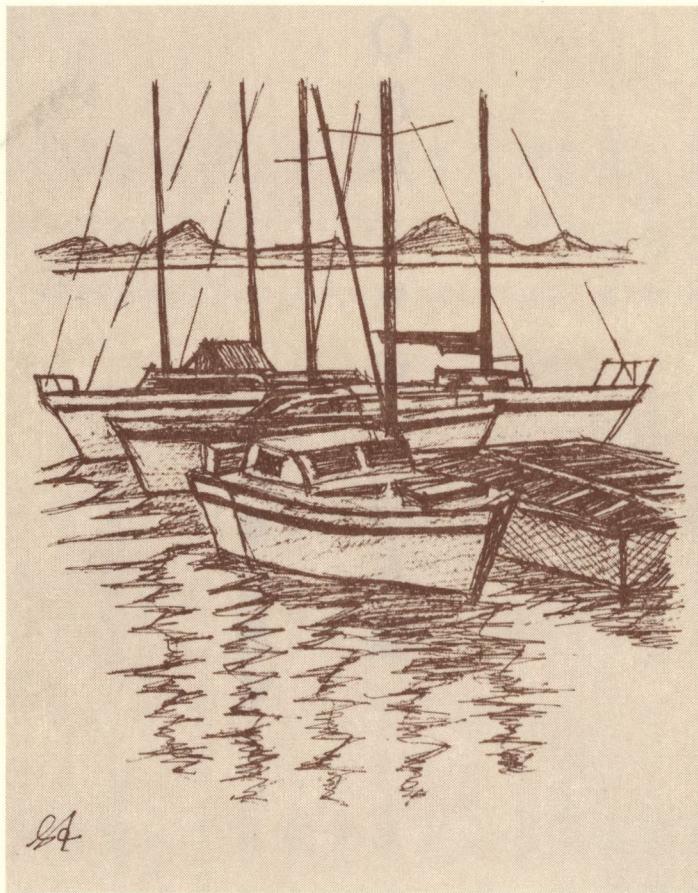


悠遊 第三号



企業OBペンクラブ

企 業 O B ペ ン ク ラ ブ 同 人 誌

▲ 第 三 号 ▼

目 次

◇どうなる? どうする二十一世紀														
◇二十一世紀は通い婚	北田 純一	5	◇くらしとエネルギー	森田 茂	57	◇南西アジアと日本								
◇生き残るか天動説	西島 力	8	◇女性優位の世界は来るか	石川 正達	61	◇インドを中心として	大沢 章伸							
◇知恵の木の実	浅野 正春	12	◇東南アジアで出会った宗教	莊司 忠志	69	◇パーソン通信雑感	吉壽 清己							
◇女房リース論	八木 大介	15	◇中国 食の思いで	中洲 靖雄	73	◇「マガジンの渡り	岩瀬 昭三							
◇「ワン・ワールド」	岩崎洋一郎	18	◇「収穫祭」に招かれて	アブドルカーダー栄子	77	◇時差とつき合う	大塚 滋							
◇日米抱き合い心中か	村田孝四郎	22	◇パソコン通信雑感	中洲 靖雄	80	◇「律」命名由来さがし	福井 律							
◇アメリカの属州に	都甲 昌利	26	◇真夏の昼の経験	園田 秀俊	84	◇日本的情報収集管理体制	中川 十郎							
◇日本の未来は明るい	角谷 朗宏	29	◇生命力の限界を拡げて	池田 善行	88	◇夢を語ろう	今村 亮							
◇「宅配新聞」に未来はあるか	林 篤一	33	◇去年雑感	岸田 健	90	◇大岡信氏の「第二芸術」	櫻井 清治							
◇若者よしつかりせい			◇「律」命名由来さがし	福井 律	93	◇二十一世紀への提言	新井 進							
—二十一世紀にどう生きる—	遠藤 俊也	36	◇真夏の昼の経験	園田 秀俊	97	◇年金はどうなる	中川路 明							
◇推理—21世紀の邪馬台国	斎藤 劲	39	◇日本的情報収集管理体制	中川 十郎	101	◇二十一世紀への期待	衛藤甲子郎							
◇デノミ考	吉井米三郎	43	◇生命力の限界を拡げて	池田 善行	103	◇年金はどうなる								
◇二十一世紀への提言	新井 進	46	◇去年雑感	岸田 健	106	◇二十一世紀への期待								
◇年金はどうなる	中川路 明	46	◇「律」命名由来さがし	福井 律	105	◇大岡信氏の「第二芸術」	櫻井 清治							
◇二十一世紀への期待	衛藤甲子郎	50	◇真夏の昼の経験	園田 秀俊	103	◇二十一世紀への提言	新井 進							

◇羽生六冠王の婚約	清水 喬	池田 耕治
◇一回目のハッピー・リタイヤー	内藤 徹翁	石川 正達
◇六十の手習い	亀井 弘次	亀井 弘次
◇北條時敬先生とその弟子	西田幾多郎	北田 純一
◇今春演芸場の思いで	水谷 汎	小林 正憲
戦時下の寄席	関谷 裕彦	三枝 亨
◇新春雑想	小林 正憲	櫻井 清治
◇やらせ	藤岡 豊	佐份利 治
◇ドイツの戦後五十年序説（その二）	鳴澤 宏英	鳴澤 秀影
戦争責任と戦後処理について	藤井 長治	西川 知世
◇京ゆば雑記	佐份利 治	森田 茂
◇発想の原点	野村 嘉彦	吉井米三郎
◇八十才年寄りの戯言	上沢 準一	平間真木子
◇中国自動車工業について	原 信	アブドルカーダー 栄子
◇イタリア旅行	細川 謙三	浅野 正春
◇短歌会について		石川 正達
◇ベン俳句二年の歩み＝その一	平間真木子	池田 耕治

浅野 正春

160 156 155 147 143 141 137 133 130 127 124 120 118 115 113

◇ベン俳句二年の歩み＝その二

平間真木子

アブドルカーダー 栄子
平間真木子

浅野 正春
石川 正達
池田 耕治

亀井 弘次

上澤 準太

北田 純一

三枝 亨

櫻井 清治

佐份利治

鳴澤 秀影

西川 知世

森田 茂

吉井米三郎

アドルカーダー 栄子

許斐 義信

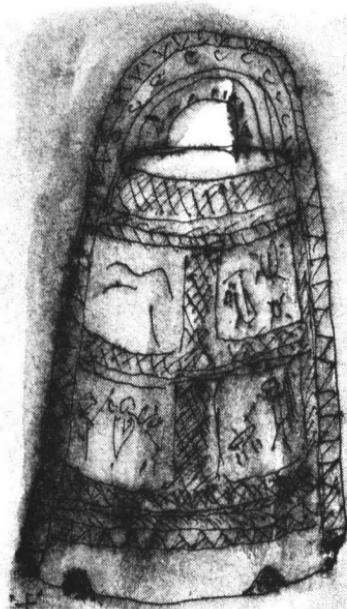
森田 茂

西川 知世

カット 新井 進

176 175 173 168 166

旅生中期
銅鑄文
錢



どうなる？どうする二十一世紀

二十一世紀は通い婚

北田 純一

変わらぬようでは変わらぬのが世の中である。しかし、いつの間にか変わってしまうのも世の中である。我々には自分の目で二十一世紀の全貌を確める手立てはないが、十万億土の彼岸から遠眼鏡で覗くことならできるかも知れない。その時はきっと、明るい星と暗い星が重なりあって見えるに違いない。明るい方は人間どもが現在を上回る文明に浮かれている態であり、暗い方は繁栄しすぎが祟つて地球もろとも滅びゆく姿である。

思うに、暗い方の最大原因は人口爆発である。国連の予測では二十一世紀の世界人口は現在の一倍の一〇億強になるという。人口が一倍になれば食糧は四倍を必要

とする。食生活が向上するからである。人口が二倍、食糧が四倍の社会を支えるには、現在の十倍のエネルギーを必要とするだろう。もちろん、水や空気やその他諸々の資源も要る。

しかるに、現状ではまったく目途が立っていない。とにかくエネルギーは、核融合発電や高速増殖炉の実用化が間に合わなければ、化石燃料もウラニウムもあと数十年で枯渇し、人類の文明は二十一世紀のある時点で崩壊を余儀なくされるに違いない。

明るい方は、人口爆発が抑制され、エネルギー問題も解決できた場合である。人類はさらに発展し、わが日本国も今しばらくは豊かさを享受しつづけるだろう。今しばらくと言つたのは、地球は有限の星だから必ず限界があり、いくら科学技術が発達しても無限の成長はあり得ないからである。いつかは必ず頭打ちになる。いや、すでに限界をすぎているのかもしれない。

もし、二十一世紀が明るい星であり得たとして、その

時の日本はどんな具合だろうか。全貌を論ずる紙面はな
いから、ちょっと面白そうな結婚問題について考えてみ
よう。

日本は戦後復興の過程で本格的に工業化を押し進めた。
国民の大多数は役所や会社に勤めるサラリーマンになつ
た。それは日本社会の核家族化を意味する。アメリカで
も第一次世界大戦のあと、夫婦と子供の核家族が郊外の一
戸建てに住む古き良き時代があつたという。日本には
それが半世紀おくれて巡ってきたのである。

工業化は人口の大都市集中を招く。日本人も大都市に
移り住み、結婚して家庭を作った。当然、大量のマイホー
ムが必要だった。だが、急に膨れ上がった大都市にはマイ
ホームはなかった。全国人民がマイホーム病にとりつか
れ、住宅公団が作られ、住宅金融公庫が設立され、大小
様々な不動産業者が暗躍し、徐々にではあるがマイホー
ムは整備された。しかし、大都市の土地は払底し地価は
高騰した。東京の地価はついにニューヨークの五十五倍
に跳ねあがり、東京を一つ売ればアメリカが五つ買える

といわれるにいたった。

それでも国民はローンを組んで高価なマイホームにと
びついた。幸い、高度成長が続いたので毎年給料が増え、
なんとかローンの返済ができた。しかし、新たな問題が
浮上した。お隣りと横並びで、自動車、テレビ、洗濯機、
冷蔵庫、エアコンなどを買いそろえねばならなかつた。
ファッショնも大切である。そのうえ子供の教育費がべ
ら棒に高い。とても亭主一人の稼ぎでは文化生活はま
ならない。古き良き時代の伝統は破れ、夫婦共稼ぎの時
代になつた。なかには子供を作らないと決めてかかる夫
婦も現れはじめた。ダブルインカムノーキッズDINK
Sなる新語が流行しはじめた。

そんなある日、苦労して手に入れたマイホームの猛烈
な値上がりに気がついた。地価の値上がりは企業の含み
益を倍加させ、株式を高騰させた。ここにおいて、さす
がにうといサラリーマンも資産の価値に気がついた。い
ままで爪に火を点して稼いできたフロー収入に比べ、格
段に大きいキャピタル・ゲインの存在を知つた。そして
微々たるものとはいえ、自分たちもいつの間にかそこそ

この資産を持つてゐることに気がついた。

バブルが弾けたといつても資産価値はまだ高い。

昔なら無産階級に近かった親たちの資産も高騰し、おかげで何がしかの遺産相続にあづかった。妻もまた同様に遺産相続をうけ「安いゴルフの会員権でも買おうかしら」などとご機嫌な時代になつた。

結構な話のようだが喜んでばかりはいられない。古女房なんかを雇う物好きがいる筈はないと高を括っていた

ら、遺産相続の具合によつては妻の方が金持ちになる場合も発生しはじめた。妻たちはその気になれば、いつでも離婚して経済的に自立できる時代になつた。

話の筋は離婚の危機ではない。日本の経済もすっかり成熟し、いつの間にかフローの経済からストックの経済に様変わりし、社会に欧米先進国並みのゆとりが生まれつつあることを指摘したいのである。

このような社会の変化に、若者が敏感に反応しないわけがない。彼らは親たち世代のようにガンバラなくとも、少子社会のおかげではば確実に親のマイホームをそつくりそのまま相続できる状況にある。あくせくガンバル必

要がもともとないのだから、彼らの発想も興味の対象も親世代と異なるのは当たり前である。ガツツがないの、

ハングリー精神に欠けるのと叱るばかりが能ではない。

ところが阪神大震災の際に若者のボランティアが大活躍した。それもエリートコースにのつてゐるとは思えない若者が力を發揮した。予備校をすっぽかしてボランティアの支援に赴き本部で見事な指揮振りを發揮してゐる若者をテレビで知つて感激させられた。

英國の名門オックスフォードやケンブリッジの卒業生は実業界に身を投じないらしい。そして、年収四〇〇万円そこそこの学校教師や聖職者になつて、人々を指導する仕事につくという。ノブレス・オブリジエスの伝統に感心させられるのだが、日本にはノブレスでもないのに、オブリジエスを弁えたボランティア青年が育つてきたのである。これは日本社会が成熟し、余裕がでてきた証拠ではないだろうか。

我々の世代は何といつてもフローの時代だった。我々の価値観は結局のところフロー経済の損得勘定に縛られていた。言つなら、今日のコメ欲しさの日銭が勝負の感

覚である。だが、若者の価値観は本人が意識しているかないかは別にして、すでにストック経済の感覚を身につけはじめている。これが結婚観に影響しないはずがない。

ストックからの収入は男女の区別がない。親の遺産なら本人の能力とまったく関係がない。そうなると、二十一世紀の日本では女性の経済力は現在とまったく違つたものになっていると考えられる。夫も妻もそれぞれが資産を持ち、仕事も持つとなれば、果たして現在と同じような婚姻制度が必要だろうか。将来のDINKSは結婚式を挙げたり入籍したりするだろうか。

良いことか悪いことかは別にして、二十一世紀の結婚形態は現在の同棲関係と同じようになるのではないだろうか。愛し合っているから一緒に住むが、愛がなくなればさっさと別れてしまう。そのうちに同棲もやめて、必要に応じて訪ね合うようになるかもしれない。平安時代さながらの通い婚が主流を占め、短歌の一つも添えなければ相手にして貰えない時代になるかも知れない。

生き残るか天動説

西島 力

一九九二年十月三十一日、ローマ法王ヨハネ・パウロ二世は、十七世紀に地動説を支持して宗教裁判にかけられ教会から破門されたガリレオ・ガリレイを、「誠実な信仰者であり、天才的物理学者である」と讃えて、三五九年四ヶ月と九日ぶりに破門を解き、その名誉を回復した。

真理と信仰についてのヨーロッパ人の頑固さと律儀ぶりに、思わずニヤリとした人も多いことだろう。

ところで、この地動説は最初一五四三年にポーランドのニコラス・コペルニクスが恐る恐る発表した説で、後世において「コペルニクス的転換」と持て囃されたものだが、当時はあまり相手にされず、実際に世間に強い衝撃を与えるに至るには、くだんのガリレオの勇気ある反

こんにちでは小学生でも知っている地動説が正式に認知されるまで、あるいは逆に言えば天動説が否定されるまで、どうしてそんなに長い年月が必要だったのか。答えはただ一つ、天動説は分かりやすく地動説は分かりにくいからである。つまり、天動説は感覚で理解できるのに、地動説は知性の力がなければ納得できないからである。

二十世紀は戦争の世紀であった。次の世紀への最大の懸念は、はたして人類は戦争を解消しうるだろうか、ということであるが、厄介なことに一つの天動説が大きくこれを阻んでいる。

それは、戦争は国家の正当な権能であり、軍隊は栄光である、という天動説である。

不思議な話だが、國賓が空港に着くと今でも必ず儀仗兵を閱兵し、時には礼砲がブッ放される。公海上では商船は軍艦に挨拶をするのが習わしで、時には臨検も甘んじて受けなければならないという。甚だしきは潜水艦が自分の落ち度で釣り舟にぶつけて沈没させても溺れる人間を救ひなかつたという例もある。「力は正義なり」と

いう考え方によれば「軍隊は栄光である」という誤解が長い間にわたって人類を毒しつづけてきた。

軍隊とは人類社会において最も高度に組織された暴力集団である。歴史のある時点においては、しかもそれが「ミリチア」的民衆軍であった段階では、瞬間的に高度に倫理的な「正義の軍隊」が存在したが、それが正規軍になるに及んで、ことごとく権力と共に腐敗の道を辿った。

戦争の惨禍は戦場で生命を落とすことなどまらない。兵士に、その良心に反して、敵の、時には無防備の市民の生命を奪うことを強制することにある。それは自らの生命を落とすこと以上に人間の尊厳を傷つけることではないか。しかも軍隊は、自国民の保護だけではなく、例外なく権力による自国民の抑圧をその使命の一部としている。

日本においても、戦場での死は栄光であると思いつませるために、再び国民を戦争に駆り立てるのをもくろむ人々は、宗教の実体の無い靖国神社にむりやり宗教のころもを被せて栄光を演出しているが、死に栄光は無

いのだ。

まともな手段で自衛隊の定員を充たす見込みもなく、まいねん相当数の防衛大学校卒業者の任官拒否に悩む日本をはじめ、世界の主権国家は、奴隸狩りに類する徵兵制度を強行するのでなければ、その軍隊を維持することすら困難になるであろう。

阪神大震災を機に時の言葉となつた「危機管理」は聞いていると何となく、最も緊要なことは如何に早く自衛隊の出動を要請するかという議論になつてゐる。その存在がすでに違憲である自衛隊の延命のための煙幕のようなものではないか。使われ方が本末転倒であるといふ点では、もう一つの流行語「国際貢献」と共通している。

いわゆる冷戦構造が解消した現在でも、覇権国家は反省もなく中近東やアジアの国々に武器を売り付け、日本政府は世界第三位の軍事費を減らすどころか、さらに増やそうとしている。カンボジアの平和回復を妨げる八百万発の地雷も、ボスニアの愚かな殺し合いを煽る武器も国連常任理事国によつて供給されたものである。天動説に油を注ぎ絶えることなく戦争を生み出そうとする元凶は世界の軍産複合体ではなかろうか。

たしかに今の日本では自衛隊以上に組織的行動の出来る集団は他にない。しかし自衛隊は軍隊である。軍隊は災害救助については素人である。軍隊が日夜精励しているのは「敵を撃滅すること」すなわち「人を殺す」訓練に他ならない。真の危機管理は直ちに非軍事的災害救助隊を創設することであると叫ばれて久しいのに、為政者

は聞こえないふりをしている。

軍備はつねに防衛のためであると、殆どの主権国家の支配者が唱えているが、事実はその虚妄性を実証している。平和の名において如何に多くの侵略がなされたか、相手が好戦的だという口実で軍備を増強することが「相手」に、より大きな恐怖心を抱かせ、結果として如何に過剰な対立を生んだか、歴史は枚挙に事欠かない。「自衛は国家の固有の権利だ」という論理はすでに空洞化しているのである。

天動説の「分かりやすさ」は、（一）戦争は人間の本能であつて絶対になくならない、という運命論と、（二）

常に敵が狙っているから武装しないと危ない、という戸締まり論などの俗受けのする論理に表れている。いつぱう、日本の平和憲法に代表される地動説の「分かりにくさ」は、これらの論理が、歴史の検証を通じて、むしろ非現実的な推論であり、そう思い込む、あるいはそう思ひ込ませることが逆に戦争の危険を増大してきたことに気づき、そして現実の戦争技術がもはや安易な繰り返しを許さぬほどに破滅的であるとの認識に基づいて、不退転の不戦の決意に到達したという、きわめて高度な思考過程を経てのことによる。

天動説の見地からすれば正気の沙汰とは思えないであろう日本の平和憲法は、決して思いつきで生まれたものではない。まことに興味深いことに、第一次大戦後の世界の平和への願いの中で、すでに地動説が芽を出している。一九二八年パリで米、仏、英、独、日、など主要十五ヶ国により調印された「不戦条約」別名ケロッッグ・ブリアン協定は、その第一条で「締約国ハ国際紛争解決ノ為戦争ニ訴フルコトヲ非トシ且其ノ相互関係ニ於テ國家ノ政策ノ手段トシテノ戦争ヲ放棄スルコトヲ其ノ各自ノ

人名ニ於テ嚴肅ニ宣言ス」とうたっている。わが憲法第九条にそつくりではないか。

しかし実際の歴史はこの理想が全くのところ絵に描いた餅に過ぎなかつたことを示している。結局、憲法第九条との決定的な違いであるその第二項「戦力不保持の宣言」を欠いた不戦の誓いは画餅に帰す、という厳肅な歴史の教訓なのである。そして第二次大戦で地獄の釜を覗いた日本において、その理想が地球上はじめて実定憲法として陽の目を見たのである。

憲法制定後、文部省が中学生向けに編集した憲法副読本には戦争放棄について次のような記述があった。
「みなさんは、けっして心ぼそく思うことはありません。日本は正しいことを、ほかの国よりさきに行なつたのです。世の中に、正しいことぐらい強いものはありません」
日本はこの「見「風変わりな」理念に将来を賭けたのである。いま二十一世紀を目前にして、日本が世界にその証しを示すために選ぶべき道は、自衛隊の解体と日米安保条約の廃棄であろう。

知恵の木の実

浅野正春

先日月例の俳句会で「林檎」という席題が出され、夫々が作った句を鑑賞し合ったあとで、誰かが「アダムとイブの食べた林檎の大きさはどのくらいだったんでしようね?」と呟いた。物知りの多い句会のメンバーたちにとつては、格好の雑談のテーマだ。アダムとイブは何かにつけて人々の話の種になる。或る人が、「ヨーロッパの国々で食べている林檎は、日本の林檎よりだいぶ小さいですよ」と云つて口火を切つたから堪らない。メンバーの一人一人が林檎の大きさについての蘊蓄を傾ける会に早変わりしてしまつた。

誰かが、「林檎がアダムの喉につかえて喉仏が出来たのだから、林檎の大きさは喉仏ほどのものだったに違ひない」ということでこの話は終わつた。

聖書をみるとアダムとイブが食べたのは「エデンの園

の中央の知恵の木の禁断の木の実」と書いてあり林檎とは書いてないが、昔からこの「禁断の木の実」は林檎であるとされている。

聖書や仏教説話にてて来る話は、皆喻え話になつてゐる。これらの宗教的な文献は、物事の「事実」を伝えるのではなく、宗教的な「眞実」を伝えるためのものであり、そのためには喻え話の形で語るのが最も相応しいのだろうか? それでは上の話にてて来る「林檎」とは何を意味しているのだろうか?

私はこの「林檎」とは人間が人間を傷つけたり殺したりする道具と、それを使う知恵だったのではないだろうかと何時の頃からか考へるようになつた。

私は今、中学生になつて英語の勉強をはじめてから、永い間外国を旅行することを夢見ていた私自身のことと思はれてゐる。それは二十一世紀とはどんな世紀だろうかということを考えようとして、まず自分たちが半世紀以上にわたつて生きてきた二十世紀とはどんな世紀だったのだろうかを考えることからはじめなければならぬ

と思つたとき、ふと心に浮かんだ遠い昔の記憶の断片だ。

第二次大戦という、大量の殺戮兵器を使っての戦争のあの永い間、日本人は簡単に外国旅行をすることが出来ず、唯一の道は米国のフルブライト奨学生試験に合格して米国に留学することだった。外国に行きたくても行けない事情を作ったのは戦争だと考へると、子供心にも戦争と武器が憎かった。

外国に行きたくても行けないとことから、幼い考えは段々広がって行き、

「国境があつて国があつて、國同士の利害の衝突があるから戦争が起つたりするんだ。国境のない世界を作れば戦争は起きないじゃないか！」

などという幼いながらも真剣な考へを熱を込めて友人たちと話し合つた。そんな私にとって、国際連合が出来、世界銀行が出来、マーシャル・プランが実施されてヨーロッパの戦後の復興がはじまり、日本も戦後の復興が軌道に乗りだしたのを実感して、「この分なら、国境がなくなつて、世界が一つになるのも遠い将来の夢ではないかも知れない」という希望がもてる時代がしばらく続い

た。

しかし、間もなく朝鮮戦争がはじまり、時代は暗転してしまつた。それ以来ベトナム戦争があり、さらに大小の地域紛争や民族紛争と、この地球から戦争、紛争が絶えたことがない。現在も地球のあちこちで紛争が続いている。国連軍やNATO軍が派遣されても紛争は一向になくなる気配を見せない。富める国があり、貧しい国があり、「人間が隣人より良い生活をしたいという欲望」をなくさない限り、戦争や紛争はなくならないのだろう。この欲望もアダムとイブが食べた禁断の木の実のなかに入っていたのかも知れない。

国家間や地域間で経済格差や文化の格差があることは、人類は本当の平和を築くことが出来ないのではないだろうか？ そしてその格差は現在の国際連合や世界銀行等の枠の中では未来永劫なくならないのではないだろうか？

だとすれば、二十一世紀は「絶望の世紀」だと予想しなくてはならない。

だがそう絶望ばかりしていても仕方がない。総合的にみれば二十世紀は、人類が賢くなり、前世紀と比べて格

段に良い社会を作り出したことも事実だ。

第一次・第二次大戦を通じて、あれほど猛威をふるつた帝国主義の植民地獲得競争は完全に消え去り、民族自決主義という理想のもとで、多くの国が政治的独立を果たした。日本の農業は米の自由化という波にさらされてゐるとはいへ、その根本的な構造は、戦前の地主・小作農業から完全な自作農制に変わった。人間の基本的人権が尊重される時代になった。国民の教育レベルは瞠目に値するほど高くなつた。もはや食料難の時代は遙かに過去の歴史の中に埋もれ去ろうとしている。

遅々とした歩みではあるが、世界貿易機構（WTO）が設立され、より自由で公平な世界貿易を実現しようという人類の夢にまた一步近づいた。国際連合は、現在大幅な改革の途上にある。独立を達成したアジアの国々に、来世紀の飛躍の夢が託されている。

一世纪という時間は結構長い。我々はどんなに長生きしても二十一世纪の初めの四半世纪を見るのが精一杯だ。だからその短い期間で、二十一世纪がすばらしい世纪となるべき土台を築いて、子孫に残して行かねばならない。一、そのためになすべきことの第一は、戦争や争いごとの道具を人類が放棄することだ。

アダムとイブの林檎の中には、人間が殺し合う知恵ばかりではなく、人間が幸せになるための知恵も入っているはずだ。多分その知恵のお陰で、我々は現在科学技術

された資本主義の枠の中では、「発展途上国」と呼ばれるようになり国際経済協力体制のもとで進歩と発展の輪の中に組み込まれようとしている。

全般の恩恵を享受しているのだろう。人間の知恵とは誠に両刃の剣だ。

二、人間の頭の中から、極めて有害でドグマティックなパラドックス思考法を取り去ることだ。パラドックスの典型は、「核による攻撃」—「核による報復」—「核抑止力」—「戦争の回避」というパラドックスだ。悪魔の理論だ。私にはこの「核抑止力」を堂々と臉面もなく肯定したり主張する人をみると、「この人は逆様に立つて足で考え、頭で歩いているのではないか?」とさえ思えて来る。

二十一世紀の第一四半期までに、世界がひとつになれるきっかけを作ることが出来るだろうか? 或いは人類滅亡への道を辿るのだろうか? 人間は「知恵の木の実」を食べて獲得した知恵をどう使おうとしているのだろうか?

これに反して、元祿や文化文政の太平時代は、女たちは鼻持ちならなかつた。朝、亭主を仕事に出せば、早々に家事を切り上げ、昼間から湯屋へ上がって、お茶とおしゃべり、時には役者を買って放蕩を尽くす。世が平和で生活の心配がなかった時代だからである。正にカネと

女房リース論

八木大介

最近夫婦別姓がはやっている。女性は女権拡張と感激しているが、どうして女性は『夫婦別姓』をありがたがるのだろう。結果がうまく行かないのは目に見えている。今まで別れたくても我慢していた夫婦関係を離婚しやすくなるからである。

おしん時代の女は尊敬された。生活の困難や苦しみに耐え、自分を犠牲にしても子供や家族の為に尽くす。全てのものを育て、慈しみ愛する母。それが女の最も崇高な姿である。

平和は女の敵である。

男が女房に期待するメリットは、セックスが八〇%、身の回りの世話が一〇%、そして残りの一〇%は便利さと世間体や子供を含めた家庭内の憩いである。

これに対して女が夫に求めるものは、経済が八〇%で、セックスは一〇%、残りの一〇%はやはり家庭における安らぎである。

昔から『亭主は達者で留守がよい』とか、『女は経済力さえあれば、非婚の母が理想』と言われて来た。女にとって家庭は自分と子供の巣であり、子供は生きがいだが、亭主の世話は義務である。義務は無いに越したことない。経済力があつて生活の心配がなければ、亭主などという厄介なものは無いほうが良い。その時々に好きな男の子供を生んで、後は自分で育てればよい。

鳥の世界でもメスは、オスに巣を守らせ、エサを運んできさせてるので、交換に独占交尾権を与えて番いになつてている。動物でもメスにエサ取り能力がある哺乳類は番いになりにくい。女は妊娠という罰ゲームの代わりにセックスを武器に男をけん制し、男の経済力を利用出来る仕

組みになっている。

もともと女は生物学的にも生命力が強く、長生き出来ることではへこたれないし、自分独りで生きて行く生活力も備えている。問題は最大の生きがいである子育てである。特に人間の場合は生活環境が高度化し、自分と子供の巣を保つて行くことは大変である。どうしても男の手助けが要る。そのために交尾を条件に経済力を夫から買うことになる。通常の結婚形式では男が結納金を出して女をめどる形になっているが、実態は逆である。

ところが最近の日本、と言うより高度に発達した近代経済社会では、女房族のエサ取りはそう困難なことではなくなつた。女性向きの仕事や職場が増えたし、男女同権や職業上の平等が普及して、女性は男の手を借りなくても自分と子供の巣を営んで行く収入は得られる。その上女は生活に心配が無ければ、することが無くても精神的なストレスは発生しない。三食昼寝付きで、サンショウウウオのように動かず長生きする。長電話のおしゃべりやレジャーランド、ウインドウショッピングなどでも満足出来

る。

そして何よりも平和が女性を有利にした。平和であれば、物資の需給は安定するし、生活の不安もなくなる。

子供が育ってしまえば夫にも用はない。女は性欲の問題がないので、若い間はとも角、中年を過ぎればセックスは無くて済む。夫の定退後はもちろん更年期障害や閉経以前でも早々にお梅辞退し、一人暮らしを願望する。

そこで一番被害を受けるのは夫である。男にはセックスという厄介なものが必要で、男の性欲は死ぬまで続く。物理的なぼつ起能力とは関係なく欲求不満はどんどん募る。これを解決するために、古来、男は女の奪い合いや、略奪結婚、レイプまでした。文明が発達すると、殺し合いや過当競争を避けるために、一夫一妻制や結婚式といふ社会的認知や手続きを作つて、男の性の自由奔放な横行をけん制したが、男の本性がオスであることは何ら変わつてない。

昨今は従軍慰安婦や沖縄駐留米軍の少女暴行事件が問題になっているが、そもそも戦争とは、富と女性の略奪が目的だった。富や領土の奪取は最も簡単な生活手段の

入手であり、豊かさへの道である。女性入手も戦争の大好きな目的だった。

戦争に勝てば幾らでも敵の女を連れて来れるし、捕虜の女はセックス処理だけでなく、古来重要な生産力だった。男は戦争と動物性タンパク質を得るために狩りしかしなかつたが、女は衣食住全般を支え川魚捕りまで行なつた。機織りや食品加工も家伝の技術を持ち、重要な生産力である。そして女奴隸は女房以上に重宝な存在だった。むしろ近代文明は、女房が女奴隸の仕事を奪つたともいえる。

セックスの外、女房の夫に対するサービスに身の回りの世話がある。この部分で手抜きされると、夫は日常生活でたちまちお手上げになる。対応的には必要な物資やサービスを外部から購入することは可能だが、何かと不自由である。靴下にしても、履き捨てで新しいものを買えば良いが、昔は女房が夜なべして縫ってくれた。朝食は駅売りのパンと牛乳で済ませられる。家は寝に帰るだけの場所になる。女房のお世話になると言えばバーゲンで漁つた下着かネクタイ位なものである。

こうなると、『女房はリースで良いではないか』と言ふ暴論になる。

かつて昭和四〇年ころ、リース取引が日本に導入された時期、『所有より使用の時代』と言うキャッチフレーズが流行した。モノに特別の交換価値が見出せなくなつたら、使用価値で割り切るしかない。女房も本来の効用を發揮しなければ、リースの方が良くなる。

結婚方式は愛情とかサービスなど使用価値以上のものを求めて男は大きな犠牲を払うのだが、それだけの值打ちがないとなると、買い取り専属制よりもリースの方が便利である。家事や身の回りの世話は、ハウスキーパーや家政婦を雇つても良いし、モノは使い捨てにしても、結局はそのほうが安く済む。セックスは自由恋愛や売春婦で間に合うし、子供は代理母に頼めば良い。女房は一見経済的に見えるが、月給袋の巻上げや小遣いの出し渋り、資産形成の折半や遺産相続など、先行投資や固定費が高くついて、採算的には合わない。この際男は旧来の既成観念や思い込みを捨てて家庭の在り方を見直す必要がある。ハピネスの必要経費はその時々のサービスに応

じて妥当な代価で清算した方がよい。

二十一世紀の日本は女性の身勝手とモラトリームによって崩壊すると言われる。男は戦争で国を滅ぼすが、女は平和で国を滅ぼす。かくて夫婦別姓論は離婚容易化への一里塚になる。

「ワン・ワールド」

岩崎 洋一郎

この言葉を初めて知ったのは終戦直後であった。戦時中は閉ざされていた窓が占領軍の進駐と共に一斉に開かれ、外から新風が押し寄せた。ジャズを耳で、新着洋書は眼で貪った青春時代が懐かしい。忘れ難い本の一つに米国の進歩的政治家のW・ウイルキーの「ワン・ワールド」がある。戦時に書かれたこの短い本は、戦後の植民地の独立と、自由と民主化により旧来の支配構図に革

命的変革が世界中に起きる事を予言していた。今日冷戦を経て、漸く世界は一つになりつつある。

政治面のみならずビジネスや生活面もインテグレートした一つの世界が出来上がりつつあり、二十一世紀には益々この傾向が強まる兆しを見せていく。昭和三十年初頭から製造業に身を置いた私にとって「国際化」は原料輸入・製品輸出と革新的な外国技術の導入による新事業の展開を意味した。昭和四十年代初期に早くも陰りが見えてきた繊維産業にとって次は加工事業を低賃金の外国で展開する事に変わった。昭和五十年代になって非繊維の特殊製品を先進国において現地生産する事に変貌していった。冷静に見るといずれも日本の本社の発展と都合の為の限定された「外での国際化」の性格を持つ。

二十一世紀の国際化はもとと深くそして幅広い性格のものではなかろうか。既に新しい形の「国際化」の兆候は我々の周辺で見られる。近所のスーパーには欧米はじめインドネシアやナイジニア等諸々の國の人たちを毎日見掛ける。我々が日常食べる魚も野菜も加工食品も既にボーダーレスである。社会生活は好むと好まざるにか

かわらず早いテンポで「内なる国際化」をしているのが実情である。

この国際化を一層早めるのが情報革命であろう。通信技術の進歩により衛星等を使用して無線で電話通信ができる大変革がある。日本では単に便利さが人気を集めているが、ブラジルや中国にとってはこの無線携帯電話は革命を意味する。広大な国土を持つこれらの国や離れ小島の多い国々では、全国に電話線を敷設するのは想像を絶する大事業である。言ってみれば、鉄道を全国に渋らさず敷く代わりに、一挙に飛行機で往来するようなフェーズ・チェンジに匹敵する。勿論それなりの投資が必要であるが、投資効果も恩恵も格段に向上する。

更に情報革命は電子通信やインターネット等で、安く早くそして国境を飛び越えて情報の交流を可能にした。インターネットについては多くの本があるので、此処で素人が論ずる愚を避けよう。ただ注目したいのは何語で通信し合うのかである。先行している米国的情報は当然英語を用いている。日本人はどうするのか。将来、性能のよい自動翻訳器が開発されるかも知れないが、充分に

役立つようになるにはかなりの月日を要しよう。東南アジアの諸国は多くはかつて英米の植民地であったが故に英語力のレベルは可成高い。アジア主義者とみられてゐるマレーシアのマハティール首相でさえ「自國語に固執して後進国になるより英語を習得して先進国になろう」と檄を飛ばしている。自国の文化と国語に絶大な誇りを持つてゐるあのフランス人もビジネスでは英語を必須としている。国有企業の雄であつた仏国エルフ社のトップは皆英語が達者である。彼らは一様にエリート学校出身であるが、国際社会において活躍する当然の資格として、卒業するには英語を不自由無く話せることが義務づけられている。仄聞するところによると中国でも政府は大学生に英語を習得するよう強く指導して居るとの事である。国際社会に復帰してみて、欧米の技術や法体系などを熟知する必要性を痛感しての動きと聞く。

翻つて日本の現状はどうか。日経ビジネス誌（一九九五・八・二十八号）に三菱商事の社長が「社内の公用語は英語にしたい」「ビジネスに適した言語は英語です」と言い切っている。今や商社も製造業もサービス業もす

べてのビジネスは世界中であゆる形で事業に関与して深く入り組んだ関係をもち、活躍の舞台は広い。また世界各地の日系企業に現地人の幹部や従業員が増えている。グローバルに見渡せば、日本語を公用語にするのは非能率の極みで、意思の疎通がはかれない。国内は日本語で、国外は英語と使い分けるのも、内外ビジネスが有機的に連携している現状からすると、円滑な業務が期待できな。例えば、外国から大きな商談を提案された場合に、膨大な資料や契約書を一々日本語に翻訳した上で審議したりしていたならば外国の競合他社に遅れを取ることは間違いない。

併し、日本の経営陣はどこまで新しい意味の国際化を真剣に且つ身近に受け止めているのだろうか。かつて日本製造業は生産効率や改善運動や権限委譲等で世界をリードしていた。だが今や蘇った米国に技術革新や先端ビジネスのみならず、生産性そのものにおいても完全に遅れをとつてゐる。米国の経営者は言う「我々は常に全世界を相手に競争している。ホーム・マーケットも外資に開放して熾烈な競争に打ち勝つてゐる。それでこそ、

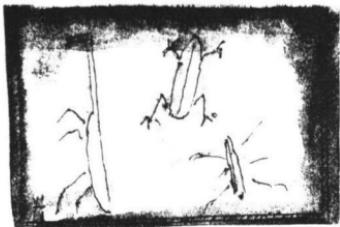
「真の競争力が身につくのだ」と。彼らは世界市場を踏まえて大胆にビジネス戦略を決める。商品のライフ・サイクルや新製品の開発も世界市場の動向を見ながら進めている。グローバルにナンバーワンにならないと生き残れないとの視点を明確に打ち出している。その為には国内外の情報をいち早くリアルタイムで入手する手段と意欲を持つ。英語を（準）母国語にもつ競争者は運がよいのだと諦観するのではなく、当方もビジネスの公用語である英語で勝負しなければなるまい。さもない、シンガポールやインドは言うに及ばず中国にも置いて行かれる危険がある。英語教育は学校に任せることではなく、企業がその戦略的重要性を再認識して積極的に投資対象として資源を投入すべきであろう。友人の元大蔵省の通貨プロも先の商事社長も、今の若い世代の英語力は我々昭和一桁生まれより落ちていると心配している。これら少數の国際ビジネスの眞の有識者たちは今日の日本ビジネスマンの英語力の欠如を国家的な重大問題と捉えている。

先に引用した「ビジネスに適した言語は英語です」なる発言にはもう一つの意味があると愚考する。言語はそ

の国の文化や物の考え方と密接な関係がある。「トンネルを出ると、そこは雪国であった」と言う極めて情緒的な名文がある。しかし、その名文の持つ美しい曖昧さは正確に英訳できそうにない。そこが問題である。詳しくは鈴木孝夫氏の「ことばの社会学」（新潮社）等に任せると、ビジネス界において、特に国際交渉においてはこの辺りの独自の表現体系に問題があると考える。つまり日本語の文章や発言が英訳しにくいという次元を越えて、日本的な発想やロジックの持つ曖昧さがビジネスや政治では問題にならざるを得ない。その例として政治家の度重なる不適切な発言と訂正のし方。不法行為に対する責任の取り方。実施とチェック機構の癡着。実体的議論が欠如した会議での形式的な採決。同業や仲間同士のみに通じる理屈と談合体质等々。

今や、世界は「零・一」のデジタル時代に入っているのに曖昧さを基本に置く思考体系とそれを表現する日本語の本質を見極める必要があろう。少なくともビジネス人として考え且つ動く場合には日本語・日本の思考の特徴と限界を充分理解した上で行動すべきであろう。これ

は決して日本語否定論ではなく、寧ろ日本と日本語を愛するが故に、とことん本質を見定めた上で激しさを増した国際ビジネスに対処しようとの提案である。二十一世紀は政治でも経済でも本当の意味でワン・ワールドの実現に近づく時代であろう。反面、日本にとって一流国として生き残るか死ぬかの瀬戸際になるのではないか。一方では固有の世界に冠たる文化文明を継承しながら、他方では国民の幸福と豊かさを保持するために経済大国の位置を確保してゆく。それにはビジネスでは世界市場を視野に入れ、世界に通ずる言語である英語をビジネス公用語として改めて認識すべきであり、そのための意識革命と投資をすすめるべきであろう。



日米抱き合い心中か

村田 孝四郎

よく日本はアメリカの一〇年後を追いかけているといわれる。とくに社会、経済の面でその傾向が強い。そこで、今のアメリカの社会問題の現状を見てみよう。これが二一世紀の日本の姿にならないことを祈りたい。

殺人年間二万三七〇〇人、レイプ同一一万人(実際には、女性の一一%がレイプ被害者とも)、強盗同六七万件、住居押込み同三〇〇万件、窃盗同八〇〇万件、車の盗難同一六〇万台、児童虐待死同一二〇〇人、入獄者一一〇万人、銃の氾濫一億三〇〇〇万丁。

アル中一八〇〇万人、麻薬中毒者九五〇万人、重度麻薬中毒妊婦四〇万人。

初婚者の離婚率六〇%、親の離婚を経験する子供四〇%、実の両親の揃った子供五八%、子供のある家庭の三〇%が片親家庭(白人二五%、黒人六三%)、外で働く母

親七五%、小学生鍵っ子六〇〇万人(四人に一人)、新生児の二六%は未婚の母親から生まれる、毎年一〇代女性(一五)一九歳)の一〇〇万人(一〇人に一人)が妊娠し三二万人が出産。

貧困家庭三九三〇万人(人口の一五%)、無保険者三九七〇万人、ホームレス三〇〇万人。

小五レベルのものしか読めない準文盲七〇〇万人、識字率は世界で四六番目、生徒の国際試験では先進国中最下位(メキシコ、ヨルダン並み)、高校中退二五%。

性病年間一三〇〇万人(一四歳以下では年間四人に一人)、エイズ感染者推定一五〇万人、エイズ患者累計五五万人、エイズ死者三〇万人。ホモが人口の五%。

これらの一つ一つがとてもなく大きい問題で、その解決は容易ではない。そして、これらもろもろの社会問題のほとんどは家庭崩壊が原因となっている。その家庭崩壊をもたらしたのは、一九六〇年代後半に始まった女性解放運動と、その帰結として一九七六年に始まった性革命であるといえる。

アメリカ社会の劣化は、女性解放運動や従来の価値観

や規範に反対する「カウンター・カルチャー」と称される、もちろんの社会改革運動と同じ時期に始まっている。アメリカの繁栄のピークは一九五五年といわれるから、ピークからわずか一〇年で劣化が始まったことになる。いが、その結果は惨憺たるものである。まず、六〇年代からの動きを見てみよう。

一九六〇年 経口避妊薬ピルの開発に成功、婚前・婚外セックスの下地を作る。

一九六三年 ベティー・フリーダンの「フェミニン・ミスティーケ」が刊行され、女性解放運動に火をつける。連邦最高裁が公立学校での礼拝を違憲として禁止。これ以後、学校の規律は乱れ、生徒たちは麻薬、セックス、暴力に走るようになる。ケネディ大統領暗殺。一九六四年 連邦議会が人種差別撤廃法を可決、人種对立が激化し始める。ベトナム戦争開始、アメリカ人の自信喪失と麻薬の蔓延、犯罪の増加につながる。

一九六六年 連邦最高裁がポルノの古典「ファニー・ヒル」の出版を認可。以後、堰を切ったようにポルノが氾濫。

一九六八年 マルチン・ルーサー・キング牧師の暗殺。

一九七二年 ウォーターレート事件発覚、大統領の権威失墜。

一九七三年 連邦最高裁が墮胎を合法とする判決を下す。

以後、少女妊娠が増加。

一九七六年 本格的性革命が起こり、不倫、未婚の母、家庭崩壊へとつながる。

そして、八〇年代に入ると劣化は急速に進んだ。麻薬が大流行(八五年クラック出現)し、麻薬がらみの犯罪や事故が激増した。家庭崩壊も一挙に進む。離婚件数は六〇年から八〇年の間に三倍増した。倫理に厳しいピューリタンの勤勉な社会が、たった一世代でこうも変わり得るのである。多くのアメリカ人が驚愕するのも当然だ。

外で働く母親は六〇年には三〇%だったのが、七〇年には四〇%、七九年には五〇%、八九年には七五%(日本は七〇年一八%、八九年三二%)と激増し、小学生の

四人に一人が鍵っ子となる。他人に預けられる未就学児童は七九年には四二%、八九年には六八%。家庭が崩壊した原因是家庭を守るべき女性が外に働きに出たからだと多くの識者は見る。

人類は長い間、衣食住の充足を求めて悪戦苦闘してきた。それが充足されるようになると、今度は快適さや便利さを求めた。暖衣飽食、住居や家事は高度に電化、自動化、コンピューター化され、自動車、航空機、テレビ、パソコンその他交通通信情報手段も急速に発展し普及した。そして快適さや便利さが満たされると、次には快樂や無制限の自由を求めるようになった。アルコール、グルメ、ギャンブル、麻薬、ポルノ、フリーセックス……。しかし、快適さや便利さは人間を怠惰なものにさせ、エネルギーの浪費、資源の枯渇、環境の破壊をもたらした。さらに快樂や無制限の自由は個人の心身を蝕み、暴力や犯罪を助長し、家庭を崩壊し、社会を混乱に陥れた。快樂や無制限の自由の後につくるものは人類の滅亡でしかなり。アメリカがその手本を示してくれている。

びるだろう。その時期はちょうど白人がアメリカの人口の半数を割る時期と不気味に一致する(今は七五%)。

日本もアメリカ同様、「快楽や無制限の自由」の段階に入った。ヘア・ヌード、アダルト・ビデオ、ポルノ・ショップ、ポルノ・コミック、俗悪テレビ、エログロ週刊誌などが氾濫し、少年少女を非行に走らす。不倫の横行、ホモの容認、婚外子の容認、未婚の母の容認、夫婦別姓の容認、外で働く母親の急増などは間違なく家庭崩壊につながる。家庭は社会の細胞で人材を供給する場だから、これが崩壊すれば社会が崩壊して国が滅びる。

そのうえ、最近の日本では犯罪の凶悪・低年齢化、外国人犯罪の急増(九三年は八三年の一〇倍)、麻薬濫用、いじめの陰湿化、過激カルトの出現など暗い社会現象が目立つ。

経済の面を見ても、低成長、国際競争力の低下、産業の空洞化、不動産価格の下落、金融機関の倒産、財政赤字(国債発行残高二二〇兆円)、デフレ、企業の首切り、新卒者の就職浪人、失業者の増大(完全失業率三・一%、実質失業率一〇%)、生活水準の頭打ち、高齢者人口の

増加(六五歳以上一三・五%)など看過できない現象が多い。これらは将来もっと悪くなる。景気が急速に、否、一度と再び回復するかどうかはきわめて疑わしい。

かくて加えて、政治家のお粗末さである。スキヤンダラスな議員、変節議員、世襲議員、タレント議員、運動選手議員。誰が考えたって、こんな議員ばかりで日本の政治を正しく、効率的に動かせるわけがない。小学生を含めて、国民はとうに政治家を見離している。

日本もこのままでは間違なくアメリカの後を追う。殷鑑遠からず。日本は今こそアメリカを反面教師として、軌道を修正しなければならない。

そのためには倫理教育(この言葉が悪ければ、社会ルール教育といつてもよい)の徹底、俗悪テレビ番組の追放、ポルノ厳禁、無責任なエセ文化人の撲滅などが急務となる。そして、何よりも実の両親の揃った健全な家庭を作り維持することが必要である。野放図な自由や欲望を抑制し、倫理を奨励し、我慢の哲学を教えて、質実剛健な社会へ復帰するしかない。つまり、アメリカが一九六〇年代以降、せつせとやってきたことと反対のことをすれ

ばいいのである。それができないなら、日本はアメリカと抱き合い心中するほかない。

「五年日本の死」という本を文芸春秋から出版されている。そのなかで彼は「二〇二五年に日本は『二百一』の共和国に分裂、沖縄も独立、皇室はバチカンのようになるという、近未来シミュレーションをしているが、現時点での日本の将来には、次の四つの選択肢があると書いている。

アメリカの属州に

都甲昌利

「どうなる、どうする、二十一世紀」、この題が好きである。「どうなる」は世界や日本が私の意志とは関係なく変化してゆくことで、「どうする」はその変化に対しどうやって生きてゆくかという命題で、「二十一世紀」は四年後から始まる百年続く未来であるので、そんな先のことを言つても私が生きているのかどうかも判らないし、ある程度勝手で自由なことが言えそそうだからだ。

先日、日本経済新聞社の論説主幹、市岡揚一郎さんの「日本の将来、二つのシナリオ」と題してのお話を聞いた。市岡さんはまた、水木揚というペネロームで「二〇

(三) 通信、航空などのインフラを強化整備しヘゲモニーを握るマキャベリズム国家を目指す。

(四) 全くの無策で、時の流れに任す。

講演もだいたいこのような主旨でおこなわれたが、私はもうひとつ選択肢があるのではないかと思った。それはアメリカの一州になることである。いま日米間にいろいろ難問が存在している。貿易摩擦、金融為替、少女暴行で始まった沖縄の米軍基地問題、駐留米軍経費分担問題、PKO、ひいては日米間の最大の問題である日米安保問題、などが存在し両国に暗雲がたちこめてい

る。日米摩擦は益々拡大して、いざれば第二次日米戦争が起らざることも限らない。「THE SECOND U.S.-JAPAN WAR」という本を書いている学者もいるくらいである。

日本人が快適に暮らすには日本がアメリカの属州になるのが一番よい。いま述べたような問題はすべて解決する。

更に、物を生産する人間、金の卵を生む有能な人間がドンドン海外へ流出し、日本経済が無力化してしまう心配もなくなる。日本が空洞化するかどうか心配する必要もなくなる。円高、円安など為替問題もなくなり、円高による物価高、価格差で困っている日本の庶民も生活が楽になる。規制撤廃なんか直ぐできる。この選択肢に反対なのは、日本の国会議員と官僚と競争力のない企業の経営者ぐらいであろう。大蔵、建設、運輸、農林などの族議員などは規制があるから旨い汁を吸うことができるからだ。

日韓、日中問題などもすぐ解決する。日韓問題で日本の政治家の発言が韓国でとりあげられ、大臣の要職を辞めさせられるということもなくなる。韓国人が言ふから問題にするのであって、アメリカ人だったらあんなに激しい態度はとらないだろう。日韓問題は感情的になり過ぎてゐるようと思える。日本が日本であるかぎり、また韓国が韓国であるかぎり、イスラエルとアラブの対立のように、二千年は続くであろう。

日中関係にしても、痛いほど日本の侵略をうけた中国は日本の再軍備を恐れている。日本がアメリカと離れ、強大な軍事力をもち、ひとり勝手に行動されではたまらないと思っている。日本も南京虐殺問題や台湾問題で、中国政府から侮辱的な内政干渉をされなくて済む。昨年、

中国の江沢民国家主席が初めて韓国を訪問し、日本の歴史認識をめぐり共同歩調をとり日本を非難した。日本政府はもう袋のねずみである。日本人が米国人になると徵兵制という問題がでてくる。これは、我々年配者には関係ないことがあるが、いまの日本の若者には、規律と服従を重んずる組織が必要と思われる所以、属州になってもさしつかえない。

日米関係を歴史的にみると、国家としての交流は、幕末にペリーが浦賀にやってきて、日米和親条約をむすんだのが最初で、この幕末から日露戦争までの五十年間は非常に友好的な時代だったと思う。津田梅子がわが国最初の留学生として渡米し、帰国後、女子英学塾を開き、女子の専門教育に尽くしたり、咸臨丸が福沢諭吉をふくむ遣米使節団を乗せて、日本人操艦による初の太平洋横断に成功、新島襄も米国に留学、帰国後キリスト教を基礎とする大学を設立、また、北海道開拓使として招聘されたクラーク博士は、札幌農学校の教頭となり、キリスト教信仰に基づく教育は内村鑑三や新渡戸稻造ら学生に強い影響を及ぼした。日露戦争が終わり、ボーツマス条

約が締結された時も、講和の斡旋をしたのはセオドア・ルーヴェルトであった。

日米関係が悪くなったのは、日本のアジア政策とアメリカのそれが中国で衝突した一九三〇年頃である。この衝突はパール・ハーバーで太平洋戦争として始まり、広島、長崎の原爆投下という不幸な形で終了するのであるが、戦後はまた蜜月時代を迎えるのである。アメリカの作った新憲法や新教育制度を受入れ、戦争花嫁として、多くの日本女性が米兵に嫁いで行き、学者、学生も米国留学が流行になった。鬼畜米英と憎み、戦闘を交えた後で、こんなにも従順で友好的に推移した二国は歴史上例がないのではないか。現在、日本人の海外旅行者は千二百万人を越え、多くは米国行きだ。アメリカが好きなのである。

ここに日本がアメリカの一部になる素地は十分ある。反対するのは、前述したように日本の政治家や官僚たちであろう。日本の首相などは今でも州知事みたいなものである。

米国憲法によると、合衆国大統領になるには米国生ま

れでないとなないので、私たちの子や孫は無理であるが、ひ孫あたりには大統領になるのが出てくるかも知れない。こういうことを考えると楽しくなる。で、次ぎに私は「どうする?」私はもう、その時にはこの世はない。土けらになっているだろうから、どうしようもない。

日本の未来は明るい

角谷朗宏

私は昭和三年生まれですが、五十才前後の頃、果たして二十一世紀を迎えるまで生きられるかどうかと懸念していましたが、今あと五年となると、トンネルの向こうに光が見えて来た感じで、それだけに真剣に二十一世紀を考える気持ちも強くなつて来ました。吾々はいつも新年を迎える際には新しい気持ちを持ち

ますが、これが世紀が変わるとなれば、それだけ大きな抱負をもつて然るべきでしょう。そうかといってそのため遠い将来を予見するとなると、非常に難しい問題ではないかと考えます。

最近私が特に感じているのは連日新聞をにぎわしているバブル崩壊の後始末に関する色々の事件についてです。当時はごく一部を除いた多くの人達が引き続き右上がりのバブルの継続を予想していたものが、僅か五年足らずの間に考えられないような変化がありました。この状況を見ると、これから長い将来について私のような平凡な人間が予見することは極めて至難の業といわねばなりません。従つて私としては二十一世紀を迎えるに当り、私にふさわしい課題として『日本人の素質』と『日本憲法問題』の二つを取り上げて見たいと思います。

一、日本人の素質

最近私は何人かの外国人と日本の将来について意見を交換する機会を持ちました。自分で予見が難しいことから彼等に頼ろうとした気持ちがあつたかも知れませんが、弁解をさせて頂くならば、外国人のほうが局外者として

冷静かつ公平に日本人を見ているともいえます。その際の注目すべき意見として、日本の将来はこれから千變万化の時代を迎える色々の糾余曲折はあるだろうが、引続き非常に明かるいのではないか。その理由としては、日本人は全世界を見回してもドイツ人と並んで特にすぐれた素質をもつた民族であるからとのことです。

確かに戦後五十年間の日本の発展ぶりはドイツとともに目を見張るものがありました。両国とも敗戦国として徹底的に破壊され、当時学生であった私が東京の焼け野原に立つたまま、此の国が再び繁栄を迎える時があるだろうかと感概にふけったこともありましたが、これも全くの取越し苦労に終わりました。なるほど何も取立てるような資源がある訳ではなく、優秀な人材だけが唯一の頼りでした。それはドイツも同じことでしょう。ドイツの場合はその後東ドイツの合併という重荷もかかってきましたがこれも着々と解決に進んでいる様です。現在では世界中で最も強力な通貨といえば、ドイツ・マルクと日本円であり、今後もこの二つの通貨即ち両国の経済が世界を先導して行くことは間違いないように思います。

冒頭述べたように私には二十一世紀への明確な見通しは出せませんが、日本人の素質の優秀性から、基本的には日本の隆盛は続いて行くことを信じたいと思います。勿論目下大きくかぶっているバブル崩壊の波は引続き日本に押寄せてくるでしょう。また円高の影響から発生した日本産業の空洞化も急速に進んでおり、その舵取りはけつしてかんたんではありません。恐らくバブルの処理は今世紀一杯かかるともいわれています。逆の考え方をすれば、日本人にとっては大きな試練を経てることになり、二十一世紀の経済運営にこれが活かされるのを期待したいと思います。産業の空洞化についても各製造業者のキメの細かい対策が着々と進んでいると言われており、その効果が芽生えて来ているように見受けられます。

二、日本憲法問題

私としては二十一世紀を迎えるにあたり一番心配されるのは、日本人の心の問題ではないかとかんがえます。ある意味ではこれは経済的或いは物質的問題よりも日本人にとって重要でしょう。

最近良い話と不愉快な話一つずつを聞きました。阪神

大震災は非常に残念であり罹災者の方々には御見舞い申し上げますが、そういう不幸の中で、罹災者の方々の間では、相互に良く助け合いその道徳水準は非常に高いものであったとのお話を聞きました。これは外国ではまず考えられないことで、日本人の心がそこまで高くなつて来た訳で、吾々は自信をもつてよいと思いました。一方不愉快な話としては或る政治家がオフレコの約束で話をしたところ、それが即座にニュースとして流され国際問題にもなりましたが、そこには約束を守るという道徳心さえ無い人がまだ日本にいるということでしょう。幸い前者は多くの人々が関連した問題であり、後者は一部のマスコミ・グループだけのものであるとすれば、かなえの軽重の点では比較になりませんが、こういう話を聞くと、日本人の心の問題にも急に自信がなくなり、まだ努力が必要なのかと迷っている次第です。

私としてはこの日本人の心を高める基礎として、二十一世紀を迎えるに当たり憲法の問題を考えて行きたいと思ひます。日本の憲法は敗戦後起草されたもので、当時は当時の有力な日本憲法学者によつて検討が開始されま

したが、その内容が天皇に主権を残すものであつたことから、当時アメリカ占領軍のマッカーサー元帥が激怒し、直属の部下に直ちに日本の新憲法を作成するように命じ、当惑した彼等は当時同じくアメリカの植民地であったフィリピンから資料を取寄せて検討を進め完成したのが現在の日本憲法といわれております。マッカーサー元帥の対日占領政策については現在色々の意見がありますが、私としては外国占領軍によるものとしては妥当なものではなかつたかと思います。もしアメリカ以外の国、例えばソ連が占領していたらどうなつていただか考えるだけでもぞっとします。従つて私がここで強く主張したいのは、これだけ立派になつた国が外国人によつて作成された憲法に満足していくよいのかということです。確かに過去五十年間現憲法のもと経済発展に専念出来たことは幸運であったと思います。しかし二十一世紀を迎えるに当たつては矢張りわが国として、日本人のための、日本人によつて作成された新憲法を持ちたいと考えるのは私だけでしょうか。唯それを実現するには率直に

いって現在の日本の政局もすつきりしていないように見られます。日本の有力政党である自民党、新進党ともに其の所属議員は選挙上の自己都合で離合集散しているに過ぎず、其の政治的見解がはつきりしていないため、これでは肝心な憲法論議すら出来ないのではないかと懸念されます。又かつては反米運動に近いことをやっていた左翼政党が護憲護憲とふれ廻っているのも皮肉な現象だと思います。

二十一世紀を迎える迄には日本の政局もこれにふさわ

しく整備され、少なくとも憲法論議に対しても政治家自身がはつきりした立場で議論ができるようになって貰いたいと思います。それには選挙制度の再改正が必要なのではないでしょうか。

最近行われた世論調査では、現憲法をそのまま続けて行こうという意見が有力であり、新憲法どころか憲法改正には必ずしも有利な線が出ていない様ですが、ここで誤解していただきたくないのは、私の主張は日本人自身による新憲法を制定しようという心の問題であります。

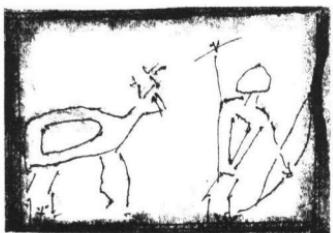
例えば国民の間で充分に議論をつくして制定された新

憲法の内容が従来の憲法と非常に似たものになるかも知れませんが、それはそれでよいのではないかと思います。

しかし国民の総意をかけて新憲法を制定するとなれば恐らく国民投票の形式をとることが望ましいでしょう。そ

うなれば二十一世紀を迎えるに当たり日本がどういう国になって行くのが望ましいのか、特に国際関係でどの様な役割を果たして行くのか、ということも充分に議論され日本人としての最適な線が見出されて来ることを期待します。

私は此の問題を二十一世紀を迎える日本人の心の出发点にしたいと考えます。



「宅配新聞」に未来はあるか

林 篤二

世界に冠たる宅配制度　日本は世界でも有数の「新聞大国」である。ユネスコ調べの一九九〇年の数字では、総発行部数七、二五二万部（一日当たり）普及率は人口一、〇〇〇人当たり五八〇部、一世帯当たり一・一二部。いずれも断トツの首位である。個別にみても現在日本一部を誇る「読売」は一千万部を超え、「朝日」も八百万部以上という。欧米で最も部数が多いといわれるドイツの「ビルト」でさえ六百万部だから、日本の「大新聞」の巨大さが判らう。

この大部数を支えているのが「宅配」であることは周知の事実である。「宅配」とは月極め予約の戸別配達制度のことと、夕刊紙、スポーツ紙を除く「一般紙」の総発行部数の九九%は、この宅配によって販売されている。宅配制度は欧米にもある。ドイツ七一%、アメリカ五五

六〇%、イギリス四〇~四五%、フランス一五~二〇%等々だが、朝・夕刊とも配達されるのは日本だけで、宅配が新聞購読に占める比重は、日本が際立つて高い。日本の新聞宅配の歴史は古く、明治八年一月一日、東京日日新聞（毎日新聞の前身）が始めたのが最初で、その後各社競ってこの制度を採用した。日本に宅配が根づいたのは、同一言語を使う單一民族で、識字率が高いことが要因とみられるが、何といっても手取り早く部数がふやせる経営メリットがあつたからだ。

月決めの予約購読なので、一種の注文生産であり、売れ残りが出ない。系列下の販売店を強力にすれば、配達金のみならず、部数拡張までやってくれるから、労せずして安定した販売収入が見込める。これが戦前・戦後を通じて新聞社の経営規模を拡大、発展させる大きな要因となつた。

ところが最近、「規制緩和」の波が新聞・出版業界にも押寄せ、宅配制度の基盤をゆるがすこととなつた。九年夏、公正取引委員会の再販（再販売価格維持）問題検討小委が新聞・書籍の再販制度見直しを求める中間報

告を出した。これを受けた政府の行政改革委員会の規制緩和小委も、再販制度原則廃止の線で検討していたが、

新聞・出版業界、文化人あげての反対キャンペーンに押されて、十一月七日公表された報告書では「今後の検討課題とする」との表現で結論を先送りした。

「全国どこでも同じ価格で同じ新聞が読める」のが再販制度だが、これはまた同時に宅配制度を支える柱でもある、というのが新聞社側の主張だ。再販制度がなくなると、販売店間の値引きによる読者獲得競争が激化し、競争力のない販売店の倒産が続出、効率の悪い配達地域の切捨てや配達拒否の事態も予測されるという。

公取委や行革委の論議が再販廃止に傾くのを見て、大新聞は各社歩調を揃えて「公正報道を支える再販制度」を掲げた。規制緩和で政府のシリを叩き続ける新聞が、自分のことになると、再販維持に紙面動員するのは特権乱用ではないか、との批判の声も一部にある。

しかし、それほど大新聞は、再販制廃止→宅配制崩壊

のシナリオを恐れている証拠ともいえる。

さて私は個人的には、新聞・出版のような文化産業には、野放しの市場経済原理はなじまないと思うが、その反面、大新聞には、宅配による大部数の上にあぐらをかく紙面の低調、不勉強、独善等々について強く反省を促したい。

宅配制度の功罪 NHK放送文化研究所による調査（九〇年一〇月）では、国民一人のマスメディア接触時間は、一日平均で、テレビ三時間九分、新聞二〇分。新聞を全く読まない人が一〇才以上で五五・二%もいる。

「よく読む新聞記事」の調査では、トップが「テレビ番組」で六六・四%、以下「社会」「地域」「スポーツ」「国内政治」と続く。また「新聞記事の信頼度」では「信頼性がある」「まあまあある」が合計六三%あった。

この数字からみると、現在の新聞は
一、大部数配られているが、あまり読まれていない。
一、読まれないけれども、他のメディアに比べて、記事はある程度信頼されている。

という読者の購読姿勢がみえてくる。これは阪神大震災、オウム事件のような大事件が起きたとき、駅売りの一般紙が忽ち売れる現象からも推察できる。

宅配によって新聞が国民一般に、比較的信頼度の高いニュースや論評を提供して、社会への関心を高め、活字文化を普及させた効果を否定するものではない。どの国を問わず、店頭で販売される新聞は、人目を引くため、どうしても誇大で煽情的な表現、見出しに走り勝ちだが、宅配の新聞には、その傾向は余りみられない。

しかし宅配新聞の持つ宿命として、男女を問わず、あらゆる階層、年齢の人を対象とする「大衆新聞」を指向せざるを得ない。これは同時に新聞報道が、大衆迎合のセンセーションリズムに墮する危険性を、常に内包することになる。複雑な事象を、善か悪か、白か黒かの単純な二分法で報道する。反対に論説はどっちつかずの曖昧さを残す例が多いのは、この大衆指向の宿命から来る。歐米にみられるクオリティ・ペーパー（高級紙）が日本にみられないのも、日本の新聞販売の宅配への依存度が余りに高いことに根本原因があるのでないか。

“選んで買う”新聞の時代　いま一般紙の部数が伸び悩んでいる一方で、年々伸びているのがスポーツ新聞である。首都圏地区でトップを争う「スポーツニッポン」と「ニッカントスポーツ」は、ともに九五年五月に百万部面作りを、社会・政治ダネにまで拡大したことだとみられる。とくにオウム事件発生後は連日のように「オウムもの」を一面トップに掲げ、部数をグングン増やした。スポーツ新聞も朝・毎・読など大新聞の系列下にあるため、宅配と無縁ではないが、その依存度は格段に低い。「即売」と称する駅売店などの店頭売りが、最近はコンビニにも拡がった。一般紙の宅配は断わって、もっぱら駅で買うスポーツ紙ですませる読者がとくに若い層に広がっている。

五五年体制の時代に“新聞はどれを読んでも皆同じ”との批判がよく聞かれた。それでも宅配体制さえしつかりていれば、部数は増えた。新聞の個性を読者が選んで購読する時代が、最近まで日本にはなかつたといってよい。

さすがに各社とも、それに気付いたのか、全国紙については、今までよりも、はつきりした主張を個々の新聞が持つようになった。本当の意味の「紙面競争」が始まつたようだ。

スポーツ新聞の活況は、この「読者が選んで日々の新聞を買う」時代の予兆かも知れない。またもう一つの側面は、日本の新聞が、大衆紙と高級紙に分化してゆくシグナルとも受取れる。

一方にマルチメディア時代の到来があり、また一方に広告ばかり目につく莫大な紙の“浪費”に対する環境保護派の批判の声もある。宅配新聞が来世紀も今のままの形で、大部数発行されることは到底考えられない。

さて「大新聞」の百年の計やいかに。

(文中のデータはNHKブックス「図説・日本のマス・コミュニケーション」などを参考にしました)

である。

聞いていて嘔然としてしまった。今の世に、昔の軍国主義時代に逆戻りするようなこんなことが許されるはずがない。

しかし、話を聞いていると、若者、とくに男の大学生層の情けないいくつかの例があげられたが、なるほどと

若者よ、しつかりせい

＝二十一世紀にどう生きる＝

遠藤俊也

ある晩、旧海軍のグループの忘年会に出席した。

宴酣になったとき、伊豆で大きな温泉旅館を経営している当時の上官が

「いまの若者は一体何だね。元気もなければ、礼儀も知らない。やはり、少なくとも一年ぐらいは全部に共同生活をさせ、心と体を鍛え直さねば……」

と、いかにも旧軍隊の組織教育の復活が必要だといわんばかりに言うと、二、三人が即座にそれに同調したのである。

肯けるものばかり。その一例は、よく引き合いに出されるが、電車の中の若者の姿勢だ。

「全く最近の若い男には腹が立つ。道徳感などみじん

もないのと違うか。立っている人がいる電車の中で、大きな体に高足がにののような長い脚を投げ出して、口を空けたまま居眠りするか、マンガ本を読むかして、目の前に立つ老人に席を譲ろうともしない。その点、若い女性の方がシッカリしている。マンガ本でなく、たいてい単行本か雑誌を読んでいる。老人が近づくとすぐ立って席を譲ってくれる」と。

これに関連してまず思うのは、最近の女性の生活力の遅しさだ。それに、はじめて勉強している。

大学の文科系は女子学生がどんどん増えて、文学部などは女子大になってしまったようだという。女流作家や女性の学者の急増はいわずもがな、法曹界でも、女性の判事や弁護士までがチラホラ生まれつつある。病院でも、医師の白衣をつけた女性がメックリ目立ち始めた。歯医も最近は半分が女性だと聞く。

このように、男の職場が徐々に女性に浸蝕されつつあ

る上に、平均寿命が男七六・五七歳、女八二・九八歳になつたのだから、高齢者社会でも女性の活躍が伸びてきている。

定年を迎えた男の妻は、子育ても終わり子供と別れて暮らすと時間が余つてくるため、けいこ事とか趣味活動にも精を出すことができる。カルチャー・センターも年輩の女性で埋まり、張り切って出掛けた友人の男も女性がズバ抜けて多く、圧倒されて途中でやめてしまった。また、近郊の歴史散歩などといって、サブリュックを背にしたオバサンたちの列をよく見ることになる。

あるアンケート調査の結果によれば、「ひとりっ子を持つならどちら?」という問いに、一九八〇年代には男性は八〇パーセントへ男の子▽だったが、いまは男性でも△男の子▽希望者は五〇パーセントに減り、若い世代だけでもみると圧倒的に△女▽だそうだ。

また、「生まれ変わるとしたらやはり女に生まれたい」という女性は六五パーセントだとのこと。戦前は、「生まれ変わるなら次は男に」という女性がほとんどだったことを考へると、大変な変わりようである。

以上、若い世代、高齢者双方とも、どうも男の方が分が悪い。戦中派の男として、「これは一体、ドウナッテンダ」と叫びたいくらいだ。



十二月十六日の朝日新聞にアイルランドから来た英会話の教師が、「元気がないね。日本の子ども」と題して投書していた。

彼によれば、英語を教えている高校生に自分自身を表現する形容詞をたずねると、一様に「悲しい」という答が返ってくるそうだ。また彼は言う。「子どもにとって、学ばねばならぬ大切なことの一つは、自分自身で決断を下すということです。——体験、創造性、想像力、個性、人格——人間として大切なことは、受験戦争のなかで日本では正当な評価をうけないでいます。将来手に入るかどうかわからない△職△のためにです……と。

なんと見事に、しかも適確に、日本の若者に欠けていきる重要なポイントを突いているではないか。ウチにいる日本人よりも、ソトから来た外国人の方が、日本社会の実

体を正しく掴みとっているようである。

最初に話をした忘年会での皆の意見ではないが、確かに今の若者には活力が欠ける。生きる目標を見失つていいのではないかとの疑問さえ持つ。第二次大戦から五十年過ぎたいま、太平で何ひとつ不自由のないGDP世界一の国の中で育つてきている。緊張感を抱く必要もないし、一定の価値観に縛られることもない。厳しい戦時体験を嫌というほど味わされた世代から見れば、羨ましくもある。それだけに、何事につけても自分で決断をしてゆくといった心の逞しさを失いがちになり易い。

ここで若者によりかけたい——。いくら先端技術の学問を勉強しても駄目。四、五年もすればもう通用しなくなる。人間にとってそれよりも大切なのは、不变の基本的な知識なのだ。大学院を出たエリート中のエリートでも、オウムの世界に入り自分の進路を見失ってしまったではないか。末端知識が先行して基本となるものが置き去りにされるとエライことになる——と。

若者よ！ これからは、個性、教養、これに加えてグローバリゼーション意識（国際社会の一員としての）を

重視して欲しい。この際、当然ながら、日本の伝統的な歴史と文化は尊重されるべきである。そして、前に言わされているように、技術的なものにせよ、知的教養にせよ、基本的なものはキチンと身につけて欲しい。その上で問題解決能力を培うことである。

これらは、言うは易く行うは難しいことかも知れない。

しかし、このような意識をもって生活すれば、女性にいつも追い越されたり、また電車の中で人をがっかりさせるようなことはなくなるに違いない。

“Boys! Be Ambitious (若者よ。大志を抱け。)”
かって、札幌農学校の生徒に向かってクラーク博士が言った有名な言葉だ。明治時代のこの言葉が、いまの世に蘇つて再び若者によびかけているようと思えるのである。

魏志倭人伝の二千余字の中に邪馬台国の中はなく、邪馬台國と書かれている。魏志倭人伝の古刊本はすべて「壱」の字であり、「台」と書かれている本は存在しない。一方、壱（原文は壱）は台（原文は臺）の書き誤りとする通説に対し、三国志全文をチェックし、書誤りはない事を、古田武彦「邪馬台国はなかった」（一九七一年）

推理－21世紀の邪馬台国

斎藤 勤

◆はじめに

三世紀の日本を知るための第一級資料、魏志倭人伝（正確には三国志魏志東夷伝倭人条）の中に、女王卑弥呼の都邪馬台国（邪馬台國）の記載がある。この所在地について、多くの研究が行われ、過熱状態ともいえる論議が今なお続いている。多数の論説より取捨選択して、二十一世紀中に到達するであろう結果を推理してみよう。

◆邪馬台国は存在しなかった。

で示された。

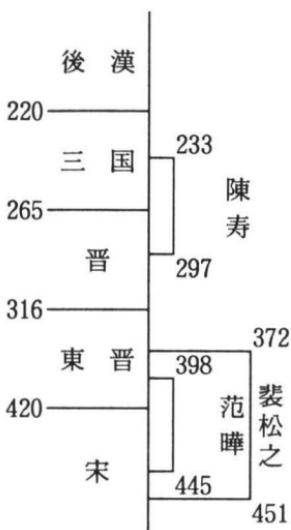
◆邪馬台国の初出は後漢書である。

邪馬台国は魏志倭人伝より約百五十年後に撰された、

多くの人々が後漢が三国よりも古い事で、安易に、奄
台の改訂を行った事は、重大な誤りであると言わねば
ならない。

何故范曇は後漢書に邪馬台国を書いたのか、これを考
える前に魏志倭人伝の邪馬台国の所在を探して見よう。
◆邪馬台国は宇佐に存在した。

范曇の後漢書倭伝に初出する。魏志倭人伝は撰者陳寿の
原形では存在せず、五世紀の南朝宋の時代の裴松之の注
釈本が原本である。この裴松之の生涯の中に後漢書の撰
者范曇の生涯が含まれる。これらの事実が多くの人々に
軽視されている事は不可解な事である。この事を図示
すると



從つて裴松之の注釈にも現れない范曇の邪馬台国を以
て、一五〇年前に記載されている邪馬台国を訂正する事
は本来出来ないはずであり、危険な資料操作でもある。
卑弥呼の墓は恐らく宇佐神宮の神殿の下の古墳であろ
う。三世紀における発掘調査の結果は、この推理に寄与
すると思われる。

多々の人が後漢が三国よりも古い事で、安易に、奄
台の改訂を行った事は、重大な誤りであると言わねば
ならない。

◆女王壱与はヤマト（倭）へ東遷した。

卑弥呼の死後、宗女壱与が年十三で女王に立ち、内乱を収め、魏使を還送すると共に、魏都洛陽に貢献した記事で魏志倭人伝は終わっている。この後倭に関する記事は南朝宋の時代まで、約百六十年空白である。

この間に女王壱与は恐らく東遷し、大和三輪山麓へ移ったものと思われる。この事は、大正時代、和辻哲郎が「日本古代文化」で触れている。その後の考古学上の種々の証拠から、及び記紀に示される神武東征伝承は恐らくこの東遷に関連していると思われる。壱与は大和三輪山の神と神婚することにより、土着の民と融和して、新しい國恐らくヤマト国を建てたと推理される。

女王壱与の墓は三輪山麓の巨大な前期古墳箸墓であろう。森浩一は「考古学の窓」（一九九五年）において、箸墓の造成に「此の墓は日は人作り、夜は神作る」と神秘的表現があり、あの巨大な伝応神陵や伝仁德陵の記述が記紀に無いこと、又後代七世紀の壬申の乱の記事中、箸陵と書かれていること等から、始祖王的な意味があつたのではないかと述べている。即ち大和の諸豪族の中で

は七世紀において、偉大な女王の墓なる意識が残されていたこととなる。

ただ平安時代の延喜式の陵墓に記載のないのは、藤原氏（中臣氏）は恐らく邪馬壱国（倭）の東遷に破れた物部氏一族の記憶が残っていたからであろうと推理する。

二十一世紀、箸墓は恐らく発掘調査され、推理が裏付けられるものと期待される。

◆壱与の國のその後

三世紀末大和へ東遷した壱与の國は、記紀にある、崇神に始まる三輪山麓に都を持つ、三輪王權國家と思われる。この國は四世紀、再び西より東征した応神に始まるいわゆる河内王權国家に併合される。応神は前王權に連なる女性を娶る事により、王權の正統性と連續性を確保したものと思われる。この國家は南朝鮮で高句麗と霸權を争うと同時に、当時の中国南宋に積極的に遣使した。いわゆる五世紀の倭の五王時代であり、この前半期こそ、范曄が後漢書を撰録していた時代と重なっている事を留意せねばならない。

◆范曄は何故邪馬台国と書いたか

魏志倭人伝の注を施した裴松之の時代に范曄の生涯が

含まれる事は前述した。藤井滋（「邪馬壱国」「邪馬台国」

問題再考）（東アジアの古代文化書号）（一九八七年）で

裴松之は四二九年に三国志の校注を完成したとしている。

従って、四二九年から范曄の死の四四五五年の間に、范曄

に邪馬台国と書かせた何等かの事情を推定し、その事情

とは倭王の使節の度重なる到着に求めた。

宋書倭国伝による倭王の遣使は

四二一（永初二）高祖 倭王讚 除授を賜う

四二五（元嘉二）太祖 倭王讚 司馬曹達を遣使

四三〇（元嘉七）太祖 倭王讚 遣使

四三八（元嘉十五）太祖 倭王讚死し、弟珍立つ（珍
は使持節都督倭、百濟、新羅、任那、秦韓、慕韓、六国
諸軍事安東大將軍を自称）安東將軍倭國王とす

四四三（元嘉二〇）太祖 倭王洛 遣使 安東將軍倭
國王とす

始祖の女王以来連綿と続いたと自称し、南朝鮮をも含
んだ安東將軍倭國王を求める倭使に接した范曄は、邪馬
壱国に壱与のヤマト国と現実の倭国をダブルイメージし、

世世伝統其大倭王居邪馬台国（この字句が無い方が後漢

書倭伝はすつきりする）を書き加えたものと思われる。

藤井は倭国の使が、壱→台の訂正を求めたとしているが、
間違っている。むしろ、陳寿との対抗意識の為に、現実
の姿を過去に投影した范曄の勇み足的な行為とする方が
妥当である。

◆ヤマタイ国は日本人の創作であった。

范曄は倭王の使節が述べた自國の名を大体正確に、ヤ
マトを邪馬台と漢字化し、後漢書に記載した。ヤマタイ
国と記載したのではない。ところが後世日本人はこれを
日本読みしてヤマタイ国と読んだ。日中両国の音韻法則
の差が生んだ一つの喜劇ともいえる。従つてヤマタイ国
と発音される語は、范曄の意識にもなく彼は恐らくあの
世で苦笑しているであろう。

日本人は、後漢書、三国志の撰定事情を知りながら、
後漢が三国時代の前時代であることにより、後漢書倭位
の立場をとり、魏志倭人伝中の壱→台を変更し、ヤマタ
イ国という架空の国を作りあげたとせざるを得ない。
◆まとめ

一、魏志倭人伝の邪馬壹国は正しく邪馬台国は間違いである。

一、女王卑弥呼の都、邪馬壹国は九州宇佐である。

一、女王壹与は東遷し三輪山麓にヤマト国を作った。

一、後漢書の撰者范曄は、度重なる倭使に幻惑され卑弥呼の国と壹与の国とに現実の倭国をダブルイメージし、邪馬台国（ヤマト国）を後漢書に記載した。

一、范曄は現実の倭使の発音を正確に聞きとりヤマト国と読んだ。

一、従つてヤマタイ国は幻の国であった。

一九九五年は大震災に始まり超円高、サリン人災、金融機関の破綻……と、まさに世紀末的な大荒れの亥年であった。

秋口から円高も沈静化し、そろそろ政治家恒例のデノミ推進のアドバルーンが掲げられる頃だとおもっていたら、案に違わず十一月十四日、日経夕刊に

……新進党のデノミ問題研究会（鳩山邦夫会長）は

「一〇〇〇年一月一日から百分の一のデノミを実施する」とした中間報告をまとめた。現在の百円を新一円にしようというものの現行の為替レートだと一ドルが一円となる計算。「次期総選挙の公約の一つに掲げる」ことも明記している——中略——中間報告ではデノミを実施した場合のメリットとデメリットを併記、「金額の国際比較が容易」「兆円近い直接需要を生み景気を刺激できもある。

デノミ考

吉井　米三郎

る」などの利点を上げる一方「コストや手間がかかる」「便乗値上げなどの不正や混乱が発生する可能性がある」などの問題点も指摘した。……

「デノミ」はロシア語の通貨単位呼称の変更を意味するDENOMINATSIYAから英語の貨幣の呼称を意味するDENOMINATIONに転じ、例えば現百円を新一円とする場合百分の一の「デノミ」と略し慣用的に使っている。「デノミ」の第一義的狙いは、インフレにより家計から国家財政に至る国民経済活動全般を通じ取扱金額桁数が大幅に増え、その計算・記録が煩瑣になったのを合理化するにある。一方政治家が強調するところは、経済大国としての、わが円の国際化は今後ますます高まり、その国際的地位も強くなる趨勢にあるとの認識から、こ

その後近代化の一環として一八八二（明治十五）年に中央銀行としての日本銀行が設立され、それまでの複数の国立銀行券を一元化することとなり、一八九七年には金〇・七五グラムを一円とする「貨幣法」が制定され日本銀行兌換券が発行されることとなるが、これは一九四二（昭和十七）年に廃され、名実ともに中央銀行による今日に至る管理通貨制度へと移行している。

「新貨条例」公布から今日まで一二五年、この間、相次ぐ戦争とインフレで昭和初期には厘が消えて行き、満州事変、日中戦争、太平洋戦争そして敗戦へと決定的なインフレを経て一九五三（昭和二十八）年には円未満貨流通廃止となり、円は補助貨を失い円一本となつた。今日では円の一桁は消費税、金利清算などで流通しているがある。

現貨幣制度の原点は一八七一（明治四）年五月公布的「新貨条例」にある。その骨子は△金本位制とし銀・銅

貨を補助貨とする。▽円・錢・厘の十進法での単位呼称とする△円形打刻貨幣とする、ということで、金一・五グラムを一円とし、金貨として一、二、五、十、二十各円、銀貨五、十、二十、五十錢、銅貨として一厘、半錢、一錢、二錢、その他貿易銀として一円銀貨を発行している。

実質的な購買力を失っていると考えると、厘で一桁、錢で二桁、円で一桁、合わせて四桁分が「新貨条例」公布以来のインフレによる円の桁数増加分とも考えられぬこともない。となると一二五年前を水準としてのデノミということになると、現一万円を新一円へと切り下げるということになる。しかし現実的なデノミのための物指しということとなれば、矢張り米ドルとの対応が中心となる。

G7各国の対米ドル相場は（一九九五年十二月二十一日ニユーヨーク売り、但しリラとECUはロンドン）日本円：一〇・三、ドイツマルク：一・七六〇、英ポンド（＝米ドル）：一・四五〇、カナダドル：一・三六六、仏フラン：四・三〇、イタリアリラ：一・四五・七〇、ECU（＝米ドル）：一・三七〇で、イタリアリラが四桁、日本円三桁を除く、ドイツマルク、フランスフラン、英ポンド、カナダドルは一桁での対応となつており、補助貨幣のないもリラと円だけとなつていて、円を対米ドル一桁へといふことであれば円の百分の一への切り上げということになろう。これまで米ドルと日本円間の換算も百倍とか百分の一とかで

なく、一割増とか〇・九掛とかで目途がつけ易くなる。このように見て來ると早期にデノミを実施するのが望ましいこととなるが、政治家は掛け声だけ、大蔵・通産はダンマリ、誰も手を汚そうとしない。たしかに百分の一のデノミをやるとして、一過性とはいえ、一般大衆には目減りのような心理的不安を呼ぶ▽新価格表示への切り換えに便乗、端数切り上げによる物価上昇▽補助貨幣として錢を復活し、一、五、十、五十錢貨を発行することとなる、などなど定着までの手間、戸惑い、混乱そして費用と、つい二の足を踏みたくもなろう。

さらに実施のタイミングとして、充分見究めておかねばならぬ問題がある。わが国は戦後一九七三年の石油危機までの高度成長期、さらに第二次石油危機を克服してからの安定成長期、そしてバブル崩壊後の構造的な低成長期を迎えた。しかも金融機関の体力の復元は二〇〇〇年以降とされている。また曾ての自動車産業、エレクトロニクス産業に代わるリーディング産業の現出も期待し難く、二〇〇〇年一月一日のデノミ実施は低成長も潰す本格的なデフレの呼び水ともなりかねぬということであ

る。

そこで、デノミのデメリットリスクを伴わず、しかもほぼ同じ効果を得られる方法を提案する。それは、円への威信・郷愁などのこだわりを捨て、現百円を単位とする新たな呼称を国民から募って制定することである。

今かりに新単位を天（TYEN：天）としてみよう。

現五百円・百円貨および、一万円・五千円・千円日銀券はそれぞれ五天、一天貨および百天、五十天、十天日銀券に切り換えてゆく。ただし現五十円、十円、五円、一円貨はそのまま存続流通し、目減り感も便乗値上げも避けられ、計算・記録上の合理化、米ドルへの一桁での対応も一挙に実現することとなる。しかも新円方式より大幅なコストセーブとなるはず。

全くコロンブスの卵のような話である。

二十一世紀への提言

新井 進

△一〇〇年前の日本の姿△

あと数年で二〇世紀が終わり、新たな二一世紀が到来する。丁度、九十数年前の明治三四年が一九〇一年にあたり、その当時の日本の姿を尋ねるのも無意味ではあるまい。

歴史書をひもとくと、三三年九月に、伊藤博文総裁による立憲政友会が発足、その三年前に結成された憲政党とともに、二〇世紀前半の日本の政治を担当した。

三四四年を月別に、ニュース或いはトピックスで追つてゆこう。

明治三四年（一九〇一）年、一月には市民の間で「二〇世紀」が挨拶言葉として流行。六年前の日清戦争のバブルは消えて不況に突入、金融恐慌が前年に引き続いておこり、関東、関西で銀行の破綻・取付け騒ぎが

発生した。

その年二月、官営八幡製鉄所第一高炉の火入れ式を挙行。六月、庶民出身の民権政治家で“押しとおる”の異名をもつた星亨が東京市役所で暴漢に刺殺された。

八月、与謝野晶子「みだれ髪」発行。

一二月、群馬県出身衆議院議員で長年足尾銅山鉱毒問題に取り組んできた田中正造が議員を辞して、天皇に直訴した。

目を転ずると、一衣帯水の中国では、西欧進出に反対する農民が「扶清滅洋」の旗印をあげ、一般市民を巻きこんだ排外主義民衆軍が各地に蜂起した。即ち「義和団の変」である。日本も西欧諸国の要請をうけ、第二次山縣内閣は約二万余の軍隊を中国に派遣した。明治三十三年八月、清国は列強と講和を結んだ。中国はまだ眠れる獅子で、これを機に西欧列強は侵略の地歩を固める。日本も遅ればせながら、その動きに加担して、僅かの利を得たいという願望が読みとれる。

封建制度を終えてから三十数年、日本は近代化への諸条件をととのえつつ、西欧列強へのキャッチアップへの

スタートを切った姿が浮かび上がってくる。

富国強兵の旗の下、社会主義思想は黙殺され、二〇世紀後半に大きな社会問題となる公害問題の第一号、足尾鉱毒事件が起きている。

△二〇世紀の日本の動き△

明治後半、大正、昭和および平成の四代をつなぐ百年を振りかえることは、次の百年のプロローグとして多くの因子を含み、いくつかの次の世紀への要因を提供すると考える。読者によりその選択に異論があろうが、次に年別に事件、あるいはニュースを瞥見しよう。

明治三七（一九〇四）年より三八年　日露戦争
大正三（一四）年より八年　第一次世界大戦

昭和六（三一）年　満州事変勃発

昭和一二（三七）年　日中戦争勃発

昭和一六（四一）年　太平洋戦争勃発

昭和二〇（四五）年　日本、ポツダム宣言受諾、無条

件降伏

昭和二四（四九）年　单一為替レート、一ドル＝三六

○円設定

昭和二十五（五〇）年より二八年 朝鮮戦争

昭和三〇（五五）年 保守合同の結果、自由民主党が

結成

昭和三五（六〇）年 日米新安保条約成立

昭和三九（六四）年 第一八回オリンピック東京大会

開催

昭和四八（七三）年 第一次オイルショック発生

昭和五二（七七）年 外為市場で一ドル＝二五〇円となる

昭和五四（七九）年 第二次オイルショック発生

平成三（九一）年 湾岸戦争勃発、ソ連消滅、CIS

発足

平成七（九五）年 阪神・淡路島大震災発生

今世紀前半は、先進諸国にキヤツチアップするため、意識的に、あるいは外的要因により戦乱に巻きこまれた。一九四五年、米国の焼土作戦のため、終戦をむかえた日本経済力は皆無と帰した。

その年の文芸春秋一二月号には、次のような記事が掲載された。

「戦災地区復興の遅々たることよ。雨漏りが如何に激しくとも、壊舍を持っている者は^{しあわせ}である。既に焼トタンもふる材もない。どんな簡単な小屋でも、これから建てるには坪千五百円かかるという事実を想い見る時、

戦災者たちは徒に茫然自失するのみである」

続いて、主要年代別に目についた記事を列記して、世情の動きをとらえたい。

「このところ日本経済には、やたらと戦後最高という言葉がとび出していく。有史以来の大豊作は別格にして、『輸出額』『造船景気』も、みな毎月のように戦後十年の新記録を出している」（サンデー毎日、昭和三〇年一〇月一日号）

「昭和三〇年代の高度成長の波にのって、神武景気から岩戸景気、はては所得倍増のかけ声につられ、株式市況は三六年前半までは天井知らずのブームにわいた。その後は暴落と低迷を続けた」（物価の世相一〇〇年、読売新聞社発刊）

「昭和四六年八月一五日、ニクソン米大統領はドルの金兌換停止を含む経済緊急対策を突如として発表した。

この年一二月、先進一〇カ国蔵相会議が開かれ、円は一ドルに対して三〇八円となつた」（日本の歴史、小学校発刊）

「第一次石油ショックの後遺症をうけて、景気は停滞している。減速経済時代だ。企業も高度成長が望めぬとなれば、限られた需要を各企業が奪いあうことになり、食うか食われるかの“強存強榮”時代となることを認めざるをえない」（前出、物価の世相一〇〇年、昭和五年の項）

「日本は世界の大関です。しかし横綱ではない。なぜか。日本は経済大国であっても政治大国でなく、ましてや軍事大国でない。知恵をしぶり、ワザを發揮して働くこと。これだけが身上です。なまけたら転落します」（東京新聞、昭和五六年八月一六日）

△来るべき二一世紀への提言△

一九九五年に為替相場は一ドル＝七〇円後半の最高値をつけて、円高とそれに関連する産業空洞化対策の議論が高まってきた。為替レートの増価（円高）は国内生産から輸入への切換え、国内生産から海外生産への代替、

国内生産資源の貿易財生産から非貿易財生産へのシフトを促進する。最近の傾向として、アジア諸国（NIES、ASEAN）との動態的水平分業の進展を図ることとなり、長期的には相互依存を促進する。二一世紀が日中を核とするアジアの時代といわれる所以である。

産業空洞化に伴い、最近は雇用問題が賑やかだ。中長期的若年労働力の不足、中高年層対策、技術革新とグローバリーゼーションの進展などにより、日本的な終身雇用、年功賃金は見直されてきた。二一世紀は、従来の日本型終身雇用制と能力主義・職能給をどのように組み合わせるかが問題となろう。

五〇年前の日本経済が零から出発し、貿易収支一四四三億ドル、長期資本収支一二八九億ドル（いずれも九四年度）、そして九五年一一月末の外貨保有量は一八一二億ドルに達した。

この数字は日本の資本、労働、TFP（全国要素生産性）要因の総合力を現わしている。長期的経済の発展のためには、TFPが最も重要とされる。それには技術革新が主要要素とされ、その原動力は官民の研究開発と人的

資本への投資とされる。

従来のリーディング産業は高付加価値産業の自動車、電気機器、機械分野であった。

二一世紀への展望として結論的にいえることは、◆日本経済の世界経済との発展と調和－産業空洞化、内外価格差への対処、◆旧式な経済枠組みや制度の見直しと改革－規制緩和、雇用問題、グローバリゼーション対策、◆日本経済の成長性、生産性を終結したリーディング産業の育成－二〇世紀中にキャッチアップ段階を終了した日本経済が独自の途を切り拓くため、個々の産業が技術革新などの努力を集結する。結果的に新たなリーディング産業を創造することにより、二一世紀への展望が開けるのではなかろうか。

とりあえず、経済問題にのみ焦点をしぼったが、世界的観点より人口、食糧、資源、公害、人種、宗教、地域紛争など多くの問題がそれぞれ縦横に関連しており、日本の将来に大きな影響を与えることを忘れてはならない。

年金どうなる

中川路 明

何か高齢者の役に立つようなことができないかと年金に係わって二年が過ぎた。昨春までは、近く六十歳を迎える人の相談が多くたが、最近は「会社が倒産した」、「整理対象になった」と心に準備のなかつた人の相談が急に増えた。予想を上回る不況の長期化が厳しい現実をもたらしたが、それでは将来はどうなるのか？

新聞に高齢化の見出しの無い日はなく、六十五歳以上の人口の総人口に占める比率は、一九九五年十四・五%、二〇一〇年二十一・三%、二〇二五年二十四・八%（三千百四十万人）になる。医療技術の発達による長寿化と女性の社会進出、晩婚化による少子化が主な要因である。この比率は、長寿国スウェーデンの十七%、イギリス・ドイツの十五%に比べて急激な増加であり社会問題になつてきている。

一九九三年の社会保障費は、五十八兆円で対国民所得比十五・三%とはじめて十五%を超えた。その内訳は、年金が三十兆円、医療が二十二兆円、福祉（生活保護、失業給付など）が六兆円であり、高齢者関係は三十五兆円に達した。この実状に対し高齢者の医療負担のうち、福祉関係を医療より分離する介護保険制度が立案され、この年金、医療、福祉の比率を五・三・二にする将来計画がある。どのような区分にしろ高齢化時代を迎えて、給付に見合う負担の財源の確保が、わが国の一十一世紀のどうなる、どうするの重要な課題である。

年金制度は将来見通しの変化に対応して財政再計算の行われる五年毎に改正される。働く人六千四百四十万人の構成は、サラリーマン三千二百万人、自営業八百二十万人、家族従業員四百二十万人（一九九三年）であり、その主体となる厚生年金についての一九九四年の改正のポイントは次にような点である。先ず生活設計を六十歳前は給料を中心に、六十五歳までの六十歳台前半は給料と年金を中心に、六十五歳以降は年金を中心とすることを基本とした。

今回改正の最大の目玉の給付水準の見直しは、從来六十歳以降六十五歳までの退職者に特別支給していた老齢厚生年金を、二〇〇一年から二〇一三年にかけて段階的に約半分の額の報酬比例部分の年金へ切替えたことである。但し働くことの困難な障害者や長期加入者は現行のままとしている。ちなみに主要国の年金支給開始年齢は、フランスの六十歳を除いてドイツ、イギリス、スウェーデン、アメリカはいずれも六十五歳である。

六十歳台前半の雇用の確保のため、先ず六十歳未満については一九九八年に六十歳定年制を確立する。從来在職していると報酬月額二十五万円以上で支給停止し、二十四万円以下でも報酬に応じて八割から二割支給停止していたものを、報酬の増加に応じて報酬と年金の合計収入が増加するように改正した。第三に、雇用保険法を改正し、報酬が六十歳到達時に比べて相当程度低下した状態で雇用を継続するものに、六十五歳まで雇用継続給付を支給することとした。第四に、現在厚生老齢年金と雇用保険の失業給付が併給され合計して相当の額に達し、

六十歳以後就業を続ける場合の収入と比較して格差が大きくなり就業意欲を阻害していた。この過剰の社会保障を改めて、失業給付受給中は老齢厚生年金の支給を停止することとした（一九九八年実施）。

日本人は高齢でも勤労意欲が高く、チャンスがあれば働きたいという希望が強い。現在六十歳台前半の男性は就業者七十二%、就業希望者十一%と合計八十四%に達し、女性は就業者四十一%、就業希望者十一%である。

二十一世紀に高齢者が大幅に増加する反面、働く人たちの増加はほとんど望めない。五十五～五十六%で三十年来続いてきた二十歳から五十九歳の人口比率が、二〇〇〇年より低下をはじめ二〇二五年には五十%を切ることとなる。こうしたことから高齢者が、パートやアルバイトを含めて年齢と体力に応じて働き甲斐をもって暮らす社会を目指した改正である。

しかし雇用の機会の見通はどうであろうか。空洞化の進展、低賃金の外国人労働者の増加などその前途は険しい。情報分野や医療分野でそれぞれ三百万人の新規雇用が見込まれるという数字もあるが、起業環境の整備、

高齢者向き職場の形成など今後の日本経済の旗振りの責任は重い。また六十歳台前半の報酬比例部分の年金は通常者では現在の二分の一であるが、雇用期間の短い人については最低保障もなく、給付水準の基本的考え方を明らかにすることも必要である。

以上の給付に対する負担はどうなるか。二〇二〇年に厚生年金の受給者は一千三百万人と現在の二倍になり、給付額は百十兆円と五倍になる。このような受給の増大に対し、制度の担い手となる現役世代の減少は年金制度に大きい影響を生ずる。これを長期的に安定させるため、受給世代の給付と現役世代の負担のバランスの確保が肝要である。

従来の支給開始年齢のままでおくと、二〇二五年には保険料率が現在の十四・五%から三十五%程度になる。バランスの確保には、最終的な保険料率を少なくとも現行の一倍程度の三十%を超えないようにすることが必要である。このために前述の雇用の確保と並行した支給開始年齢の引き上げのほかに、年金水準も総所得の六十八・五%

%におくななどをした。それでも保険料は、一九九九年十九・五%に、二〇一二五年には二十九・六%になり、更にボーナスからも一%の特別保険料を徴することになった。保険料の上昇から年金損得論も出ている。三和総研の試算では、二十歳から六十歳まで保険料を納入して平均寿命まで生きたとして、現在十歳未満の人は支払保険料（事業主半額負担含み）の総額が生涯受給額を上回るとしている。

一方、国民年金の保険料も一九九五年の月額一万一千七百円は、二〇一二五年には二万一千七百円になることが見込まれている。この高額の保険料のために、自営業者などの国民年金の未加入者は10%、保険料の滞納者は十五%に達した。国民皆年金、強制加入の制度にあっても二十一世紀には六百万人近い無年金者、低年金者が予想される。激しい時代の変化、保険料の高騰、将来負担の更なる増加、そして自分は貢えるのかという不安からの国民年金への不信感が、都市居住者、二十歳台の若年者に多い。国民の理解を得る努力、保険料の徴収体制、免除制度に該当しない低所得者層の対策を確立しないと、

無年金者、低年金者はいずれ生活保護か老人福祉対策の対象者となり結局税金で負担することになる。今回の改正でも、国庫負担の三分の一から二分の一への引き上げが議論され、一九九九年の財政再計算を目途に対策を講じることになった。

今後の生活保障として公的年金以外の個人年金、厚生年金基金、税制適格年金による補充の重要性が盛んに言われた。現在いずれも低金利、収入の増加の停滞により運用財政の悪化が報ぜられている。現在の不況下で運用の悪化を穴埋めするには企業負担しかない。健康保険組合も赤字に落ち込み、右肩上がりの経済の歪みを早く取り除くことなく景気回復頼みでいると、地価回復頼みの住専の二の舞になるであろう。

社会保険のメリットは財政の安定化、給付と負担の明確化、現役世代の人たちが必ず加入する強制加入にあつた。すなわち世代と世代の支え合い、いわゆる世代間扶養の仕組みをとり、年金の実質的価値を維持するための財源を後の世代の人たちに負担を求めていた。給付あつての負担は保険料か税金か。国庫負担の増加は諸外国で

の基礎年金を税金方式とする傾向に一致している。

一方介護保険制度が俎上にのぼってきた。未熟な案であるが身近に感じない若い人が加入するか、国民健保の一の舞にならないか。介護保険の導入により国民全体の負担幅が減少するというお題目が実現するのか疑わしい。

更なる社会保障費の負担増の時代を迎え、二十一世紀はどうするか。企業も、能力主義が重視され、終身雇用制度の影が薄れ、就業意欲にも大きな変化が生じている。賃金制度、特に退職金制度や福利厚生とサラリーマンの老後を強く支えていた施策にも当然変化が起こるであろう。消費税的な間接税として福祉目的税による財源確保が必至の道である。それに応えるため、ハイヒールを履くだけの議員を養う負担や、借金を踏み倒してロールスロイスを乗り回す悪徳者に使われる税金問題を解決し、国民の納得をえることが先決である。

ニュージーランドを見習う早急な行政改革と財政改革無しには二十一世紀はどうにもならない。迂遠な手段ではあるが、我々は選挙を通じて政治改革を進める以外に手はない。

二十一世紀への期待

衛 藤 甲子郎

「どうなる? どうする二十一世紀」ですって?

日頃から「十一世紀まで生きていることは到底あり得ない」と思っていますから「どうなるのだろう?」と考えたことも、「どうしてやろう」と望んだことも一切ありませんが、折角のお質ねですので思いつくままに少し考えてみました。

私たちの日常生活では、一夜明けると周囲のたたずまいが前日と全く変わってしまっているような事態はほとんどあり得ないことです。ただし劇場で演じられる芝居だけは、緞帳が下りてきて時間的・物理的にはっきりとした幕間となる場合は勿論のこと、そうでなくとも暗転のうちに舞台が廻れば、夏の海辺にいた男女がいつの間にか雪の中に立っているというような設定が、演劇の常識として観客に抵抗なく受け容れられています。

激しい変化のことを劇的な変貌と言うのはこのことを指しているのでしよう。因に手許の辞書には「激変」と「劇変」とが全く同じ意味として並記されていますが、英語でも大変化のことを「ドラマティック・エンジ」と言うそうですから、この感覚は洋の東西に共通していると思われます。

劇的であるということは即ち日常的ではないことに他なりません。この世はかの有名歌手の歌のごとく川の流れのようにゆるやかに過去・現在・未来へと一瞬の断絶もなく連綿と継続していますので、突然降って湧いたよう周囲と隔絶した環境が出現して人々がこれまでとは全く違った精神状態になってしまことなど、ほとんどあり得ないと言つてもいいでしよう。しかしながら、万何かのきっかけで環境が急変したり心や体に強烈な刺激を受けたりすると、思想や人生観までも一変することがあるのも事実のようです。たとえば、オウム真理教が薬物を使って幻覚症状による激変を作り出し、信者のマインドコントロールを利用したことは人々の記憶に新しいところです。

最近になって、わが国の政治家や実業家たちが「来たるべき二十一世紀の日本は……」とか「二十一世紀には必ず……」などと、あたかも地球上に「二十一世紀」という特別の世界が降臨してくるかのごとく離し立てているのを耳にしますが、彼等がこのように「二十一世紀」にこだわっているのは、世紀末のハルマゲドンを唱えて善男善女を恐怖の淵に陥れた麻原彰晃と似ていると指弾されても、ある意味では当然かもしれません。

申すまでもなく二十一世紀はキリスト生誕に準拠した（実際は生誕後四年目を元年としているそうですが）西暦による歳月の考え方ですから、キリスト教の国においては絶対的基準の年号に違いありませんが、日本では最近まで最も普遍的な年度の表示は明治・大正・昭和と統一する年号で、西暦は比較的馴染みが薄い呼称でした。特に私が中学生の時は皇国史觀の全盛期でしたから、昭和十五年には「紀元は一千六百年……」と歌い、年号の他に西暦より六六〇も多い数字を紀元として教えられたもののです。

また曾て滞在したイランにはイラン暦があり、タイに

はタイの年号がありました。古代文明の伝統を誇る両国
の庶民は、日常生活では固有の年号を用いていましたが、
イスラム教徒は現在でも西暦一二二年のマホメットのメ
ディナ移住を元年とするイスラム紀元を使っているので
はないでしょうか。

こう考えてみると、現在キリスト教の勢力が世界を牛
耳っているのは間違いないにしても、西暦一〇〇一年に
格別重要な意味を持たせて、その到来と共に全世界が見
違えるように変化すると発想するのはいささか強引過ぎ
るようになります。十進法によって十が区切りだとすれば
二〇〇〇年も終末の節目ですし、日本人にとっては一
九九八年は平成を基準にすれば十年目の意義ある年とな
るはずですのにそれを無視して、いかに国際化が叫ばれ
ている時代とは言え、時の流れの中に唯一つ西暦の仕切
り線だけを引いてしまるのはいかがなものでしょう。

二十世紀最後の日、即ち西暦一〇〇〇年十二月三十一
日の夜十一時五十九分になれば世界中がカウント・ダウ
ンを始め、最後には「十・九・八・七・六・五・四・三・二・
一」と息を呑んでその瞬間を待っていても別にロケット

が発射されるわけでもなく、翌朝になつても太陽が西か
ら出ることもなく、一日二十四時間の地球の運行は前日
と比べて何の変化もないはずです。つまり「二十一世紀
の始まり」に、これまでとはまったく環境の違った新し
い時代が拓けるだろうと大きな期待をかけて、それが
芝居の演出でない限り全く合理性のない幻想であると断
言しても言いすぎではないと思います。

今から九十数年前私はまだ生まれていなかつたので、
二十世紀を迎えるに際して当時の人たちがどんな意欲を
抱いていたか知りませんが、現実には一回に亘る世界大
戦を始めとして戦火が絶えることのなかつた百年間であつ
たと後世の史家は評価するのではないでしょうか。

従つて二十一世紀の到来にも大きな期待をかけること
に私はいささか懐疑的で、希望に胸をふくらませて西暦
一〇〇一年を待望している人たちに水を差すようなこと
を申し上げてしまいました。

平成十三年（一〇〇一年）までは到底生きていること
がないと自覚している老人の嫉妬のあらわれとお嘴いく
ださい。

南西アジアと日本

＝インドを中心として＝

大沢 章伸

かつて日本のビジネス社会では、『アラカン山脈を越えれば唐天竺』とよく言っていた。つまり、日本のビジネスの関心が及ぶのは最大限現在のミャンマー迄であり、したがって「アジア・ビジネス」もそこ迄で終わりということであった。その更に西にある、文字どおり『天竺』が、インドを中心とする南西アジアの国々であるが、ごく最近迄日本にとっては、常に「限界的な市場」に過ぎなかつた。あるいは今でも本音のところではそうであるかも知れない。巨大な人口と想像を絶する貧困をみせつけられて、日本人は、単にこの地域を貧乏人の密集する国の集まりとしか認識出来ず、まともには相手にして来なかつたのが実態であった。しかし今や、インドの台頭により、世界的に見てもこの地域が大きなマーケットに変わりつつある。

歴史的にみれば、南西アジアの地は、日本の貿易のパートナーとして大変重要な地位を占めていた。旧英領インドは、現在のインド、パキスタン、バングラデシュ、スリランカとビルマ（現在のミャンマー）から構成されており、その市場の巨大さと多様な産品の為に、三井物産は今から百年ほど前、日本政府が総領事館を開設する以前に、英領インドの中心地であるボンベイに支店を設置したほどであった。

インドは、戦後の日本の経済復興にも、ずいぶんと力を貸してくれた。極東軍事裁判で日本の立場に理解を示したパール判事の発言は、敗戦後の日本人に精神的な支援を与えるものであつたし、経済的には、日本の戦後の復興の軸となつた鉄鋼業に、安定的に鉄鉱石を供給してくれた。一九五〇年代末頃から始まつた日本の機械輸出ビジネスに、格好の勉強の場を与えてくれた。しかしその後の約四半世紀の間は、世界の冷戦構造の中で印度は「非同盟」のスタンスからモスクワ寄りとなり、西欧資本主義社会から距離をおくようになってしまった。

社会主義的統制経済がインド固有の形式主義・閉鎖主義

と絡まりあって、いわゆる「余りにもインド的」な環境

が構築され、効率的ビジネスを追求する者にとっては、時間とエネルギーの浪費を強いられる、相対的に魅力のない市場になってしまったことは否定出来ない。

しかし、一九九一年以降インドが進めて来た経済の自由化は、着実に実績を積み重ねてきており、これを評価して、まず欧米の諸企業が積極的にインドに進出している。投資環境にしても、例えば中国と比較しても、決して見劣りするものではない。基本的に、インドには民主主義が定着しているといつてよく、政権の交替も選挙により行われ、独立後五〇年間、革命やクーデターのような過激な変革は一度も起こっていない。旧英國の支配が残した遺産も貴重で、英語が広範囲に通用し、法律制度・会計制度が実際に機能し、資本市場も形成されている。さらに日本人にとって気分的に救われるのは、東部辺境とアンダマン・ニコバル諸島を除いて、インドの一般民衆の間には第二次大戦中の日本軍侵略の記憶がなく、我々がアジア諸国との付き合いの中で、意識下であっても常に持ち続ける贖罪感から解放されて、ビジネスに

専念出来るという点である。

市場の大きさは、現在の人口が九億人、二〇一〇年に是中国とならぶ十数億の人口を抱える国になるといわれるだけで、容易に想像出来る。もちろん、貧困が最大の問題であるこの国の人口が、すべて購買力を持つわけではないが、現在でも中産階級とよばれる人口は一億人を優に超えているといわれ、低く見積もっても六二〇〇万人おり、約二三〇〇万所帯がテレビを持ち、六四〇万所帯が冷蔵庫を所有している現実が存在する。おそらく中産階級は二〇〇〇年までにはさらに二〇〇〇一一五〇〇万人増加すると見られており、実質購買力の点から見て、インドの市場は丁度台湾の五倍くらいの規模と考えてよい事になる。

工業水準については、中国、アセアン、中近東をへてトルコに至るまでの、北半球の発展途上の諸国の産業の実力を比較すればわかる。品質がよいか悪いかは別にして、日本より遙か以前から、自前の資源で鉄をつくっていたし、素材から自動車をつくる基礎的な力を持っていた。また、やろうと思えば核兵器もミサイルも造れる工業力

を保有する国は、中国のほかインドしかない。

工業の基礎を支える若手技術者の数も世界一を誇つており、英語を理解し、論理的思考に優れたインド人の頭脳は、コンピューター・ソフトの分野では既に世界的水準に達している。この点でもインドは日本の産業の弱点を補完する貴重なパートナーとなり得るであろう。二一世紀の技術といわれている、情報ハイウエイ、ソフトウェア・システム・インテグレイション、人工知能など、日本が欧米に立ち遅れているといわれている分野でインドとの協力が成立すれば、日本が再び新たな主導権を握る事も夢ではない。

インドの巨大国内市場を狙うと共に、インドを生産基地と認識し、世界市場に対する第二のサプライ・ソースとして育成する構えでこの市場を取り組んだ時、インドは日本にとって最も価値のある相手になる筈である。

安定期にはいっているアセアンに比べれば、たしかに南西アジア諸国の政治的・社会的環境がよくない点は事実である。この地域の国々の中では、インドの力がすべての面で余りにも突出しているため、建て前上の協力関

係が、いつの間にか従属関係に変わってしまう。それだけに諸国間の調和を取ることは、経済に限つてもなかなか難しい。グループの盟主としてのインドも内外に問題を抱えているし、周辺国家のパキスタン、バングラデシュ、スリランカも政治的混乱が治まらず、不安定な社会が続いているのがこの地域の実情である。しかしこれらの混沌を包含しながらも、「遅々としてではあるが前進」しているのがこの地域の実情である。インド、パキスタン、バングラデシュ、スリランカに加えて、ネパール、ブータン、モルジブの計七カ国からなる『南アジア地域連合』(SAARC)は、いすれはアセアンに追い付こうと努力しているし、将来もし、豪州・南アフリカまで広がるインド洋経済圏が成立でもしたら、旧英領という歴史的背景と相俟って、この地域の経済的、地政学的重要性はさらに高まるものといえよう。

この様な、将来戦略的に重要な地域に対して、日本は今何をなすべきかについて、中核となるインドに絞つて考えてみる。

既に多くの日本企業が実行しているところであるが、

インドを『生産基地』としてとらえれば、例えば、いわゆる『三K産業』の製品をインドで作り、日本がこれまで確保して来た内外の市場に供給し、マーケット・シェアの維持につとめるという方向が常識的といえるが、これだけではインドのもつ大きな可能性に気付いているとは言えない。むしろ、技術的に吸収力のあるインド人に技術移転し、インドで付加価値のある、技術レベルの高い工業製品をつくって行こうとするのが正解であろう。

中東からの石油を中間地点であるインドで精製し、石炭化製品としてインド国内とアジアの市場に供給していくとする考え方は、インドの地理的特殊性を生かしたアイデアであろう。食料品の原料をインドやその周辺諸国で加工し、中間製品として日本や欧米に供給しようと/or> るのも同じ発想である。新しいインドの側面を強調するのであれば、彼等の得意技を生かし、ソフトウエアの開発を共同で行い、日印両国の文化が融合した製品を世界に送り出すといったプランはどうだろうか？ 一方、国内市場規模の巨大さを重視するならば、通信、電力、交通、港湾などのインフラ整備に関連するプロジェクトに

どうからんで行くか考えねばならない。

要は、インドに対しても、単なるモノの売り買いだけの『商売』ではなく、そこに根を下ろした企業活動をする事が戦略的に重要である。たしかに、自己主張が強く、理屈が先に出てくるインド人と付き合うのは、日本人にとっては辛い事ではある。しかし国際社会で活躍しているインド人の多いことは事実であり、むしろ彼等の生き方が世界の常識であるとするならば、日本人がビジネスの世界で国際的に通用するようになるためには、インド・ビジネスは一度は通り抜けなければならない関所のようなものであるといえよう。

くらしとエネルギー

森田 茂

いま日本の社会生活は不況下にあり、かつてのような華やかさは見られないが、世界の中でも安定度は高いと評価してもよいだろう。高齢化社会になりつつあるが、眞面目に働いてきた高齢者の経済生活は一応心配はないといえよう。

それは生活に必要な食料や物資が順調に流通していて、入手したくても買えないような状態ではないからである。

このようなことが、ずっと続くことを誰しも願っているが、将来のことは分からぬことが本当だから、そう考えると不安なきにしもあらずと思うのはペシミストなのだろうか。

さて今は情報化社会といわれるが、生活の基盤には食料とエネルギーが不可欠だから、米が一時的に不足すれば大騒ぎになるし、エネルギーも同様である。ここでは

エネルギーについて考えてみたい。

日本でエネルギーを最も使うのは鉄鋼、紙・パルプやセメントなどの産業界だが、ここではエネルギーが庶民のくらしの中でどのように役立っているか考えてみたい。誰でも思いつくのは、電灯、冷蔵庫やエアコンなどの電気、料理に使うガスやマイカーのガソリンや暖房の石油などの石油である。実際はもっといろいろの所で用いられているが、先ず家庭の場合を見よう。

一、一般の家庭でどのくらいの石油エネルギーを消費しているか。

日本の総電力販売量は、平成六年度七、三四五億KWHであるが、民生用としての業務用・家庭用は情報化社会の進展や人びとのアメニティ指向の高まりなどで増加し続け、過半数の六二%も占めている。世帯数四、三六六万で単純計算をすれば、一世帯あたり年間一〇、四三〇KWH消費している。一日約二九KWHとなる。

火力発電に消費した石油消費率はKWHあたり〇・二一七%なので、一世帯で年間に二、三六八Lにもなる。

したがって電力という形で石油を毎月二〇〇ℓ使っているわけだ。ここでは石油の例を引き合いに出しているが、

火力発電はそのほかに天然ガス、石炭を消費している。民生用石油を灯油などの形で直接使用している量は一世帯あたり月四〇ℓである。乗用車は一台あたり月七四ℓのガソリンを費やしている。

都市ガスを使っている家庭は平成五年で二、一三六戸あり、年間一戸平均四二〇㎥消費している。ガスの原料は石油、天然ガスや石炭であるが、石油系が約五七%を占めているので、その使用量は一戸で年間二四〇ℓだから月二〇ℓ缶一つ使ったことになる。

これらを合計すると月三五四ℓでドラムカン一・八本にもなる。しかし実は本当はそれだけではない。

鉄を生産するには重量の四〇%のエネルギーが使われている。

米一kgに牛乳ビン一つ分、キュウリには二つ分のエネルギーが使われている。

魚には重さの約六〇%，衣服では二・四倍の重量のエネルギーを必要としている。

など例をあげたらきりがないほど、われわれの生活は見えないところでエネルギーに支えられているといえる。もう一つ交通を考えると、新幹線で東京－大阪間を走ると片道二、〇〇〇万KCAL消費する。ドラムカン一〇本のエネルギーを使うに等しい。ジャンボ航空機で五〇本分のジェット燃料を必要とする。

二、一次エネルギーで考えてみよう。平成五年度の一次エネルギー国内総供給量は原油換算で五億一、四四二万kℓであった。転換やロスを差し引いて最終消費量は三億六、二三五万kℓで六九%に相当する。石油の比率はその六〇%になる。

三、日本の一人あたり一日の一次エネルギー消費量は八ℓくらいになる。牛乳パック八本分になる。そのためには二五万トンのスーパータンカーが毎日四隻日本のどこかに入港している計算になる。

家一軒建てるのにエネルギー約二、〇〇〇ℓ消費する。

日本の一次エネルギーの約六〇%は石油であり、その

石油の七割は中東地域に依存している。そこはイスラム社会である。イスラム諸国との眞の相互理解と友好を築き上げなければならないと考えるのは現実的であり、当然のことと思っている。

は啞然とさせられた。

「あつママ、寝るんだわね」
「ファックって言うんだよ、ね」

たとえ名画とはいえ、こんな場面をこどもたちに観せていいのかどうか。戦後育ちの、その家のママは平氣である。私たちの少年時代、親の前でこんな言葉を発することはほとんど不可能。女学生と声を交わすことさえ禁じられていた。

最近、月に一、二度、映画を見る機会がある。アメリカ映画はテンポが早くておもしろいが、どんなに穏やかな映画でも会話の中で、必ずといっていいほど「寝る」とか「ファック」とかいった、セックスをすばり表現する言葉が飛び出してくる。アメリカの社会で、セックスが、あけっぴろげになっている証拠でもある。それも女性の方がかなり積極的だ。日本も、そうなりつつあるようである。

去年の暮れ、今年成人式を迎える男女二〇〇人を対象に、ある情報サービス会社が行った「恋愛・結婚」の意識調査がある。それによると、男性の七割が「セックス

しても恋人とは言えない」と答え、女性も五割以上がそうだった。また男女の半数以上が「恋人と別れても友達として付き合う」と答え、現代若者のドライな恋愛感を浮き彫りにしてくれた。

昔の家族主義・家父長制度のもとでは「男尊女卑」の考えがどっかりと根を張り、妻は家に所属する財産とさえ思われていた。それが戦後、新憲法で男女平等が強調されて核家族が誕生、家族制度は否定された。姦通罪も廃止され、不倫に対する罪悪感はなくなつた。不倫はむしろファンショナブルな風俗とさえなつてゐる。

女性は職業を身につけ、精神的にも経済的にも自立、自由に暮らせるようになつて、不倫が増え、離婚が増えている。

英国のダイアナ皇太子妃の不倫騒ぎの波紋が広がっている。チャールス皇太子の方も不倫なのだが、英國民は女王サイド（皇太子サイド）よりもダイアナ妃のほうに好意をもつてゐるようだ。しかし、こんな騒ぎをしていて、よくもまあ安泰なものだと感心する。やがては英王室は解体する運命にあるのかも知れない。

しかし、日本はまだまだ男尊女卑。家庭内はともかくとして、仕事の世界は男が支配し、男に都合のいい社会が出来上がっている。新しく発足した橋本内閣でも女性閣僚はただ一人。珍しげに紅一点などと語られている。弥生文化の時代から奈良朝のころまでは母系社会であった。万葉集では「父母」は「母父」と表記され、南北朝以前は母系制的傾向が強かつたという主張もある。不倫意識のないのどかな時代であつたのであろう。やがて武士が支配し、男尊女卑の考えが広まる。

女性はいま、力をつけて社会に大きく進出してきている。将来、女性が男性に代わって社会を支配するような時代、女性優位の時代がやってくるのだろうか。

話は変わるが、最近流行の「インターネット」という言葉がある。去年、どんなことなのか調べようと思つて自由国民社の「現代用語の基礎知識」を開いた。私の持つている「一九九三年版」には載っていない。情報化社会の新しい產物である。

コンピュータの普及は目覚ましい。二一世紀はコンピュータのネットワークが世界を制覇する時代となるのではな

かるうか。ワープロを扱うのがやっと、という私にはとてもついていけない時代のように思う。もっとも、そんなころまで生きてはいなければ。

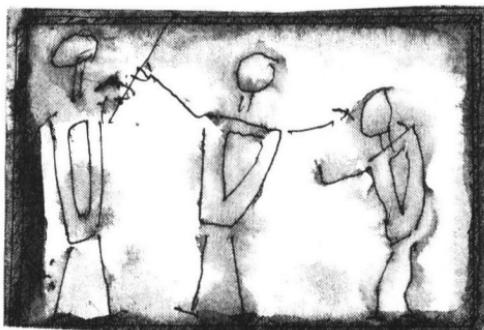
コンピュータを操るのに、力は要らない。器用な指先と繊細な心の配慮が必要だ。そういう点で、女性の方が男性よりも優れている。会社でパンチしているのは女性であり、コンピュータを教える先生のほとんどが女性である。

コンピュータが支配する時代となれば、これを巧みに操れる女性が支配する時代となり、女性優位の時代となるかもしれない。女尊男卑の出現である。

しかし、男尊女卑の由来を考えると、そう簡単に女性優位とはならないよう思う。人間の長い歴史のなかで男が強くなつたのは、武力による戦いが続いて来たからである。いまもなお世界のどこかで紛争がおきている。この地球上から武力による争いがなくならない限り男尊女卑の世界は変わらない。

世界平和が、地球上からあらゆる武器を一掃して実現出来たときはじめて「女性優位の時代」が実現するであ

ろう。世界平和よ早く來い。



総入歯

きりん たかし

六十五歳の誕生日がすぎた頃から、前歯ががたついてきた。六年前、四本ブリッジの挿歯の治療をして置いたのだが、わずかずつ、前後に動きだしたのだ。既に、上齶は入歯ですっかり体の一部としてなじんでいた。下齶

は挿歯四本が自分の歯で、後は義歯で、普段ははずしていた。ハグキが痛くて使用出来ないでいた。いよいよ歯医者通いを覚悟せねばならなくなつた。と、考えた。

よく、入歯になると、物の味がわからなくなると云われている。果たしてそうだろうか。物を噛むことが出来なくなるからなのか。味は歯で知覚するのだろうか。私はそう思えない。入歯でも、味はわかるのだ。

六月の或る日、昼食を食べていると、四本ブリッジになっている前歯がとれてしまつた。その挿歯をハンカチに包みポケットにしまつた。こうなつては、残り物は飲

み下すように、口の中に放り込む他なかつた。

会社からの帰りに、自宅近くの歯医者に駆け込むしかない。しかし、通い付けの医者ではない。一年前、神奈川県住宅供給公社の家賃補助賃貸マンションに、やっとの想いで当選し、妻と一人で引越ししてきたばかりだつた。引越しに関係ある役所以外は、セブンイレブン位しかわからなかつた。

午後六時過、自宅に寄り、まず保険証を持ち、妻に尋ねた。

「歯医者なら、郵便局の二階にあるでしよう。私は行つたことはないけど、」

他には、溝ノ口までバスで行かなければならないようだ。どんな偉いお医者さんかわからぬが、飛び込むほかなかつた。

常々、自分の体や体調を診察し的確に判断し、健康について良き理解者になつてくれる医者に巡りあいたいものだ、と、願望を持っているのだが、なかなかそんなお医者さんに巡り合えない。ほとんど、医者にいいようにあしらわれてしまつてゐるのが現状だ。

前歯4本の挿歯の治療の時もそうだった。

「抜いて欲しいんですが、」

「いや、歯は無闇に抜くものではありません。まだ歯の根はしっかりとあります。レントゲンをとってみましたが、丈夫なものです。」

そうして、週三日、延べ二ヶ月ほど通院させられてしまつた。えらく、日数と費用がかかつたことが記憶に残つていた。

お医者さんは、患者に対して丁重ではあるが、どこか患者を見下している態度がみうけられる。慄慄無礼な感じはぬぐえない。

何故、歯は抜かないほうがよいのか。健康上どう違うのか。素人に分かりやすく説明して欲しいものです。

郵便局の二階の宮前歯科医院の扉を開けた。一段高いところに受け付けがあり、若い女性が闖入者をみていた。

「拔歯して欲しいんだ。」

「予約しますか、」

「いや、初めてですけど、」

「家族の方は、どなたか来たことはありませんか、」

「いいえ、」

このへんで、急に嫌気がさしてきた。予約制の歯科医院のようだ。医者の権威を誇示されてるようで、私の好みに合わない。

「ちょっとお待ち下さい。」

女性に近づいた男性と言葉を二言三言と交わした。

「どうぞ待合室でお待ちになつて下さい。」

出て行こうか、迷つていたが、今から歯医者を探すのも難儀な気がしたので、靴を脱ぎスリッパに履きかえ、待合室にはいった。三人ほどの患者が座つていた。周囲の壁を眺めまわした。医学博士の院長とアメリカの医者の二人で談笑して、額入りのカラー写真があつた。

反対側の壁の上方に四人の医師の名札が掛つていた。

こうして、宮前歯科医院へ通い、拔歯、型取り、歯並べ、そして、一ヶ月後に治療が終つた。上下に入歯が揃つた。

社会保険にもかかわらず、下の入歯を作る時に五万円

を治療代以外に請求された。給料十七万円のサラリーマンには痛い出費であった。四月から年金が貰えるので、従来三十五万円の給料が半分に減額されてしまっていたからだ。

通院している間、医学博士の院長先生は一度も診察に見えなかつた。診察に価する患者でなかつたかも知れない。歯科衛生士や技工士、そして、医師が立ち合つてくれた。予約制と医学博士という肩書きで、権威を誇示しているよう、見かけだおしの印象が残つただけなのは残念な気がした。

さて、総入歯になつたが、物を食べてみないことには、具合の良し悪しはわからない。早速、夕食で試すことになつた。

ご飯と細かく切つたキュウリを口の中に入れ、噛んでみた。ガリガリと歯切れのいい音はしたが、すぐ外れてしまい、何度も試みたが外れて物を食べる状態にならなかつた。仕方がないので、下齶の入歯をはずし、上は入歯、下はハグキで食事をすませた。翌日には、入歯安定

剤タフグリップを購入し、上下の入歯にぬり、食事をしてみたが、これもすぐにはずれ食べることは出来なかつた。その後も何回も何回も試みたが、継続して噛むことは出来なかつた。くたびれるだけで、ストレスがたまるばかりであつた。結局、上は入歯、下はハグキという方法で食事せざるを得なかつた。

最近では、堅いお煎餅も食べている。丸い物は四つか五つ位に、手で割つて口にいれる。暫く、口の中に入れておくと、唾えきの影響でお煎餅が柔らかくなり、食べられるのだ。これならなんとかなると、食べることに、多少自信がもてた。更に、タクアンを口に含んでみた。ところが、いくら口の中に入れといても細かくならず、往生した。今だに、タクアンは噛み碎くことは出来ない。しかし、食事の分量も減り、小さい茶碗一杯の飯と一汁三菜でゆっくりゆっくり食べている。

柔道の三船十段が九十歳代で亡くなるまで、入歯は使わずハグキとハグキで堅い物でも、噛み碎いていた、と云う話を聞き、私の気持は落ち着いた。

会社とは一年契約で翌年の保障はないのだが、一應、六十八歳が第一の定年退職時となつてゐる。それまでは、頑張るつもりで毎日、満員電車にもまれながら通勤している。果たして、六十八歳まで働けるかどうかわからぬが、自分自身の気持をひき締めている。一方、六十五年も生きてきたのだから、何時、死んでもいい、と、覚悟をしている。

それが、私の健康法なのかも知れない。

東南アジアで出会つた宗教

莊 司 忠 志

私が初めてマレー半島の歴史的な町マラッカを訪れたのは、一九六四年の二月である。当時は、シンガポー

ル政府との合併造船所設立のため、政府機関である経済発展局に出向し、家族とともにシンガポールに住んでい

た。たまたま中国系の人達が祝う旧正月と、イスラムの断食明けの休日が重なり、比較的長い休みがとれたので、ペナン島までマレー半島を縦断する、ドライブ旅行に出かけたのである。妻と二歳の長男を伴つていた。

五年まえの学生時代、東南アジア研究旅行のさい、ペナン島やクアラ・ルンプールなどに立ち寄った経験もあり、またマレー語も話せたが、シンガポールを後にしてジョホール州のゴム園を貫通する暗い道に入ると、ペナン島までの遠い前途に大きな不安を覚えたものである。

マラッカの古びたコロニアル・スタイルの安宿に一泊した翌日は、雨期にもかかわらず快晴で、熱帯の空には雲一つなくどこまでもブルーに広がつていた。

マラッカの町のほぼ中央の小高い丘の上、セント・ポール教会の廃墟に立つてみると、眼下に東西に長く、マラッカ海峡が横たわり、はるかかなたにインドネシアのスマトラ島が望遠できる。

教会の屋根はほとんど崩れ落ち、青天井に空が見通せる。私は教会の内壁に立て掛けられた墓石の墓碑銘を読もうとしていた。付近の墓地から集められた、一六世紀

から墓石は縦一・五メートル横一メートルもあろうか、墓碑銘ははつきりと読めた。その一つに「何年何月オランダのどこで生まれた誰それが某年某月神に召されここに眠る」とある。私は頭の中が混乱していた。どうして墓碑銘が読めるのか、どうしてオランダ人の墓がここにあったのか。

私はウッカリしていたのだった。五年まえに卒業した大学では、オランダ語や東南アジアの歴史を専攻したのに、墓碑銘がオランダ語で書かれ、マラッカには、中国人やポルトガル人の時代と、イギリス人の活躍した時代の間に、オランダ人の時代があつたことをすっかり忘れていたのである。

一六世紀中頃の日本にキリスト教をもたらしたフランシスコ・ザビエルが、日本人アンジロと運命的出会いをし、日本布教を決心したのはこの町であり、セント・ポール教会の庭にはザビエルの小さな石像が、西方彼方ローマを向いて立っている。

單なる観光旅行のつもりで訪れた、セント・ポール教会の廃墟でのキリスト教との出会いは、私に異様な感動

を与え、その日早速買い求めた何冊かの歴史書を、旅の途中読み耽った。

こうしてキリスト教やマレー半島の歴史のとりこになつた私は、東京に出張するたびに、一六〇七世紀からの日本キリスト教、特に隠れキリシタンについての本を探し求め研究することを趣味とするようになった。

最初の訪問から二二年後、再びマラッカを訪れた。私は妻と、休暇でイギリスからシンガポールにきていた長男も同行した。

私はまず二二年まえ遭遇したオランダ人の墓石を探したが、かすかな記憶をたどれば、墓石は昔と同じ場所にあつた。今度は長男がべつの場所でいくつかの墓石を発見し読んでいた。それらは一六世紀後半から一七世紀の、ラテン語で彫られた墓碑銘だった。長男はそのいくつかを英語に訳して、私と妻に説明してくれた。

ラテン語の墓碑銘のひとつには「日本に渡り、イエズス会司祭として一番目の地位にあつたサン・マーチンは使命を終え、日本からゴアへの途中、神に召されここに眠る」とあった。後で書物で調べると、確かにサン・マー

チンについて墓碑銘と同じ記録がある。

五、六年まえだつたか、東京からシンガポールへの機中、私は、二〇人あまりの東南アジアの青年男女と一緒になつたことがあつた。かれらは「日本青年の船」の参加者で、東南アジアのどこかで船に参加し、日本からそれをそれの故国へ帰る途中だつた。彼らの多くはインドネシアやマレーシアからであり、マレー語を話す私に興味を持ち、機内で私の回りに集まつてきただつた。話題が日本の宗教の話になつたので、私は日本の「隠れキリストン」の話をはじめた。

彼らのほとんどはイスラム教徒だつたが、数人のキリスト教徒もいた。フランシスコ・ザビエルが、その昔アジアで布教したことはみんな知つていた。

長崎の西坂公園に立つ「二六聖人の像」の由来、そのなかの最年少一二歳で殉教した少年ルドビコ茨木の清純で苛烈な短い生涯は、最も私の胸を打つ。一七世紀前半の禁教の弾圧の時代、キリスト教徒ベドロ・岐部は、日本を脱出した。目的はただ一つ、ローマに行き司祭となり、日本のキリスト教徒を救おうというわけである。

マカオを経てインドのゴアに渡つたペドロは、恐らく現代にいたるも何人も思いつかないであろう、無謀で過酷な旅に出たのである。インドから灼熱のペルシャ・アラビアの砂漠を越えついにエルサレムに達した。旅の星空の下、彼の頭の中には、西の彼方ローマのバチカンのみであつたろう。少年の頃からラテン語を学んでいたとはいえ、おそらく途中遭遇した未知の人たちには、キリスト教徒もおらず、ましてやラテン語を理解する人にも巡り会わなかつたろうし、一体どのような孤独の日々を過ごしエルサレムに到着したのであろう。ゆるぎない信仰心と強靭な肉体が彼の旅を支えたのであろう。おそらくペドロこそ、初めてエルサレムを見た日本人ではなかつたか。こうしてついにローマに達し、念願の司祭になつたペドロは、やがて敢然と禁教の故国に潜入し布教を始めたが、程なく捕まり殉教してしまう。

一八世紀後半の日本は、世界に向かって開きかけていた。キリスト教は依然として禁止されてはいたが、長崎の大浦には外国人キリスト教徒のためのフランス寺が建てられ、パリからプチジャン神父が派遣されてきた。一

八六五年八月一七日は、世界のキリスト教の歴史にとつては特別の日である。禁教の弾圧により、二五〇年まえに絶滅したと考えられていた、日本人キリストンが、突然ブチジャン神父の教会に出現したのである。役人の眼をはばかり、おずおずと教会に入ってきた初老の農婦が、ブチジャン神父に向かって「マリアのお像はどこに」「あなたとわたしの胸は同じ」と告白したのである。ブチジャン神父にとってのこの至福と驚愕の一瞬は、日本のキリスト教の長い不幸な時代の後の、時空を越えた喜びの時だったのである。

二五〇年もの気の遠くなるような、長い弾圧の時代を生き抜いてきた、キリスト教徒の悲劇は、さらに幾世代を経てまたも試練にあつ。平和な時代は短く、ある夏の朝、かれらの頭の上に、原爆という火の玉が、同じ信仰を抱く異国の人々によって落されたのである。

私は何かに取りつかれたように話し続けた。青年達は私の回りに輪をつくり沈黙したままだった。ふと気がつくと一人の青年が涙を流している。彼はインドネシアの西イリアンからの、真っ黒で髪のちじれた純情そうな青

年だった。インドネシアの東部の島々や、北部スラウェシ、スマトラのタパヌリ地方にはキリスト教徒が多い。

上智大学のアルフォンソ・デイケン先生は、少年時代、家の近くの教会付属図書館で、偶然、日本の二六聖人についての記述を読んだことがあった。そのなかで先生の心を捕らえたのは、一二歳の少年の身で、棄教の勧めを拒否し敢然と殉教した、ルドビコ・茨木だった。アルフォンソ少年はそのとき、ルドビコと同じ一二才だった。そしてアルフォンソ少年は、ルドビコが生まれ死んでいった日本にあこがれ、神父になり、ヨーロッパの小さな町から、日本に來たのである。

話が一段落したところで、若者たちが私に握手を求めてきた。みんな口々に「日本にそんなキリスト教の歴史があつたことは全くしらなかつた。今日は偶然本当に良いためになる話が聞けた」といって喜んでくれた。キリスト教の歴史は、イスラム教徒にとつても共感できる物語が多いのである。

三〇年もの昔、マラッカのセント・ポール教会から始まつた、私のキリストンの歴史への興味は、飛行機のな

かでの東南アジアからの青年男女との出会いによって、ますます深まっている。かれらの真摯な態度や、涙を流すまでして聞き入ってくれた西イリアンの若者を思い出すと、もっともっとしっかりした勉強なしには、みだりに人前で話せないと反省している。

長年世話をなってきたジャカルタ事務所の初老の運転手から、「日本には神様が八百万もいるそうだが」と真剣につめよられたことがあった。アラーの神様しか信じない、イスラム教徒のかれにとつては「ヤオヨロズの神」などとうてい信することはできない。私には日本の神道について説明できるほどの知識はなく、かれを納得させられなかつた。

これまで長い間東南アジアで、人々の日々の生活が宗教と密着しているのを見てきた。深い宗教心を持たない平均的日本人には、かれらの社会や文化を理解するのもつかしい。とはいえ、かれらとの付き合いなしには、日本の生きて行く未来はない。

中国 食の思いで

吉 善 清 己

私は定年後の十年間、塗料専門家として、中国を何回も訪問、約二年間、各地を転々と技術指導して回った。楽しみの一つは、訪れた土地の風情に接し、特有の食べ物に出会うことである。

山東省、青島（QINGDAO）市は、第一次大戦前、ドイツが統治したところ。赤い屋根の町は欧風の趣を残し、海に面して建ち並ぶ豪華な別荘は、高級リゾートの雰囲気が漂う。町の近くに、岩石累々の千メートルを越す山が海辺にそり立ち、山からきれいな水を供給する。この水を用いて、ドイツ人が醸造を始めた青島啤酒（B I J I U）は、うまいビールである。山の裏側は、車でないと行けない不便な漁村、大きな生き蟹を目当てに、工場の人たちと訪れた。出された料理の材料は、どれもこれも日本では高価なものばかり、贅沢な海の幸を味わつ

た。五月頃、海岸に天然わかめが打ち上がる。工場の友は海産物に恵まれていいのか、わかめを食べたことがないと言う。腐らすのは勿体ないと、日本の食べ方を伝授した。僅かに建設現場で働く、内陸部からの出稼ぎ労働者たちが天日に干すのみ。潮が引くと、広い磯に多くの女性が集まり、バケツ一杯に天然かきを採取する。彼女らはこれを売って家計の足しをしている。むき身は一・五センチ程の小さなものの、百五十日本円も支払えば、うまい鉄板焼きが食べられる。海水浴場に近い食堂街は、ガラス張の水槽に泳ぐ魚貝類を客が選び、好みの料理をしてくれる店が並ぶ。観光地の料金、高いのは常だが、車えびが一匹六百円もある。しかも小さな生簀の魚は瘦せている。この食堂街は旅行者向け、地元の人々は利用していない。くれぐれも価格に注意する必要がある。

福建省、福州市は海鮮レストランが多く、蛏（CHEE N）という日本のマテ貝の一回り大きい貝を食べさせる。身は軟らかく、茹でたスープも、日本では味わえないうまさであった。市場で蛏はキロ六百円、十センチ程の生きえびも六百円、蛤は六十円で買える。日本に比べ価格は格段に安い。（九五年秋）。海鮮レストランの味付けは薄口、中国特有の油臭さがないのが口に合う。亜熱帯の福州には龍眼（RUNIUAN）がある。楠に似た大木に、ピンポン球の褐色の実が鈴なりになる。皮は指先で簡単に剥け、果肉は眼球に似ている。白濁しているので、白内障の眼と、友と笑い合つた。甘さは少なく、さっぱりとした味は飽きない。九月中旬の白露の日に、龍眼を食べる習慣がある。家族全員の健康と幸福を祝うという。キロ百四十円、八九月に出回る。

湖北省、武漢市を流れる長江（揚子江）は千トン級の船舶が航行している。十年前、赤茶けた色をしているとはいえ、まだ透明な水が滔々と流れ、明石海峡を見る風情があつた。今は泥水に変わり、現地の人々は長江も遂に黄河と同じになつたと嘆く。武漢市で合流する漢水の水はまだ青く澄み、流域は三国志の史跡が多い。上流の襄樊（XIANGFAN）市郊外に、劉備の三顧礼で有名な諸葛孔明の故居がある。門前に劉備の馬をつなだ名木も残る。観光の途中、河に面した小さな部落で昼食をした。この地方のメニューは、豚、鶏、川魚、鰻、蛙、

すっぽんなどの料理。これらは骨付きぶつ切りだ。人々は口の中で骨と肉をより分け、骨はペッペ、ペッペと吐き出す。テーブルが汚れることなど気にしない。私は、鰻の骨をとるよう頼んだ。漢水の天然鰻は、人差し指の太さ、日本の養殖もののように大きくはない。食堂の農民夫婦は、中国独特の幅広い包丁を足で踏んづけ、生き細い鰻の方を動かして、背骨をとつてくれた。天然鰻の卵とじは、柳川と同じ味、養殖ものでは味わえないものだ。鶏とすっぽんのステーキも格別よかつた。このような小さな部落に、日本人が車で来て、農村の食事をするなんて珍しく、帰る時、五十人程が見送ってくれた。友好的且つ好奇心に富む人たちである。

長江と洞庭湖が接する湖南省、岳陽市は船乗りたちの安息の地。清代の遊郭の面影を残す建物が並ぶ。今は社会主義、色街は食堂街に変わり、人々で溢れている。光輝く広大な湖を眺め、ビールと共に味わう、三センチ程の生きた川えびの天ぷら、たにしの油いため、川魚の煮付けは、日本では味わえない。

河北、河南、湖北省の西に連なる山岳地帯は、唐代

の寺が多い。交通の便が悪い山岳の農村には、まだ経済発展の風は吹かず、昔のままの生活が続いている。工場の友人たちと、太行山脈の古寺を観光した。暑い日照のなか、山の本殿に参拝して、汗だくだくで麓の食堂に辿り着いた。水道の栓を開いて、顔と手を洗っていたら、突然水が泥水に変わった。貯水槽は川の水を引き、沈殿していた泥が混入したという。箸、皿、コップは熱湯で洗い消毒。暑さを我慢して、私は火の通った料理だけを食べた。このような田舎には、安全といわれる炭酸ガス入り缶飲料はない。ローカル製瓶詰ジュースは、うすめている水が危ないと聞いていたので、友の勧めるまま、ジュースをビールで割ることになった。アルコール殺菌である。冷蔵庫がなく、味のよくないローカルビールもジュースも冷えていないが、混合すると乙な味がする。

晩秋の山東省で、同行の友全員が下痢、食中毒の症状に。いつも、熱い料理を食べている私だけが助かった経験がある。最近売り出されたペットボトルのミネラルウォーターは安く、中国の友はよく飲み、私にも買ってくれる。しかし、私はその土地の生水は敬遠して缶飲料にしてい

る。

中國の人たちは豚肉をよく食べる。脂身は高血圧の原因になるとして、工夫された調理法に出会った。竹で編んだ平らな笊の上に、さつま芋と豚肉の角切を並べ、高温の水蒸気で蒸す。脂身は溶け落ち、香辛料が利いて、なかなかの味である。魚のない山岳地の食べ物である。

四川料理の麻婆豆腐は、日本の中華料理店のものよりも格段に辛い。大陸に滞在して、田舎料理の油臭さにうんざりしている私の口には、この辛さはご飯の菜として食欲をそそる。麻婆豆腐の味（辛さ）は、地方、地方で異なる。重慶市は山椒がきいてぴりぴりする。これぞ本場の味である。四川省の人々が好む重慶火鍋（H U O K U O）は、しゃぶしゃぶの一種。牛、豚の内臓の薄切、野菜をさっと熱湯に通し、唐がらしと香辛料で真赤な色になつたたれに漬ける。私には手におえぬ辛さ、とても食べられるものではない。

重慶市の工場食にてた白身の魚の天ぷら、この魚のステークは淡白な味で、毎日食べても飽きなかつた。尋ねると、炊事場のドラム缶に泳ぐ大きな養殖なますを見せられた。

なまづの泥臭さは、胡椒と少量の生姜を用い、見事に消している。なまづは奥地の重要な蛋白源である。

やしが実る廣東省、湛江市。この地の自動車工場は、一キロ足らずの食べ頃な黒鯛を毎夕料理してくれた。同行の日本人、Tさんと豪華なもてなしに感謝したが、魚はごま油とににくで味を付け、煮た調理法が続く。我々が望む、黒鯛本来の風味は消えてしまつて。たまには塩焼きの、さっぱりしたのが欲しいと話し合つた。日本人は、焼き魚の生臭さは気にならない。むしろ魚固有の匂いが好きである。ところが食習慣の違い、中国の友には魚の生臭さは耐えられないようだ。干物を焼く食べ方に会つたことはない。

レストラン、屋台で売られるらーめんは、日本の塩辛い味と異なり、どちらかというと関西風うどんの薄口である。食事の終わりに運ばれる目玉焼きとねぎをのせたらーめんは食欲を唆る。こつてりとした油料理の合間にでる湯（T A N、スープ）も塩気が少なく、あっさりと美味である。湯は中国料理全体の濃淡バランスをとつているように思う。

招待宴の主役、有名な北京烤鴨（KOUYA）は、私の味覚にもう一つ合わなかった。豚足を長時間煮て、柔らかくした料理は、中国人の人々が好むもの。私には豚の匂いが強過ぎる。招待宴で、日本人は刺身が好きだと気を使ってくれるが、箸は進まなかった。水をビニルフィルムで覆い、その上にスライスした白身の魚肉を並べている。日本製チューブ入りわさびを醤油にたっぷりと加え、彼らは頬ばる。宴会のしきたりとして、ホストが客である私の小皿に食物をとってくれる。小皿に置いてくれた刺身は、儀礼上、食べることにしているが、私は刺身は“不好”と言って敬遠している。汚れた氷に、直接魚肉を置いていないが、生は怖い。下痢をしたら大変だからである。招待宴の高価な料理よりも、手の込まない田舎の食べ物に印象に残るものが多い。さそりの空揚げは、一匹食べると、一年寿命が延びると言う。五四で五年伸びたのだろうか。出会いの旅は、今後も続けるつもりである。

「収穫祭」に招かれて

アンドルカーダー 栄子

あれは十一月半ばのことでした。私と夫・アベデーンは、英会話の出前をしているM小学校から「収穫祭」への案内状をいただきました。

——本年度も、勤労生産学習のまとめとして「収穫祭」を開催いたします。ご来校くださいますようご案内申しあげます……。

会場の体育館には全校生徒と教師、それに招待客の地区生涯教育センター所長やPTA会長や役員などなど数人、それに私たちでした。

ところで、あなたはご存知でしょうか。「米」という字を上下に二分してみたら八と八、つまり、お米が私たちの口に入るまでには八十八回もの手間ヒマがかかるという意味の字、「米」なのだそうです、

田んぼを耕し、水を張り、田植え、施肥、雑草取り、

稻刈り、稻こき、精米……と、このぐらいまでは私にもなんとかわかります。この地に住むようになつたお陰で見聞きし、わかりかけてきました。が、これ以外の目に見えぬ手間がなんと八十八回もかかるのだそうで。まあ、驚き恐れ入つた次第です。

M 小学校の生徒たちも八十八回の手間はかけなかつたけれど（父兄たちの協力のお陰で）、とにかく稻作を体験、毎年続けているのだそうです。

この日発表された生徒たちの作文にはそのときどきの体験談がとても正直によく表現されていましたし、男子と女子生徒が組んで、まるで夫婦気どりで踊る「百姓踊り」にも稻作の苦労と喜びがかわいらしく演出されていて興味津々でした。

問題は、その後でおこなわれた餅つき、いえ、みんなでついた（昔ながらの臼と杵を使って）お餅を会食する段に入つてからです。

つきたてのお餅が、父兄と高学年の子供たちの手でお雑煮、きな粉餅、納豆餅の三種となつて、まず私たち招待客に配られました。

と、とっさに私は

——ああ、やっぱりここでも……と、がつかりました。熱いものは熱いうちにいただきたい、お雑煮は特にそうだ、冷めたお雑煮なんて……と、好物なだけにがつかりどころか、正直のところがつくりきました。

全校生徒がそれぞれ自分の分け前のお餅を運んで来て、それがありつけるまでには、いったい何十分かかるんだろう、確かに何組かのグループには分かれているけれど…。とにかくこの間ずうと待たなければ——が、さつととにかくこの間ずうと待たなければ——が、さつと私の頭を横切つたからです。

——日本ではいつでもそうだ、冷たい折詰め、冷たい駅弁、冷たいお膳、天ぷらさえも冷たくって、冷たい朝食の目玉焼き……、ああ、外国ではとても考えられないことだ、熱いものは熱いうちに食べる、食べさせる、が何よりも大事とされている外国では。そうそう、冷えたカレー・ライス、あの時も散々だつたなあ……。

ある公民館で私がインドカレーの作り方を披露し、さて、みんなで試食の段に入つたときも、まさに今日同様だった、と思い出していたのです。講師の先生だからと

いうわけで誰よりも先に盛られてしまつたカレー、そしてやれやれ五十人近くの人にゆき渡つたと思ひきや、長々作り方のおさらい、感謝お礼の言葉などが続き……。大勢の前で私と夫は「俺食べるよ」、「いいえ我慢して」の言い争い。冷たいカレーにはがっくりうんざりだったんです。

考えても見て下さい。わが夫、アベデーンは生糀のインド人、カレー主食人間です。したがつてカレーには殊の外うるさく、鍋の中のカレーの色具合を一見しただけで良否を判断。このカレーが冷めでは元も子も無し。しかも、ナムやチャパティは言うに及ばず、ライスは湯気の立ちこめるアツアツでなければゼッタイダメ。

そんな彼にとってお雑煮はカレーほどではないにしても、お餅類の中での好物ときています。

彼は、出されたお雑煮の前で何分間か、いや何分も待たずして、サッとお椀に口を付け、いかにもおいしそうにすすぐ出したのです。「熱いものは熱いうちに。いただきまーす」とのたまうや否やです。

その後、何分もたたなかつたと思ひます。

今度はこの私までが、ええいとばかりにむしゃむしゃ喰いついてしまつてしました。まだ、周りの生徒たちの半数にもお餅が配られていません。他の来客も誰一人として箸を付けてはいません。それなのに……

です。

あのとき私にはわかつていました。日本人じゃない夫の方は大目に見てもらおう、でも私は違う、正真正銘の日本人だ。それに第一生徒たちもさぞかしお腹を空かしているだろうな、みんな揃つて「いただきます」と言うまでは待たなくちゃ、と。あれやこれやと内心、大いに抵抗感はあったのです。

にもかかわらず、ついつい箸を。箸を付け始めたラトルトン拍子に、そしてペロリと平げてしまつていました。夫のいう通りだ、熱いものは熱いうちにいただいて何が悪い、という理屈めいたものが私の頭をかすめたからでした。長い間のオーストラリア暮らしの習慣が、ものの考え方がむくむくと頭をもちあげていたのでした。あの席においても。

が、その晩でした。私は理屈はともあれ、自分の行為

が恥ずかしいやら情けないやらで、まんじりともできませんでした。

そして翌々日でした。同じ英会話クラスに出掛け、生徒たちと話し合えるチャンスに恵まれたのです。

「先生たちだって私たちと一緒に食べるべきです、待つべきです」

「先生たちはお客様なんだから早く食べて構わないと 思います」

「熱くて、おいしいうちに食べていただいてよかったです。私はまだって、冷たくなってからは食べたくないです」

生徒たちの意見は正直で、さまざまでした。で、私はとにかく生徒たちに謝りました。

一緒に食べたかった、食べるべきだったと心から謝りました。そして付け加えました。

「お客様には最後に盛り付けてあげたらどうでしょうか。そしたら一番あったかくておいしいでしょ、どうでしょうか」

彼らはじいっと考え込んでいました。

ともあれ、この日の収穫祭に招かれて私は改めて思い

ました。ご馳走を前にしての長いセレモニーにもうんざりだし、「まずはお客様に」の昔からの習慣、これもなんとかならないものだろうか、と。

パソコン通信雑感

中洲 靖雄

近頃、パソコンやパソコン通信に関する記事が、新聞紙上等に掲載されない日がないほど、常に紙上の一角を占める関心度の高いものとなってきた。

パソコン通信が、あの阪神大震災では、混乱した通信網に大きな貢献を果たしたといわれたが、これを機に改めてパソコンの存在が注目され、関心がもたれるようになってきたと言つても差支えはないだろう。

それほど、パソコンがだんだんと我々の身近に迫り、日常の生活に欠かせないものとなりつつあるのだが、若

い世代なら兎も角として、実際中年以降の熟年者にとつては、ワープロだとかパソコンなどと言うものには、およそ無関係と、頭から決め込んでいる人が圧倒的に多いのも事実である。

去る六月二十九日、関西地区ではABCテレビが朝の六時から六時半までの三十分間、「街だより、人だより」の放映番組に「熟年者のためのパソコン通信」を取り上げて放送していた。(首都圏では六月上旬、その他全国で放映された)。

番組の内容は、ある社団法人の文化協会がボランティ

ア活動の一環で、主として熟年者のパソコン修得希望者に、熟年の指導者がパソコン通信を伝授し、今はやりのパソコン通信の輪を広げて行こうと努力しているものを取り上げたものであった。実は私もこの教室で教えを受けた一員であったから、この放映は興味深く見守ったのは当然であった。

また番組では、その教室の卒業生であると共に定年退職後の生きざまに、一つの指針を提供している話題の主にも、焦点を置いた編集内容となっていたが、その話題

の主に知人である「蛸入道さん」と小島辰雄氏を起用していたのである。

一般的にパソコン通信をやる人達はハンドル名というニックネームをつけるが、そのハンドル名に「蛸入道」とつけた小島氏とは、ユニークなハンドル名もさることながら、彼の行動力とその範囲には、ほとんど同世代の私にも彼の真似は中々できそうにないほど積極性を持っている人物である。ニックネームさながらの外見と愛される人柄は、私も同じ教室の卒業生ながら、羨ましい存在なのだ。

彼は番組の中でも紹介されていたが、東京都杉並区の、ある福祉団体で、車椅子の人達の介添えも積極的にやるなど社会奉仕をやりながら、エッセイを書く教室に通い、食べ歩きも積極的、グルーピーの世話を率先する。

そして今やそれ抜きにしては考えられない程に彼の日常生活中に食い込んだパソコン通信があるのである。

翻って、私自身が「パソコン通信」に関心を持ち始めたのは一年半くらい前からである。丁度、現役を退くこ

とを真剣に考へざるを得なくなつて來た昨年始め、現役を離れて予備役となつた暁には、何を目標に、何を為すべきかを真剣に考へ始めた時が、その始まりとなつた。

正に蛸入道さんと同じ頃、同じ動機だったものである。

こうして私は「熟年者のためのパソコン教室」に受講を許され、パソコンのキーボードを叩き始めたのが、昨年の九月のことであった。蛸入道さんは一期前の受講生であったが、その彼は旅行などの止むを得ない時を除き、殆ど連日電子掲示板にメッセージを載せているのに比べ、私の場合は週一回が良いところで、不勉強極まりないのが実情なのだ。

さてパソコン通信なのだが、今の私にも離せない存在になつてしまつたが、ここに至るまでには何度も挫折しかけた経験がある。

六十代後半でハイテクの機械類に取組むわけだから、やむを得ない一面があるとは言え、教えを受けている時は分かっていても、時間が経てば忘れてしまっているなどは、日常の茶飯事であった。たとえば、「終了」の仕方が分からず、パソコンの電源を切つてしまえば終了で

きるが、それでは折角苦労して作り上げた大切なデータが消えてしまう可能性ありで、頭を抱えたことも数知れずであったのだ。

今でも分からぬ事だらけで、この道の奥深さは底無しではあるが、もう私にはパソコン無しでは考えられない程に密着してしまつた。

斯くしてパソコンの電源は毎日入れるのだが、上記の蛸入道さんは何かが違う。よく考えてみると、筆不精と気軽に筆を持てない性格的なものがあるようだが、それに真剣さの度合いも不足していると言えよう。私の場合はパソコンに組み込んだソフト「麻雀」と「囲碁」や「カード ゲーム」などにもその原因が潜んでいるようである。つまりパソコンで「麻雀」やその他のゲームを一人で楽しみ、より大切な文章を書き上げては、それをどんどんと電子ボードに書き込む、そしてそれがパソコン仲間との交流をどんどん促すという、本来のあるべき姿をないがしろにし、そばに押しやつてしまつていて。言うならば横道に外れてしまう時間が多すぎるからなのだ。勿論、パソコン通信のみならず、パソコン本来のデー

タベースや、表計算、その他多機能を駆使して、いろいろな面に活用すること等も疎かになつてゐるわけである。

しかしそれだけではなく、原因是、何といっても軽やかに筆が進まないと言う文筆力の不足が、大きく災いしているようであるし、私の場合は、やさしい文章が縦横に書けるような勉強が必要のようだ。

幸いにして、文章を書くには格好の修業の場を、複数得ることが出来たので、これまで以上にパソコン通信を駆使して、通信仲間との交遊関係を深めたり、書いても読んでも楽しい文章を、作品として少しでも多く作って行きたいものと思っている。

一方、蛸入道さんではないが、自分の持つ趣味や目標を活かして、少しは社会にも貢献出来るようなこともやってみたいものと、ささやかな思いを抱いているのである。

ではそれは何か？つまりは東京で自分がパソコンを修得したと同様の、熟年者のためのパソコン通信教室を開き、ボランティア的活動をやってみたいと密かに希望を抱いているのである。通常のパソコン教室は関西地区だけに限らずとも全国に無数にあり、ここで勉強に励ん

でいる人達が多数いる。

しかし、熟年者のための教室は一般のパソコン教室では、目的を達成させることは出来ず、教室側にも生徒側にとっても不満のみが残ってしまう。熟年者にはその目的に沿った教育内容で、受講者の立場や能力などを十分に熟知した講師達の指導で、それなりの教育の場を作つて行く事が何よりも肝心なのである。

私が卒業し、蛸入道さんが学んできたような教育の場でなければ、熟年者の求めていたる理想のパソコン教室にはならないと思うし、そんな教室をボランティアの手で開設してみたいという夢……お手本はある訳だから、何年掛かろうとも何とかやってみたいものと密かに希つてゐるのである。

時差とつき合う

大塚 滋

そして今、イスタンブルに着いて三時間遅らせた。差引きイスタンブルと東京の時差は七時間、あさって成田に着く前に七時間進めなければならない。

平成六年もおし迫った十二月二十三日の夕方、トルコ航空603便、ボーイング737-500はトルコのイスタンブル、アタチュルク・ハバリマニ空港に着陸した。現地時間で十九時四十八分、定刻より遅れること三分、しかし腕の時計は二十一時四十八分を指している。出発地、中央アジア、トルクメニスタンの首都アシュガバド（旧名アシハバード）とは三時間の時差があるから、時計を三時間遅らせる。

地球を東西に飛ぶ時の例にもれず、今回の旅もまた時差に悩まされた。

成田を出発して、最初に着いたモスクワと東京の時差は六時間、西へ飛んだのだから時計を遅らせる。

次のアシュガバドはモスクワと時差二時間、東へ戻ることになるので、二時間進める。

アメリカの東海岸、ニューヨーク、ワシントンへは何回飛んでも、時差に悩まされた。東海岸と東京では十四時間（サマータイムの時は十三時間）の時差があり、直行便は約十二時間（帰国便は約十四時間、この差は偏西風による）かかって飛ぶ。時差と飛行時間がどちらも約半日だから、東京を昼頃出た飛行機は現地にも昼頃着く。しかしこの間実際には約半日しかたっていないので、到着した時、東京は真夜中、眠くてたまらない。そしてニューヨーク、ワシントンでようやくベッドに入れる頃、東京は朝、今度は眠い筈なのに目が冴えて一向に眠れない。

生まれてこの方、体が覚えている昼と夜のリズムが完全に逆転する。このつらさは経験した人でないと分からぬ。なかでも飛行時間と時差がどちらも半日というのは最も苛酷な条件だ。

「麻雀で徹夜したのと同じだろう」

という人もいるが、全然違う。そのひどさには個人差があるようだが、犬や猫は平気だそうだから、ひどい人は自慢していいのかも知れない。

船で海外に出かけていた頃とか、飛行機でもグアム、ミッドウェー、ハワイ、西海岸とゆっくり飛んでいた頃には考えられなかつたことで、ジェット機の出現によつてもたらされた現象ゆえ、これを「ジェット・ラグ」(jet lag) と呼ぶ。辞書にも「ジェット機で東西に飛び場合の時差による疲労、神経過敏など」とある。日本語では「時差ボケ」という。差別用語などと野暮なことは誰も言わない。国語辞典にも載つているし、なによりも言ひえてまことに妙である。

出張の最初の一週間ぐらいは仕事のパワーが明らかに低下しているのが分かる。「アウトブリット五十パーセント」などと話し合うが、正に時差ボケのせいである。モスクワとの時差六時間は、アメリカ東海岸に比べればそれ程でもないが、ウォトカ、キャビア、ソーセージなど、到着した日の遅い夕食の席で、誰かがアクビを喰みころすと「東京では夜中の三時だよ」と別の誰かが言

う、それを聞くと、急に眠くなる。

太陽と地球の朝と昼の関係で、時差が生じるのは避けられないが、東西に長くのびる国では、その国の中においても時差が存在する。このことによって、時差のない日本では思いもつかないような珍事や厄介なことがおこる。

アメリカの大統領選挙で、東海岸が投票締切時間になつても、西海岸やハワイではまだ三～五時間を残しているから投票が続いている。この間に東部地域の開票速報がテレビ、ラジオで流される。この速報が、これから投票しようとしている西の方の人々に、大きな影響を与える。大勢がきまつたとして、それでも投票所へ足を運ぶ人がいるだろうか。

電話をかける時も、常に時差を考えなければならない、もう出勤しているだろうか、昼食時ではなかろうか、ワシントンと東京では昼夜逆転だから、電話の時はどちらかが夜、眠いのを我慢しなければならない。これに休日

がからむから、遠い国と電話するのは大変だ。

アルジェリアに出張した時はこの極端な例だった。時差は八時間、首都アルジェで仕事を始める九時頃、日本はすでに十七時、ちょっとでも遅くなると日本には誰も電話先にいない。おまけにアルジェリアでは木曜、金曜が休み。そのかわり土曜、日曜は平日である。日本との国が共に働いているのは、僅かに月曜、火曜、水曜の三日間だけ、あと四日はどちらかが休んでいる。

時差と休日、よほどよく考えてタイミングをはからないと電話で話すことはむづかしい。日本にいる時と相手国へ行った時では時差のプラス、マイナスが逆になる。口で言えば簡単だが、そうでなくとも出力が低下している頭ではこれがこんがらがって、イライラがつのる。東西をむすぶ輸送機関の時刻をどう扱うか、これがまた大変に厄介な問題である。

飛行機の場合、発時刻、着時刻は、すべて出発地、到着地の現地時間（これをローカルタイムと言う）で示されている。したがって時差のある二点間では、発時刻と

着時刻の差が区間所要時分とはならない。

飛行機は、空を飛んで二点間を直接結ぶから、途中の時差には関係なく、到着時に、時計をそこのローカルタイムに合わせれば事はすむ。しかし、これが鉄道となると、話はそう簡単にはいかない。地上を走る場合は、時差の境界を通過する都度、ローカルタイムが変わり、これに応じて駅の時刻も、ラジオの時刻もかわる。この問題にどう対処するか、以下にのべる三つの方法が採用されている。

（一）時差なし方式

中国は東西に長いが、時差を設けず、全国同一時刻としている。鉄道にとっては、最も分かりやすい方法で、発時刻と着時刻の差が所要時分と一致する。時差がないという点では日本と同じで、アメリカの大統領選挙のようないこともない。しかし、国の東西において、太陽の位置と時刻の関係に大きなずれがでてくる。東西の長さや、北に位置するロシヤの時差からみて、もし中国に時差を設けるとしたら三～四時間となる筈だから、同じ五時であっても、東では夜が明けはじめるが、西はまだ真っ暗、

八時か九時にならないと明るくならない。西の方は人口も少ない辺境だし、なれてしまえば別に困ることはないのかも知れないが、東方重視といわれそうだ。

(二) ローカルタイム方式

カナダ、アメリカ、オーストラリアなどではすべてローカルタイムで時刻を表示している。したがって、時差の境界を通過するたびに時間が進んだり、遅れたりする。西へ走る場合、境界を過ぎると日付けが前日に遡ることもある。この方法は飛行機と同じで、時差のある地点を結ぶ時は発時刻と着時刻の差が区間所要時分とはならぬいが、日の出、日の入りに対応した各駅のローカルタイムと列車の時刻は一致する。

(三) レールウエイタイム方式

旧ソ連で採用されていた方式で、現在でもバルト三国、ウクライナ、ベラルーシを除くC.I.S諸国で使われている。これはモスクワのローカルタイムを全鉄道の時刻とするもので、時差のある地方のローカルタイムとは大きく食い違う。モスクワと、鉄道が走っている東の端沿海州地方とは七時間の時差がある。駅に掲示され、時刻表

に記載されているウラジオストック～モスクワ間急行「ロシア」号のウラジオストックの発時刻十七時五十五分というのはレールウエイタイム、即ちモスクワタイムであって、現地ウラジオストックのローカルタイムでは翌日の〇時五十五分となる。この結果、ウラジオストック～モスクワ間、時刻表では七泊八日であるが、乗客にとっては六泊七日という不思議な現象が生じる。トーマス・スクックの世界の鉄道時刻表でもモスクワの到着は八日目となっている。一体どっちが正しいのだろうか。

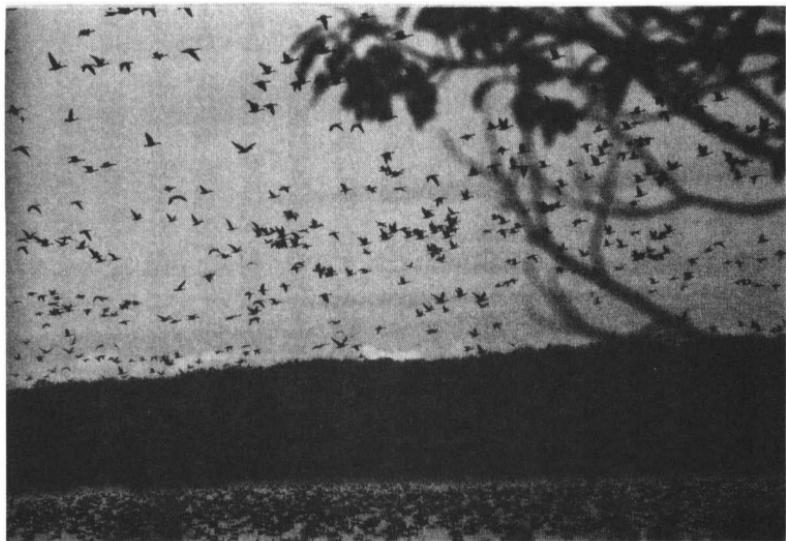
ハバロフスクの駅ビルの正面には、有名な三針時計がある。長針は一本、短針が二本でそのうち一本はハバロフスクのローカルタイムを、一本はレールウエイタイム（実はモスクワ時間）を示している。

発時刻と着時刻の差が所要時分とはなるが、各地のローカルタイムとは大きな違いがあるため、駅の掲示時刻とは全然違う時間に列車が着発する。慣れない人や旅行者には何とも分かりにくいか、旧ソ連の万事モスクワ中心主義の好例といえよう。

このように時差といふものはまことに厄介なものである。しかし、なくならない以上これとうまくつきあうことが要求される。時差のない日本ではなじみもうすぐ、分かりにくいものだが、国際化が叫ばれ、海外旅行が一般化した現在、時差について考えてみるのもムダではあるまい。

マガシの渡り

岩瀬 昭三



美唄市の宮島沼の上に飛ぶマガシの群

クワッ、クワッ何処からか鳥の鳴き声が聞こえてきます。聞き慣れない声です。はてな、何処からだろう。池の周りの茂みを目をこらして順々に見回したが鳥の姿はありません。まあ、いいかとあきらめてまた釣竿を手にしました。

しばらくするとクワッ、クワッという鳴き声。変だな

間違いなくあれは鳥の鳴き声なのにどこにいるんだろう。
ひよいと上を見たら分かりました。

頭上百メートルほどのところを隊列をくんだ鳥が北に向かってつぎつぎと飛んでいきます。飛びながら鳴いて

いるその声です。そうか、あれが今朝新聞に載っていた渡り鳥のマガノ群れか。見に行ってみよう、と釣果のないヘラ鮎釣は止め竿を車にしました。

朝刊には、この近くの美唄市「宮島沼」に十月中旬渡

りのマガノが大挙して飛来して来ている、その数いままでに三万羽。と載っていました。

宮島沼は、石狩平野の北村と月形町の境に架かる鉄橋の手前を右に入るとあり、ここから車で約二十分も走れば行けます。

「宮島沼入り口」の立看板のある農道を六百メートルほどで沼が見えます。さらに沼ぞいに少し行くと広さ二百平方メートルくらいの宮島沼マガノ観覧場所に着きました。一般の見物人やカメラマンが三十人くらい来ていました。あまり人数は多くありません。十月二十一日の土曜日の午後だったのですが。

正面対岸の水辺一帯にマガノの群れ。数千羽以上はあるでしょう。びっしりと群がつて泳いでいます。水草を食べているのでしょうか。遠いので小さなデコイがゴチャゴチャと浮かんでいるように見えます。

そのうち一群がサーッと水を波立てて飛び立つと、入れ代わりに別の一群がスーと游泳中のマガノの間に着水する。入れ代わり立ち代わりです。余りの数の多さにしばらく見とれていきました。

写真を撮ろうと観覧場所から離れ、右手の稻刈りの済んだ乾いたタンボを行くと、はるか彼方の山の方からそれぞれ二十羽ぐらいの隊列を組んだマガノの群がつぎつぎと姿を現します。あまり低空は飛んでいません。かなり高い所を鳴き声を掛け合いながら飛んで来ます。整然としたみごとなV字型の編隊飛行です。

どこかでみたような気がしました。妙な話ですが、戦時中学徒動員で静岡の飛行機発動機工場に勤務中、空襲警報で茶畑に避難しているとき見た東京方面へ爆撃に向かうB-2九の編隊に似ているのです。五十年前のことが突然マガノの群れを見ていて蘇るなんて、よほど恐怖の

思いが記憶に刻印されていたのでしょう。

群れで飛び立つときはバラバラですが、上昇するつ
れてクワッ、クワッと鳴きながら順次V型の編隊になつ
ていくのに感心しました。隊長がいて編隊を指揮してい
るふうにもとれます。どの群れも同じです。編隊を組む
とき自分の場所があらかじめ決まっているのではないで
しょうか。

マガソは東シベリヤがその故郷。全長約七十センチ。

ずんぐりした感じで白鳥より小さく、鴨類より大きい。
くちばしと足はオレンジ色で、成鳥は、ひたいが白く、

腹に黒い横縞模様がある。冬鳥として北日本に渡来して
仙台市北方の伊豆沼などを主な越冬地としています。

宮島沼は水面積三十ヘクタール余り。周囲に木立ちが
少なく敵をいち早く発見できる丸くて浅いこの沼を、マ
ガソは、渡り途中の残された数少ない休息地としてお気
に入りなのでしょう。

冬になるとマガソはシベリヤから南下します。そして
春にまた故郷へ北上の旅に飛び立ちます。

どこにでもいるニワトリ、スズメなどは普段格別気に

止めていませんでしたが、目前のマガソの群衆の光景に
野鳥の生き方についてあらためて考えさせられました。
昔、マガソは、日本全国に飛来し詩や和歌にも詠まれて
いました。しかし、沼、干潟、水田などの湿地が姿を消
すにつれて、マガソも次第に北に安住の地を求めるよう
になりました。その残された最後の休息地が宮島沼です。
大切に保存したいものだと、マガソの渡りの安全を願
いながら帰ってきました。

本年雑感

岸田 健

去年五月に妻を失った。平成四年一月から腹膜透析を
はじめたが、うまくいったのはその年だけで翌年早々か
ら容態が悪化し入退院を繰返し、激しい嘔吐の苦しみの
末、命が尽きた。

その丁度四ヶ月前の一月十七日に阪神大震災が起ったが、妻はその時は既に痴呆化しており、病室であれ程揺れ、あれ程物が散乱したのに、少しも分かっていない様だった。人間というものは、苦しさが長く続くとこれに耐えられず何とか逃避しようという本能が働き、自分からすんで呆けて了うものだと誰かに聞いたことがある。妻の場合もそうだったと思う。

病院は家から五百米の所なので、すぐ駆けつけ病室内を整理した。しばらくして怪我人や瀕死の人達が続々と搬入され、病院はさながら戦場の様に足の踏み場もない有様で、十日程は何をしたのか思い出すことが出来ない。幸い我が家は倒壊を免れ、小生自身は何とか生活出来たが、地震のことなど全く眼中になく、病人の容態に一喜一憂していた様だ。一日に何度もおしめを取り替え、その都度病人の腰を持ちあげるのだが、はじめは何ともなかつた小生の腰が半年も経つとだんだんおかしくなり、最後は痛さを通り越して力が抜けて了つた。もう駄目だ、と思った時にこの世を去つた。気を利かせてくれたと思う。

友人とは有難いもので、大変気を遣つてくれお誘いを受けることが多い。このペンクラブもその一つだがプロ野球の観戦、能、ミュージカル、宝塚歌劇、ファッショントーショー等の観劇、俳句、茶道、美術館やお寺巡り、ゴルフ、同窓会等々手帳がスケジュールの記入で真っ黒になる位の過密状態だ。妻の友人に「年寄り臭く、じじむさくなつたら付合わないわよ」と言われ、身ぎれいにす

あれから半年経つた。看病の時も無我夢中だったが、妻が死んだ後も無我夢中である。先ず血圧が六月はじめに一二五〇一二〇〇に急上昇した。小生は若い時から低血圧で大体六五〇一二〇位が何十年も続いていたので、二〇〇にも上昇するともうどうしようもなかった。恐らくきつい暗い表情をしていたと思うがそんなとき長女の嫁殿が「つくり笑いでもいいからニコニコしたら・・・それを続けてればそのニコニコが少しは本物になりますよ」と言う。そうかも知れないと気付いて「そうだ不景気な顔をしていれば誰も付合つてくれない、心の中はどうであれニコニコしよう」と決心し、以来そのニコニコを続けている。

る様努めている。お蔭で時々誘つて頂ける。

ところで、色々顔を出している中で同窓会のことを書きたい。

この年頃になると大体仕事の方も第一線を退き、時間的に余裕が出来、社会との接觸を求めて小学校から大学までの夫々の同窓会にせつせと出て、旧交を暖めておられる方が多いと思う。小生もその一人で、例えば中学の同窓会では年一回の総会の他に、月に一度の昼食会、グループメタ食会、二ヶ月に一度のゴルフ会、囲碁の会等々あり、すべてに出席することは不可能だが、そうして会つてみると益々親しくなつて一ヶ月も顔をみないとなんとか淋しい様な気持ちになるから不思議だ。

集まつて皆でワイワイやつていて中に気が付いたことがある。私の中学は一学年三〇〇人で六組あり、各組とも教室は成績の良いものが後の列で、前へ行く程良くないものと、きっちり順番通りに並ばされていた。

敗戦直前の三月に卒業して五〇年、その成績順が社会に出てからどうなつたかよく見ると、成績がいい人達と良くない人達の社会的な出世（俗っぽいが・・・）の順

番が必ずしも正比例していないのだ。
教護連盟の頭の固い先生に食堂や映画館に保護者なしで入ったところを見つけられ、停学になつたり、授業中に先生のウイークポイントを見つけて色々質問をして困らせるから睨まれて悪い点をつけられたりした連中が、色々な分野で結構出世しているのだ。

中にはヤーさんまがいの態度をとつて先生方にとんでもない無法者に見えたに違いない人が、後に高裁の判事になつたりしている。

勿論成績の良かつたのも偉い人は沢山いるが、どちらかと言えば、おとなしくて社会の組織の中でリーダーシップを發揮するエネルギーが足りない人が多かつた様に思える。

先生の言うことを良く聞き、先生の気に入る様な回答をし、答えが既に決まつてゐる問題に正確に回答出来るものが、いい成績だつたに過ぎない。つまり最近で言う偏差値のようなものが良かつただけだ。

アメリカのハイスクールでは優等生の条件として、必ず第一に人格高邁で人望があり、第二にリーダーシップ

があり、第三に実行力があり、四番目位に出来ればテストの成績が良いものと言うことになっていると聞く。

先生に向かって積極的に質問をし自己の主張を貫き、時には反抗した連中は、始めから回答のきまつたテストには興味がなかっただけだ。むしろ沸々とした気力をもつた真に人間として立派な人達だった様に思う。だから社会に出て衆目の認める存在になったのだ。

そういう生徒達を戦時にも拘わらず良く理解し暖かく見守った先生が何人もおられたことを記憶しており、立派な教育者だったと心から尊敬している。

最近は偏差値のみが幅をきかせ全人格的な教育がおろそかになつてゐる様で残念だ。

小生自身は兄が旧制高校受験に苦労しているのを見て、これではならじとカマボコになつた。しかも戦争中であり、楽しい思い出は余りない。今頃になってその青春を取り戻そうと熱い思いで同窓会等に出ている。

卒業後の仲間の発展振りを横から見させて頂きながら、楽しく騒いでいる。

この半年異常な状態が続いていたが、そろそろ独り暮

らしも板に付いてきた。前向きにやつて行きたいと思う。たまには社会のお役に立つ様なことをしたいし、生活も少しスローにして自然のリズムに合わせたものにしたいと考える此頃である。

『律』命名由来さがし

福井 律

私の名前「律」は、なぜ「律」と付けられたか、私は十二歳の時、三十六歳で急逝した母まさ江にも、昭和三十九年六十五歳で逝った父治兵衛にも遂に聞くことなく今日に至っている。その上、なぜ「たかし」と読むか、幼時から、たかし、たかちゃんと呼ばれ慣れて來た私は、律という字は始めからたかしと読むと思いつんでいたが、七十一歳の今日まで初対面の人でたかしと呼んで貰つた経験はわずかに一度だけである。

小学校の卒業も近い頃、「律」はたかしと読めるのか

と友人に質問され、父の書斎へしのんで部厚い漢和辞典をくり、一部六画「律」の項にたかし（高し）とあってホッとしたのを昨日のように記憶している。

ところが、今回この稿を書くにあたり調べて見ると「名のり」として、おと、ただし、たどす、のりとはあるが、たかしと読めるとは書いてない。字義としても、のり、おきて、述べる、はかる、おさめるの他、てうし音階、律官、漢詩の一体、僧団の規則等はあるが十数冊の大小漢和辞典には、たかしとは書いてない。漸く「字源」に、たかし一律に通ずとあるのを発見した。多くの辞典編纂者すらこうだから一般の方が首をひねるのは当然の時代になっているようだ。

従つて裏面にローマ字表記があればともかく、私の名刺は必ずフリガナを打つように心掛けたが、今度は「珍しいお名前ですね、この名前はなにか意味がおありなのでですか」と言わると「いや、たかしとは高しと同意で辞書にもありますよ」とまでは言えても、その先は本人も解らない。なにが高いのか、あるいは高くあつてほし

いのかと、そこまで深く考へることもなかつた。

摂津灘西宮、酒郷として有名な当地で屋号阿波屋、④味噌製造をしていた福井家は創業宝曆元年（一七五一）と称する旧家であったが、代々男子に恵まれず父芳松は、祖父由松に統いて高橋家から養子入りしたわけだが、私の長兄朗（あきら）が旬日で夭折したあと、八年後に生まれた私は福井家の貴重な男子として期待をもつての誕生であつただけ、この命名の由来はなんであつたか、ぜひ知りたく思うようになった。

空襲で工場を全焼したあと、米、塩、満州大豆と、統制と入手難の原料を闇で取得する氣力も才覚もなく、壳り喰いと好物ビールばかり飲む余生二十年の間、父の心の糧となつたのはやはり艸公と号する句作であつたのではないか。十七歳から野田別天楼氏、松瀬青々氏に師事して何冊かの句集を出し、最後の句集「冬柳」に老骨壯語と称して自伝的なものを残している。私もこの年になつて、漸く父の心境に思ひいたる様になつたが、朗といい律といいその名付の感覚は句作の心境につながつてゐるような感がする。

たった一度正確に「たかし」と呼ばれた経験というの
は、昭和十九年十月、特甲幹第一期生として久留米第一
陸軍予備士官学校入隊のことである。

大学一年生であった私は、その年徴兵検査で第一乙種
合格、学生時代はラグビーに打ちこんで体力では自信は
あったが、強度の近視は当時青年の憧れの海軍士官への
近道である予備学生とか航空隊には採用不適で、止むな
く翌年陸軍二等兵で入隊の予定であった。

この海軍予備学生制度に対抗して陸軍が優秀な速成將
校育成のため、人のいやがる初年兵教育を省略して優秀
な学生を初めから下士官（伍長）待遇で予備士官学校へ
入隊させる制度をつくってくれたから、渡りに船と志願
した次第である。陸軍の内務班教育、鉄拳制裁、海軍は
予備学生でも海軍精神注入棒と称する尻たたき等の男性
ヒスチリー現象は、恐らくどこの国の軍隊にも見られる
ことと思うが、特甲幹に関しては東條首相の嚴命とかで
私的制裁禁止はよく守られ、少なくとも私は殴られたこ
とはなかつた。

それはともかく入校の日、倉前（校庭）に机をかまえ

た人事係准尉殿が一人ずつ呼び出して申告して入校事務
手続きをする。生意氣盛りの学生であった私は考えた。
どうせ又、たかしとか、りつとか、どんな字とかうるさ
いことだらうから、「元氣いっぱい」「兵庫県出身ふくいり
つ」と言ったとたん雷が落ちた。「お前はふくいたかし
ではないか、なぜ嘘を言うか！」とやられた。當時私は
さすが帝国陸軍、生命を預かる軍隊は戸籍謄本までよく
調べて立派なことだと思っていた。

その後先月のこと、兄朗のことを確認しようと謄本を
取り寄せて見ると、驚くべきことに名前は漢字のみでフ
リガナはない。律の届け出も十三年八月十六日生まれ律
と言いう一字だけで何と読もうと公文書上は関係ないとい
うのが、現行の戸籍法の立場である。とするとあの准尉
殿は私の志願書を見て法律ではどうでもよい呼称まで、
正確を期して待ち受けていたことになる。いずれにして
も初対面の人に「たかし」と呼んで頂いたのは、この時
のみであった。

父芳松（後治兵衛を襲名）の男の兄弟は五人、次男佳
一、美次、義正、良一、美樹といづれもよしが付く。母

まさ江の没後、後妻喜久との間に生まれた四人は、公、明、大、正、で、こう、めい、せい、だい、が少しづれて正が妹となつた。戦中戦後、養育は大苦心であったが、皆元気に成人した。福井の家系の男子の一字名は、ここに確立した感がある。正は例外となつたが、私の二人の息子は、有（ゆう）要（よう）と名付けた。男女どちらでもよいのと外人の発音を考えたわけだが、ピーター、ルイスとこれは家内が付けた洗礼名らしきものでも呼ばれている。家内は三奈子と可愛い名前を、三十年ばかり前に秀加と芸者のような名前に改め、秀吉と清正がのりうつたと張り切っている。又不思議なことには、有の嫁はようこ（洋子）となり、要の嫁はゆうこ（友子）となつて発音を考えたのが呼びかけに混乱を招く結果となつた。

孫たちは、就（しゅう）文（ぶん）と男子は伝統（）を継いでくれたが、唯一の女子は亞里紗と三人分の名を一人じめして頑張ってくれている。

さて、もう大分以前のことになるが「律（たかし）」という名のため不都合なことはなかつたかと質問を受け

たことを思い出した。親友の甥が一字名で律と付けたいと言うのだが、というご相談である。その時は別に特に思い当たらないと言つたら「律」と名付けられ、現在は成人して立派に高槻で歯科医を開業されているとか。

従つて、たかし様はこの方一人より私は知らない。律子様は有名な女優を始め、あちこちで聞くことはあるが、先日偶然週刊文春で一字違ひの「荒井律」とあるのを見た。しかもグラビアで「みんながみたいニューフェイス」福島TVの美人アナ、こんな個性豊かで魅力的な女性に接したのは久しぶり…である。写真を見ると正にその通りであったから早速「律」の由来を尋ねると待つこと旬日、来ました。達筆のご返事が…。私の名前は「旋律の律」メロディちゃん、音楽好きの父上の命名、流行にのつて子をとつたため、気の強い女になつた…と簡にして要を得た返事を頂いてなるほどと合点した。

昭和六十三年の夏、伊予松山へ出張の余暇、道後温泉に近く、堂々の四階建、子規記念博物館を走り見する機会があつた。父所蔵の「仰臥漫録」「病牀六尺」は覗き見したことはあつたが子規六年余の苦難の病床生活を支

えたのは、母親八重と妹律の献身の努力にあつたとまでは知らなかつた。三歳年下の律が、まだ若さを残した身で、兄の看病と世話を一身をささげ、業病に苦しむ子規の偉業達成に大きな光をなげかけたことを思うと、父艸公の念頭には子規の尊像とだぶつて、妹律のけなげな姿が投影されていたのではないかと考えられる。まして、私の母まさ江は、小萩と号して十七歳から句作に精進し遣句集「天の川」には、千百五十九句もあつたことから併人艸公、小萩の希望願望の結晶の様な律命名であったのかも知れない。

司馬遼太郎氏によると、日本ではう行で始まる名は珍しく、母親八重はリツといえればいかついと思ったのか彼女を「リーサン」とやさしく呼んでいたそうだ。が、子規は「律は強情也」「木石の如き理屈ツメの女也」と難病人の我儘にしても悪態をついている。私は愛情と感謝の裏返しの表現と取りたいのだが…。

何かと父治兵衛のよき相談相手であった次弟高橋佳一叔父に聞いてみると、意外な答えが帰ってきた。「兄さんは若い時から趣味も広く、好き放題なことが出来て、

酒も飲める（叔父は下戸であった。）結構な人生だったと思う。従つて、行き過ぎも脱線もあつたことから反省の意味もあり、律は掟を守つて規律正しく生きて欲しいという願いを込めて律と付けたのではないか」と…。
嗚呼！

真夏の昼の経験

園田秀俊

僕の名前はマサルだ。もう一歳を過ぎた。とっくに四つ足から二つ足になつた。これから当分二つ足で用をたし、それから三つ足になり、最後は床にかえつて、……僕が世の輪廻を話すのは、まだまだ先のことだ。なにせ僕は両親の言によると、前途有望な子なのだから。僕についての両親のもつかの悩みは、僕が二つ足になるのは早かつたけれど、まだ完全にオムツがとれないことだ。

お母さんは試しに、僕のオムツをとってパンツをはかして

くれるけれど、時々、パンツの中にお土産を残す。僕の気持ちとしてはパンツをはずしてもらつた時の方が、

オムツの時より、なんばか解放感があつて、よけいに出すものは出したくなるもんだ。出るべきものを我慢するのは身体によくない。僕がしゃべれたら、僕の気持ちを

うんと話すのに、いくら僕が前途有望な子だかといって、二歳ちょっとで話すのは無理だ。両親は僕を連れて外出する時は、相変わらず僕にオムツをさせた。でも、うつとうしいおしめから、僕ができるだけ解放させてやりたいという親心からか、家にいる時はパンツにしてくれた。やはり時々、パンツの中にお土産を残したが、その頻度はぐっと減つた。もうすぐオムツとは“オサラバ”だった。今年の夏は僕にはそんなころだった。

◇ ◇ ◇

今年の夏は猛烈に暑かった。ある朝のことだった。

『今日も暑いねえ。海にでも行くか。』

『行きたいわねえ。でも海は混むし、マサルはまだ小さいし、行つてもマサルには楽しくないんじやないかし

ら。』

『そうだなあ、近くのXXプールはどうだい子供用だろ。』

『でもあのプールは、子供用といつてもオムツのとれない子はダメなのよ。』

『マサルはほとんどそれたも同じだろう。』

『そうねえ、ウンチも朝晩二回とほとんどきまつているし、万ープールの中でおしつこしてもそれぐらいは大目に見てもらいましょうか。』

『今朝、ウンチは?』

『いつもの通り、もうしたわよ。』

『行く前にオムツをとつていけば、入り口でわかりはしないさ。この暑さはたまらんよ。僕らも水着で監視役で水に入ろうや。』

僕のオムツが外された。でも今日はちょっと変だなあ。オムツなしで外に連れていってくれるぞ。この解放感はいいぞ。あれ、水がいっぱいあるところにきたぞ、ここ

の空気は他より幾分涼しいなあ。こんなに暑いとき水に入れたらいいなあ。

(お子さんは、オムツがとれていますか?)

「二歳過ぎてもうとれています。」

(では、どうぞ、楽しんでください。)

今日のウンチは色といい、固さといい、申し分ないぞ。

ほら、水に浮いても崩れることがないでしょう。

（なんだこれ？ あつあつウンチだ、ウンチだ。監

視さん、ウンチ、ウンチ、ウンチが浮いてるよ）
（えっ！、本當だ。これは大變！ 皆さんすぐ水から上

がって下さい。）（すぐ全部水を替えて、掃除しなくては。）
(新しく水の消毒もしなくては。) 等々。

◇ ◇ ◇

あれえ？ 皆何を騒いでいるのだろう？

ああああ、お父さん僕を急いで水から出して、どうするの？ お母さん何故こんなに早くプールから帰るの。
もっと居たいよう、もっと水の中で遊びたいよう。

◇ ◇ ◇

この夏、故あってプールの仕事をした。そのプールに入水出来るのは、下は普段でもオムツがとれてから、上は小学校二年生までで、オムツが完全にとれない幼児や、お母さん、出すもの出したらこんなに気持ちいいよ。

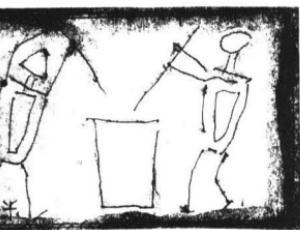
水着を着た。プールは円形で直径3m、水の深さは40cm、僕の胸のところまで。お父さんが腕に浮輪をつけてくれたから、沈まないで浮いていられるし、立とうと思えば立つてもいられる。こんな暑い時に、涼しいえ何とも言えない解放感を味わえるなんて、快適！ 快適！ 仲間もいっぱいいる。もっと早く来たかったなあ。快適な水の中では浮いているとお母さんのお腹の中に居た時のこと思い出す。僕を包んでいた周りの液は、いつも人肌温度で気持ちよかつたし、僕の肌を柔らかく守ってくれていた。第一、その中でオシッコをしてウンチをしても誰にも叱られないし、周りが息苦しくなることもなかつた。昔を思い出したらオシッコをしたくなつたなあ。ほら、力んでいたらウンチもしたくなつたなあ。ほら、お母さん、出すもの出したらこんなに気持ちいいよ。

◇ ◇ ◇

（では、どうぞ、楽しんでください。）
（お子さんは、オムツがとれていますか？）

小学校三年生以上は入水できない。市営の子供用・幼児用プールで渡渉池と呼ばれている。プールの仕事のなかには、監視の仕事、入口での料金徴収から不正入水チェックの仕事とあった。

いろんな経験をした。プールに来る直前にオムツをとつてきて、プールに入れてしまう親。その結果、自分の子供がプールの中でそそうをしてしまっても、始末の掃除に手も貸さずあわててプールから逃げていく親。あきらかに小学校三年生なのに、こちらで尋ねると横でついて子供に小学校二年生と言わせる親。規則で入水をお断りすると、"せっかく遠くから来たのに、なんでそんなに邪険にするの、意地悪!"と息まく母親。何も子供の教育に難しいことは要らない、親が社会のルールを守るその背中を見せるだけでいい、と思っている私にとっては、この親御さん達は、自分のお子さん達を一時プールに入れることは出来ても、子供さんにとんでもない教育をしているのではないか?と老爺心ながら心配してしまう。そんな一方で、



(この子は、まだ時々そそうをするのでオムツをしてあります。水には入れませんがこうしてプールの側で遊ばせてもらうだけでもこの子が喜びます。)（兄の方は小学校三年ですが、二年の弟が水に入ります。一緒にプールにいりますが兄の方は水に入れませんから）等々。きちんと規則を守ってくれる親御さんがいます。こういう親御さんの子供さん達には監視をしていても、ついつい、暖かい眼を注いでしまう。

プールの中でウンチをした親子は一度とプールに来なかつた。

プールの仕事はお金にかえられない良い経験を与えてくれた。人生勉強の場はいくらでもそこらにころがっている。

日本の情報収集・管理体制

中川十郎

一九五五年十月十五日付ニューヨークタイムズが、さきの日米自動車、同部品の包括経済交渉に際し、アメリカの諜報機関CIA（中央情報局）が日本側のやり取りを盗聴していたと報じて以来、日本のマスメディアは例により大変な騒ぎようであった。

一方、一九五五年一月の阪神大震災の際はライフラインが破壊され、通信、交通が途絶したため、日本の危機管理、クラウド・マネジメント能力の欠陥がメディアによって批判された。

日本政府の一部では今回のCIAの盗聴事件は日本側の対米貿易交渉にはなんら影響を及ぼさなかつたと弁明しているが、これは詭弁ではないか。

今回の事件によつても日本の官民の情報の収集、分析、管理、防諜体制がいかにおそまつかを、はしなくも露呈

している。

アメリカのCIA、ロシアの旧KGB、イギリスのMI6、フランスのDGSI、ドイツのBND、中国国家公安部、イスラエルのMOSAD、韓国KCIAなどの世界の主要諜報機関は冷戦終結後、その諜報活動の目標を軍事諜報から経済情報の収集へと戦略転換し、現在熾烈な経済情報戦が世界的規模で展開されているのである。冷戦終焉後、旧共産圏、社会主義圏が市場経済に参入し、現在国際市場はメガコンペチション—巨大競争—時代に突入している。

国際商戦では情報が死命を制する。そのためにビジネス情報、いわゆるビジネスインテリジェンスの入手に世界各国が官民とともに全力を投入することは当然のことである。アメリカではすでに一九八六年に、政官産学の競合情報専門家協会SCIPが設立され、今日会員二五〇〇人を擁し、諜報技術、競合情報収集手法のビジネスへの応用による国際ビジネス競争力維持、保持のための真剣な研究が行われている。一方、情報を重視するフランスでも同様な官民によるビジネス情報の共同研究会が毎

月開かれている。中国でも北京、上海で、またオーストラリアでもシドニーを中心に競合情報専門家協会が設立され、国際市場におけるビジネス競合情報の収集、分析、活用の研究が活発に行われている。

今回のCIAの盗聴はビジネス情報収集方法としては倫理的には問題はあるものの、今後、世界の主要諜報機関が国際ビジネス情報分野に介入してくることは、すでに九一年十月にスウェーデン・ルンド大学のビジネス情報専門家、ステバン・デディエル博士や、九三年五月にアメリカのウーバー・バーパートなどが「アメリカは今後経済情報活動にさらに関与してきて、通商交渉で軍縮に匹敵する情報活動を行うだろう」と予言した通りである。

さらに元CIA長官のターナー提督も九一年秋季号の「フォーリンアフェアズ」誌上で公然と「アメリカは経済スペイ戦をやるべきだ」と力説。フィナンシャルタイムズも九三年一二月一七日号で「経済安全保障こそアメリカ外交政策の旗手となるべきで、アメリカ外交は海外のアメリカ企業を援助すべきだ」と公然と要求している。

アメリカのクリントン政権は輸出の拡大と情報通信産業

の発展によるアメリカ経済の再生に尽力しており、情報と頭脳こそがアメリカの競争資源だとみなしている。かかる状況下、わが国としては早急に官民の情報機関、シンクタンクなどを統合し、情報の収集、分析、活用、情報の管理、機密保持、さらに防諜に対する一元的な対応を真剣に考究することが必要である。

今回の不幸な出来事を機会に「禍を転じて福」となすべきである。さもなくば来るべき巨大競争、ボーダレス時代の国際マーケットでの情報戦において、わが国は敗退し、悔いを千載に残すことになろう。

要するに日本はこの事件を契機に情報の積極的な収集、分析、活用などいわゆるオフェンシブインテリジェンスⅡ攻撃的情報収集に努めることは勿論、重要情報や致命的情報の機密保持、すなわちディフェンシブインテリジェンスにも、なお一層の注意を払うことがもとめられる。世界の諜報機関は今回のごとき電話盗聴のみならず、無線通信傍受、衛星、映像、写真による情報収集など、あらゆる手段を駆使して、ビジネス諜報戦に参入していることをこの機に深く肝に銘すべきであろう。

生命力の限界を拡げて

池田 善行

私の家の玄関には「きんさんとぎんさん」の手形がある。手形というのは、閑取衆がよくやるように、片手を朱肉につけて、五本の指の形がよくわかるように、ペタソと押した色紙のことである。その色紙のまん中には墨で、「一九九五年、百三歳」と書いてある。

先日も玄関迄荷物を届けにきた宅配便のおじさんが、その色紙を見て、「百三歳ねえ、長生きする人もいるもんだねえ。」と感じいったようにつぶやいて、帰っていった。

一体、人間は何歳までいきらるるものだろうか。人間はオギヤアと生まれてから、十五歳ぐらいで生殖年齢に達する。生殖年齢というのは、女であれば子を産める能力、男であれば子を産ます能力が備わる年齢のことである。一般に動物では、生殖年齢に達する年の八倍迄生き

られるといわれているから、十五歳の八倍の百二十歳が人間の生きうる限界ということになる。

百二十歳が限界とすれば、その半分の六十歳が中心点ということになる。前半の六十歳までには、気力の充実した、積極的に困難を開いていこうとする年代である。会社の定年をいうのも、このことを考慮して決められたものであろう。

後半の六十年というのは、仕事の現場を離れて、どのように生きていてもよいと、個人の判断にまかされた人生である。前半の六十年までを生殖年齢という物差しで計ると、第四期までにあたる。後半の最初の期は第五期で、これは六十歳から七十五歳までである。次の期は第六期で、これは七十五歳から九十歳までである。われわれの関心は当面第五期から第六期までで、この期間を有意義にすごすために、その基盤となる健康をいかにして確保するかということである。

ついでに、第七期と第八期のことに触れておくと、第七期は九十歳から百五歳の年齢層で、きんさんぎんさんもこの年齢区分に当たっている。きんさんぎんさんはま

だ耳も遠くないし、質問に対する受け答えもはつきりしているから、自然治癒力が正常に働いていると思われる。

第八期は百五歳から百二十歳の年齢層で、ここまで生きられる人の数は極めて少ない。家族の周到な支えと看護のもとに、静かに生き続いているという方が多い。

さて、第五期と第六期の方々の健康について話を戻してみると、第五期と第六期とでは体の中の器官の新陳代謝のスピードが相当違うことに注目しておく必要がある。

第五期では、第四期までに較べると、新陳代謝のスピードが遅くなる。食物と一緒に体の中に這入ってくる農薬や防腐剤や色素などの毒物は分解して、体の外に出す必要があるが、毒素排出のスピードも遅くなる。このため血液を清浄に保つことが難しくなる。血液の純化が遅れると、体の中の諸器官が正常に運転しなくなり、病気にかかり易くなる。

第六期になると、新陳代謝のスピードはさらに遅くなる。血液の純化のスピードも遅れるので、体の中の諸器官に障害が出てくる。

重い障害は別としても、耳が聞こえないとか、視力が

衰えてきたとか、膝がいたくて歩きにくくなったりなどの障害が外に現われてくる。

そのほか、免疫機能が低下してくるのも、この期の特徴である。Tリンパ球の機能が衰えてくるので、体外から這入ってきた悪玉の細菌やウィルスなどを、いち早く駆除することが出来なくなる。たとえば、肺炎になつても、熱が出ないため、肺炎になつたことを気づかれないまま、手遅れになつてしまふといったようなケースも起つてくる。

こうした障害を克服するには、心と体の双方を健全に保つよう心掛けなければならない。新陳代謝のスピードを早めるには、睡眠と食事と運動をバランスよく取り入れるように配慮しなければならぬ。それでも、エネルギーが不足する場合には「抗酸化作用のある栄養補給食品」をとつて、その不足分をカバーしなければならない。

いま私の手許に一冊の本がある。著者はハーバード大学の医学部出身の医者で、アンドルー・ワイルという人である。彼は近代医学の局部攻撃方式の治療法に疑問を抱き、全体としての人間の治療法に変えなければならぬ

ということを説き、自然治癒力というものが人間に備わっているのではないかと力説している。彼の著書は「癒す力、治る力」という題名で日本でも出版されている。彼の著書は世界的ベストセラーになっている。

その著書の中で、自然治癒力が他の要因によって邪魔され、その能力を發揮されない場合がいくつかあるが、その場合には「抗酸化作用のある栄養補助食品」に頼つた方がよいと書いてある。

結論を急げば、私の場合には次のようないくつかある。

(1) 第五期、第六期になれば、体の機能が衰えてくるので「玄米酵素という抗酸化機能を持った健康食品」をとり入れる必要がある。私は玄米酵素という食品を毎日食べているが玄米酵素には強い酸化防止作用がある。

(2) 毎日の食事は健康の維持に直結しているので、肉類、油脂類の量は極力抑え、野菜、魚、海藻、豆などの食事を増やすよう努力する必要がある。

(3) 健康の保持には、明るい前向きの心が必要なので、太陽の暖かい光に感謝し、触れ合う人の心に感謝して

生きてゆくことが必要である。

みなさまも、自分の生きざまに適応した健康法を早く見付け、健康に満ちた人生を送られるようお祈りしたい。病弱な体で命を永らえてみても、それは無意味な人生である。

夢を語ろう

今 村 亮

一、ジャパンニーズ ドリーム

もうすぐお正月だ。日本のお正月に見る初夢は、「一富士、二鷹、三茄子」が縁起がいいとの言い伝えがある。カジノで無我夢中の日本人観光客を見て、この三つのシンボルをあしらったスロットマシンを開発すれば、さぞ受けるだろうと、お正月のラスベガスで家内と笑つことがある。一、二、三とこの三つのシンボルがマシンに並んだ時、「Jackpot ランプが点つて「大当たり」、ダラ

コインがあとから、あとからじょんじょん流れ出て、とまるのことを知らない。でも、アメリカ人にこのcombinationをひひつ説明すればいいのかねとしばらく一人で議論した。

私は、中国の易經を引用して、この三者の持つサイクルが共通だからとの理由で納得させると書いた。家内は定説通り、徳川将軍家の領有地、駿河の国の三名物だとえんえんと説明する。駿河で一番高いのは富士山、次は愛鷹山、第三に茄子の値段と言う。愛鷹山なんて聞いたこともない。それに茄子の値段がここに入るのはおかしいと私は言った。それでは、もう一つの説はどうと家内が始めた。富士は不死に通じ、不老長寿を指す、鷹は高貴と訓が共通し、出世、栄達のこと、茄子は実がよくなる野菜なので、子孫繁栄よ、めでたし、めでたし。一応、何となく、わかる気はするが、訓読みとか、フジがフシだとか、アメリカ人に理解し難い。いずれにしても、不可解な組み合わせだね、と笑った。

日本に帰国して二年目、一九九六年に描く私の夢は、またもや、この組み合わせがベースだ。今度はアメリカ

人に理解してもらえそう。富士はアメリカでは、りんごの名前だ。アップル、しかし、私のPowerMacだ。鷹、鳶、鶴、何でもいい、これらの鳥はその翼を駆って空高く舞う。私のemailのメッセージヘッダーをはじめてくれる。イーサーネットであり、インターネットでありWorld Wide Webである。なすは、eggplant なすが、eggheadつまり、人間様、ホモサピエンスの集団である。国境、距離、時間の障壁を乗り越え、ネット上の仲間は、今や自由自在に交信し合い、友情を築いていく。年明けは、こんな夢のemailを第一に発信しようと考えている。

一、アメリカン ドリーム

一九世紀、アメリカにホーリーショ・アルジャーという人がいた。ボストンのユニタリアン教会で牧師をつとめた父親は、ホーリーショを同教会牧師に育てたが、彼はニューヨークの孤児院の先生をしながら孤児や、家出した子供達を励ます沢山の本を書き、一世を風靡した。ホーリーショは、どんな貧しい環境にあっても、子供達が、眞面目に、勇気をもって、困難に立ち向かい、一つ一つ、克服して

ゆけば、必ず、成功への道が開けると説いた。その苦しみが大きければ、大きい程、その報われ方も大きいと。靴磨きの少年も、新聞配達の少年も、たゆまぬ努力にて、いつかは大統領になり、大富豪になる。ホーリーショアルジャーは、Rags to Riches のアメリカン・ドリームの代名詞となつた。残念ながら、彼の成功物語は、いずれもこの真しに努力を続ける少年達を発見する篤志家の出現で、めでたく結ばれており、篤志家の存在が大前提である。

一九世紀末から二〇世紀にかけ、より豊かな生活を求めて、全世界から、New Frontier アメリカに移民が押し寄せた。ヨーロッパはもちろん、アジアからも、中南米からもやつてきた。中国人は、「金山」を目当てに、中米人は、"El Norte" を目指した。アメリカン・ドリームの終えんといわれながらも、底流には、まだ Wish Frontier としてのアメリカがある。今年、球界をわかせた Nomo Fever はその炎の再燃だ。

では、現代版アメリカン・ドリームとは何だろうか？ 戰後まもなく、デンバーで四人の若者が出会い、固い

友情に結ばれた。四人は全米に散らばり、それぞれ違った人生を歩み、家庭も築いた。一九七九年の夏、四人は二十年ぶりにデトロイトの球場で再会し、野球を観戦しながら、旧情を温めた、以降毎年、都市を変えながら、再会することを決め、International Baseball Conspiracy、略してICBと呼んだ。特に野球狂でもない四人が、多忙な職場を離れ、年に一度、気楽に出会う。朝は一緒にジョギング、最後の晚餐だけは、正装して、眞面目な話をして別れる。ボブグリーンが紹介した今様アメリカンドリームである。

サンディエゴに住んでいた時、日刊紙サンディエゴユニオンの記者リチャード・ラブの著書、「アメリカ2」を愛読した。アメリカは、三つの岐路にさしかかっていると彼は言う。第一の道は、すでにアメリカが通ってきた道で、大都市と煙突と、無限の経済成長に象徴される。第二の道は、現在通っている道で、町々は、柵や壁をめぐらし、人の交流を制限するような頭でっかちの組織がはばをきかせ、民主主義も失われている。第三の道は標識も少なく、町や村は遠く散らばっているものの、散在

するがために各自治体の責任と人間の結び付きが重視され、壁は排除され、家族愛、友情が復活する。

この第三の道を進むと、鹿がね、鷹が舞うRedwoodの林のそばに人家がある。人は自然の中で共存し、「自己」啓発にいそしみ、家族、近隣とだんらんする。このくだりは、富士山は該当しないが「一富士、一鷹、三茄子」が示す田園風景がほうふつとし、日米相互の夢も当たりあざといえども遠からずと思い始めた。

三、夢を語ろう

私は通算三〇年の米国生活者だ。今のところ、日米に三〇年ずつ、等しく生活したことになる。実際に眠つて見る夢も、アメリカの夢、日本の夢と五〇／五〇の割合である。「一、二で一」国の夢について書いたのも、そのためだ。

イングリッシュ・ドリームをかつて友人から聞いたこと

がある。

建築家とか医者とか、Prestigeを持つ職業を見につけないこと。お金儲けは田にないし、むしろ忌み嫌われている。商売人は、米国と違つて尊敬の対象にならない。

本誌を借りて会員各位に提案したい、世界各国の最新の夢を持ち寄つて語り合おうと。

今、ボスニアで、人は何を夢みているだろう？ 今、パレスティナで、人は何を夢みているだろう？ 今、国人や韓国人は？ 幸いインターネットもある。パンクラブ会員各位はおそらく、世界の各国に友人をお持ちのはずだ。このネットワークを活用して、それぞれの国の夢とは？ を問い合わせ、返事を持ち寄つて比べてみたい。こんな初夢をこの元旦に見たいと希望している。

大岡信氏の『第二芸術』

櫻井清治

雑誌「世界」一月号を読んで

雑誌「世界」の一九九六年一月号が、創刊五十周年記念号として発売され、その中の「『世界』の五十年と私」

と題する特集に、詩人であり、かつ詩歌の優れた評論家でもある大岡信氏の「『第二芸術』から『読書至』まで」がのっている。

この中で大岡信氏は、昭和二年一月号の「世界」にのった、当時東北大学の助教授だった桑原武夫の論説「第二芸術」を沼津中学の四年生のときに読んだことを書いている。また旧制高校に入った後に、全国書房より出版された文芸評論年鑑に「第二芸術」も収録されており、その中に桑原武夫が引用した中村草田男の句「咳くとボクリットとベートヴェンひびく朝」について、桑原の自註として、

「『第二芸術』の中に引用した草田男の句は、雑誌『黄蜂』から引用したのだが、それには誤植があり『咳くヒボクリット ベートヴェンひびく朝』が正しい由。もちろんそれによって私の議論に変化はありえぬが訂正しておく」

と追記しているのをよんでも仰天し、「タハハハと笑うほかない仕儀となつた」と述べている。これに關する「世界」一月号の大岡信氏の文は次の通りである。

「桑原氏が引用した原典が、すでに誤植だったというのだから、『世界』の誤植ではなかつたわけだが、私にとってびっくりするような経験だつたのは、訂正によつて知り得た原句が、今となつてはむしろ拍子抜けするほどに、つまらなく思われたことである。『咳くヒボクリット』という、いかにも草田男的な氣取りをもつた詩句が、私には何だか妙にうさん臭く見え、むしろ『咳くとボクリットと』ベートヴェンが響いた方が面白いではないか、という不届きな感想まで湧くのを、どう抑えようもなかつたのである。

それにしても、桑原氏の言い草もすごかった。『もちろんそれによって私の議論に変化はありえぬが、訂正しておく。』とはどうだ。あの誇り高き草田男は、これをどう思つて読んだことだろう。しかし、桑原氏の言つたことに間違いはなかつた。『第二芸術』という論そのものが、句の内容に立ち入つた批評とは類を異にしている。いわば社会学的腑分けに重点を置いたものだつたからである。『世界』が私に強烈な印象を与えた最初の出会いはこのようなものだつた。……」

さらに大岡氏は上記「世界」一月号の中で、

「一方の俳句界にしたところで『第一芸術』の衝撃がみなみならぬものであったことは言うまでもない。この論文は発表の翌年には単行本『第一芸術論』に収録され、衝撃は一層広範囲に及ぶものとなつた。何しろ、『第二芸術』というレッテルは、現代のコマーシャル・ライターたちでも、睡然として絶賛するほかないであろうほどの、みごとなキャッチ・フレーズだった。少なくともそれ以後まさに五十年の間、これに匹敵する迫力をもつた題目、内容の論文は、現代俳人たちによって、まだ一つも書かれていないと言つても過言ではないだろう。」と断言している。

桑原先生と虚子と「写生」

大岡信氏の「第二芸術」をこのように長々と引用するのは桑原先生と「第二芸術」について思い出があるからである。

「世界」は大増刷をする一方、これに反論して「世界」に寄稿しようとした中村草田男の「教授病」は、用紙不足との理由で岩波書店より返稿された、との話もあったくらいで、当然学生の反響は大きかった。当時俳句に何の興味のなかった私も、文科の桑原助教授の講義をききに行き、個人的にも友人達と共に、桑原助教授の話をきいたりしたものである。

桑原先生が大阪高校より仙台に移ったのは昭和十八年であるが、三高生のときの恩師で、当時東北大学のフランス文学の河野与一助教授が、哲学の教授になるのを機に、後任として桑原先生を説かれたからのことであった。その頃、戦時下の大坂は分潤氣も食糧もくるしくなつてきた時で、かつて一度だけ来たことのある東北はなんとなく野性的で、凜々たる感じがあり心ひかれていた、と桑原先生が話されていたようにおぼえている。

東北大学の桑原助教授が「現代俳句について」との副題をつけて、「第二芸術」を「世界」に発表されたとき、私は東北大学経済科の学生であった。これを掲載した

「世界」は大増刷をする一方、これに反論して「世界」に寄稿しようとした中村草田男の「教授病」は、用紙不足との理由で岩波書店より返稿された、との話もあったくらいで、当然学生の反響は大きかった。当時俳句に何の興味のなかった私も、文科の桑原助教授の講義をききに行き、個人的にも友人達と共に、桑原助教授の話をきいたりしたものである。

次世代への新たな学問の裾野を広げられた。参加者は梅原猛、梅棹忠夫、鶴見俊輔ほか一一〇名をこえるといわれる。

梅原猛をして「稀代の猛獸使い」といわしめた先生である。東北大学時代も、土居光知、小宮豊隆、河野与一先生、まだ時々講義をされていた阿部次郎先生、この十二月になくなつた理論経済学の安井琢磨先生や、三高同期の中村吉治、法律の高柳真三ほかの諸先生たちと樂しくつきあつておられたようである。

桑原助教授は河野与一先生を尊敬しておられた。その河野教授が齊藤茂吉に会つたとき。茂吉が「第二芸術」についての憤慨を河野教授にぶつけていたが、後年そのときのことについて記した茂吉の日記には「桑原というものは河野さんが東北大学につれてきたのか、われ失敗せり」と書かれていたとのことである。齊藤茂吉は明るく、すつきりした人なのである。

「第一芸術」について俳壇からご本人へ直接の反論もすごかつたようである。「私も教授にしてもらつたよ（反論の多くが、当時助教授の桑原先生を教授としてい

た由」と笑つておられたのをおぼえている。
俳壇からの数少ない評価もあつたようである。後年、西東三鬼に会つたとき、戦後の俳句の隆盛は、先生のあの論文によつて、俳句界が反省、奮起したからです、と丁寧に云われたのことである。

また「第二芸術」発表間もない昭和二十二年に高浜虚子がこれについてのべたコメントを桑原武夫先生が一九七一年の毎日新聞に次のように紹介している。「…第二芸術といわれて俳人たちが憤慨しているが、自分らが始めたころは世間で俳句を芸術だと思っているものはなかつた。せいぜい第二十芸術くらいのところか。十八級特進したんだから結構じゃないか」との虚子の言葉である。

桑原先生は、その前に虚子との出会いがあった。桑原先生は一九三四年の東京帝国大学新聞に「虚子の一散文」を寄稿したが、寄稿ご間もなく「ホトトギス」の編集部から、この全文を転載させていただきたい、との丁重な手紙がきて、ホトトギスの次号にその全文と虚子のこれに関する文がのつたという。桑原先生によれば、文章がそのまま公に引用され、ほめられたのはこれがはじめて

のことである。

それにしても虚子という人は俳壇では敵な人である。短命だった正岡子規を「写生」としてそれ引継いだのは、短歌の伊藤左千夫、長塚節であり、俳句の高浜虚子、河東碧梧桐である。何れも「アララギ」「ホトトギス」にうけつがれている。

森安理文氏が雑誌「俳句」の中で「写生」という語は、ホトトギスやアララギの派の人々には一枚看板の重みをもっている。それは文芸理論というよりは俳三昧において、仲間の団結を誓う合言葉のようなものであった。つまり同志が唱える「お題目」なのである、とのべて晩年の虚子の言葉を引用しているが、その一部は次の通りである。

…題目は何でもいいのである。『南無阿弥陀仏』でも『南無妙法蓮華経』でも差し支へない。ただ、全幅の力をそれに捧げて進んで行きさへすればいいと考へる。写生といふことは、元来曖昧な言葉である。茫漠な言葉である。が、その曖昧で茫漠としてをるところが好いといへば好いのである……。

「題目は何でもいい」という虚子は全くすごい人である。しろうと考えではあるが、虚子はあるいは、安易に何でも「写生」にむすびつけようとするホトトギス派の人々のいることを、苦々しく思っていたのかも知れない。私が社会人となつたあとも、桑原先生とお会いする機会はあつたが、「第二芸術」や俳句の話はでなかつた。ただ後年、その後の俳句の隆盛に対する感想をきかれた先生が、「第二芸術として批判したが、第一芸術であればこそ衰退はありえないわけだ。鶴見俊輔の限界芸術（「しろう」とが作り、しろうと自身が享受する芸術）の見地からの考察がされねばならない」とのべられた記事をよんだことがある。

梅原猛が「稀代の猛獸使い」と評した桑原先生を、今でも「骨太い知識人」と思つてゐる。（平成七年十一月三十日）

羽生六冠王の婚約

清水喬

昨年夏、テレビ各局のニュースで、将棋の羽生六冠王の婚約が報じられた。相手は美人女優。

彼はこの一年間、全タイトル戦に登場し、王将戦挑戦に失敗した以外は、すべての防衛戦に勝ち、史上初の六冠を手中に収めた。

勝率も八割を越え、驚異的な強さに磨きがかかっている。

将棋を知らない人でも、羽生という名前は、耳にしたことがあると思う。CMの知名度は高い。NHKスペシャルにもとりあげられた。

テレビ対局に出はじめた十代の頃は、見ていて下から相手をにらむハブニラミが気になつたが、いつの間にかなくなつた。最近は、第一人者の風格がただよう。

羽生さんは、以前から女性にモテモテである。タイト

ル就位式典の壇上で、花束を抱えた多数の女性に囲まれるのは、おきまりの光景だ。追っかけギャルも多い。二十五歳の若さ、端正な容姿、勝負師らしからぬやさしそうな風貌、年収一億を大きく超す高収入、将棋界ナンバーワンの座などによるものであろう。

婚約後は、追っかけの面々、どうなつたことやら。

彼は十九歳の時に、初タイトルで将棋界最高位の竜王をとつた。いわゆるチャイルド・ブランドの旗手である。彼を頂点に、森下、佐藤、森内、郷田など、将棋界の若手旋風はすさまじい。

羽生さんは、「将棋は技術」という考え方たのようだ。「科学者の眼で指す羽生将棋」という人もいる。

先輩の達人たちのように、個性的、人生哲学的な「棋道」というところ方とは、いささか異なるような気がする。

パソコンを活用する棋士は、羽生六冠王を始め、プロの三割を越えているという。やはり世代の違いもあるのだろうか。

一方、かつて史上最年長で名人になり、翌年羽生に敗

れた米長九段の若手軍団評が興味深い。「みんな素直で、謙虚で、礼儀正しい」

ちなみに、かく言う米長九段は、子どものような年の

若手を、「先生」と呼び、教えを請うのだそうだ。

礼儀は、今の世の中では影がうすい。とくに、子どもをしつける親自身から、消え失せているのではないかろ

か。
ところが、社員の礼儀正しさを、マーケティングの柱にしている珍しい会社がある。ホテル事業を営む、ある中堅の地方企業で、ここの大長と総支配人にお目にかかり、お話をうかがったことがある。

この会社は、盛岡のホテルに次いで平成五年に宇都宮に進出し、開業初年度で婚礼を千組受注して注目を集めた。これは市のマーケットの三分の一にあたる。売上も目標をはるかに超えたよし。施設を婚礼中心に徹しているのが、ハード面のユニークな戦略。もひとつが人の面。この会社の厳しいしつけは有名だ。

会長いわく。「サービス業は心がこもっていればよい。心がこもっているかどうかは、『お辞儀』に表われる。

世界で最も美しい挨拶は、日本のお辞儀だ。お辞儀は、頭を垂れている間、殴られようが何をされようが、全部あなたにお任せします、という意思表示なのですね。」

社員二三〇人のうち新規学卒者百三十人。一週間の合宿で、返事、お辞儀、挨拶のしかたなどを徹底的に教育したという。

その一例だが、ホテル内の日本料理店で、コーヒーの注文を受けたとする。鼻先で、「ここにはありません」というのは落第。まず「ハイ」といって、運んできなさい——と。

礼儀に欠ける現代、心のこもったお辞儀や挨拶が人気を高め、差別化にもなっているのであろう。

そういえば、対局の始めと終わりに、羽生六冠王は、深ぶかと頭を下げる……。

一回目のハッピー・リタイヤー

内 藤 敬 翁

退職は突然やってくる

平成七年十一月末をもって二七年間勤めた銀行を退職した。まだ五一歳である。

退職といっても生活環境に急激な変化を来たしたわけではない。既に四年半前から出向している銀行関連のシンクタンクに転籍したのである。仕事も肩書きもそのままである。最大の変化は給料が半分になったことであり、また銀行のバッジと身分証明書を返上したことである。前者はかなりきつい変化であるが、後者は昨今、とりわけ世間の風当たりの強い銀行員でなくなつたためか、なんとなくほっとした思いもある。複雑な心境である。退職理由は今はやりのリストラである。バブル崩壊後の不良債権の急増とともに、経営合理化の一環として、子会社への転籍年齢が二年も繰上げとなつたのである。

かすかながら噂はあったものの、銀行の人事は常に突発的にやってくる。二七年の間、転勤は常に突然訪れた。今回も十月初旬に唐突に転籍年齢繰上げの話（正確には転籍基準変更の説明）があり、翌月末には早くも転籍（すなわち銀行退職）とあいなつた。

十一月三〇日には本店において頭取出席のもと厳粛な定年表彰式があり、数百人の仲間（今回は特に多い）とともに無事定年（正しくは準定年という）を迎えることができた。まずはめでたしというべきか。引続き新会社で十数人の仲間とともに入社式があった。

本人なりのハッピー・リタイヤー

さて本人（すなわち筆者）の感慨や如何。人生花の二〇代から四〇代の大半を過ごした職場からの別離ではあるが、正直のところ未だ特段の感慨も湧いてこない。仕事がこれまでと変わらないためか、鈍な性格なのか。

“今日の次は明日が来る”、“ケ・セラ・セラ、なるようになる”、というのが的を射た心情であろうか。これも生来の繊細さ、感じ易さがラテンアメリカ勤務の間にどこかにふつ飛び、人生たくましくなつたせいか、はたま

た、年のせいで諦観の境地に達したためか、自分でも定かではない。ただ、もうすこしの間、ナイス・ミドルでいたいとの願望は残っている。給料の減った分仕事量が減ったわけでもなく、まあ今のところ、趣味に生きるとか、庭仕事に精を出すより今の仕事（アジア太平洋地域の研究）に打ち込んでみたいとの気持ちが強い。退職の挨拶状は、銀行在職時に関しては月並みな紋切り型の表現をちりばめたが、今後の仕事に関しては一箇所自分の意思らしきことを書いた。いわく、大変有意義な仕事を与えられたことに感謝し、微力を尽くす所存云々である。筆者の偽らざる心境である。優等生過ぎるであろうか。

しかしながら、冷静に考えると銀行退職後、筆者のかで何かが変わったような気がしないでもない。これは、やや漠然とはしているが、銀行の傘がとれたことに起因しているのではないかろうか。世間に数あるサラリーマンの職種の中でも、銀行は組織を重んじる代表的存在の一つといえよう。金銭を扱う性格上やむをえないが、個人より組織が重視される傾向にあり、それだけ組織への

帰属心を要求されるのである。以前、「組織を離れると、青空が見える」という某学者のエッセイを読んだ記憶がある。確かに「勤めをやめると世間の景色が違つて見えるが、それは一般的な現象である云々」という内容であった。これは筆者にも当てはまる現象のようだ。冒頭に述べたようになんとなくではあるが、銀行在籍時に比べほつとしたような、換言すれば肩の荷が下りたような感じがする。これは家の借金がなくなつたこととも関連があるうが、やはり銀行の傘がとれたことが大きいと思えるのである。しかし、「本当に青空が見えるのか」と問われれば、どうもはつきり答えられない。銀行の傘の内にもう一つ子会社のやや小振りな傘があり、この傘が視界を遮っているようである。

さて、一回目の定年を迎えるのは子会社定年までお預けのようだ。

ベンネームを選んで

どうやら本物の青空が見えるのは子会社定年までお預けのようだ。

以前先輩のお薦めで入れていただいた「企業O.B.ベンクラブ」に寄稿する気になつたことである。『グッド・タ

「イミング」で『悠遊』の締切日が設定されていたことも幸運であった。現役中は「まだOBでもないのに」という気持ちが働き、他日を期して会費のみ払っていたが、思いの外早く時機到来である。これからは時々「ベンクラブ」に寄稿しよう。物書きの真似ごとをしてみよう。

そして、これを機にペンネームをつけることにした。以下その理由である。

第一の職場での筆者の主たる仕事は書くことである。堅く、面白くもない論文や解説文ばかりを本名で書くのである。この反動で職場以外で軽いエッセイでも書いてみたい。もう一人の自分を主張してみたい。これが本名以外のネームをもうける動機である。しかし、あれこれ考えたが、ペンネームがなかなか決まらない。原稿締切りぎりぎりまで決まらなかつた。最後は「エイ」と決断して決めた。一人娘の名前をつけたときと同じであつた。

「内藤徹翁」と決めた。古風で若者受けしない、特に若い女性には全くもてそうにないネーミングになつた。しかし、親が名付けた本名（内藤徹雄）の痕跡を残したいという意識が働いた。加えて、将来は趣味として大好き

な歴史（日本史）で何か書いてみたいという願望もあつた。結局、三〇〇年前の先祖の名をそのまま拌借して「徹翁」という時代がかつた、ジジむさいネームに落ち着いた。五〇過ぎれば「翁」で結構という開き直りもある。「内藤徹翁」を宜しくお願ひしたい。

二回目の退職はこのままいけば、あと十三年後、二〇〇九年になる。それまで組織の中で組織人としての生を全うしたいものである。そして、願わくば二回目もハッピーリタイヤーであつてほしい。また、次のリタイアーこそ「一点の雲もなく晴れ渡った青空」の見えるものであつてほしい、一〇〇%組織から超越し、自由時間のとれる生活で、時々「ベンクラブ」に寄稿し、後は自分の好きな歴史の本を読み漁るのが筆者のささやかな願いである。六〇、七〇代でかくしゃくとして知的好奇心を追及しておられる「企業OBベンクラブ」の諸先輩をみると、つけ、つくづくあのように元気に人生前向きに生きていきたいと思う昨今である。

（追記）「ハッピー・リタイヤー」なる題名となつた。正しくは「ハッピーリタイアメント（happy re

tirement)" とすべきであろうが、前者の方が筆者にとってより実感に近い。あやしげな和製英語となつたがご容赦願いたい。

六十の手習い

亀井 弘次

「お父さんに習った泳ぎは、全く間違っていたよ」と息子が言つた。

当時横浜のあるスイミングクラブ。それも女子のオリジナル選手を出した有名クラブのスクールに通い始めた息子の言である。

「そんな事はないだろう」と反論しつつも、考えてみれば当方の泳ぎは旧制中学時代に習った確か水府流と言ふ泳法である。波のある海を出来る限り長く泳ぎ続けることを主目的としている。早さと美しさを競うプール泳

法とは自ら違つて当然である。

偶然このやりとりのあった一九八九年の四月に自宅近くのスポーツジムが開業した。その中にプールもある。早速会員になり泳いでみた。二十五メートルも泳ぐと息が切れる。こんな苦じやなかつた。中学時代には四時間の遠泳もやつた。海軍兵学校では夏は毎日連続一時間近く泳いでいた。永年の空白による心肺機能の衰えに愕然とした。

その頃未だ家にいた娘が、ここスイミングスクールに通い始めた。息子の処の様にハードなものではなく、樂しみながらクロール、バック、ブレスト、バタフライの四泳法を教えてくれる由。しかもこのクラスは小母さん主体で、コーチが生徒に頭が上がらないとの事だったが。

その年の秋から週一回のノー残業デーを利用して、夜のクラスに通う事にした。帰宅後軽く腹ごしらえをしてプールに行く。八時十五分から一時間のレッスンについて行くのに最初はかなり苦労した。コーチは二十歳そこの学生、生徒は二十台から五十台迄の男女混合。私

は勿論最年長者である。

それになまじ昔かなり泳いでいたので、我流の癖がしみついている。コーチの言う事を聞いてみると、冒頭の息子の言は当たらずとも遠からずであった。

一番の違いは平泳ぎである。昔習ったのは横泳ぎの足、所謂あたり足で、手は水面をなでるようにかく。頭は常に水面から出している。だが今のブレストでは、足は蛙足、一かき毎に潜ってゆく。この足の動きを直すのに半年はかかるだろうか。コーチが「漸く直りましたね」と言つてくれた時は正直嬉しかった。

他の泳法を含めて今の泳ぎは手のかきを重視する。クロールでも短距離のダッシュ以外は、足は体を浮かす為だけに軽く打ち、専ら手で体を引張っていく感じだ。

もう一つ苦労したのはブレスト、バタフライにおける体のうねりだ。「堅いですね」とコーチが言う。体の柔軟さでは若い人、特に女性にはかないっこない。だけど、このうねりが出来ないとバタフライは絶対に泳げない。水から体が出てこないので。鶏を水に放り投げた時のように、ばしゃ、ばしゃするだけで進まないし息も出来ない。

い。

爾来、六年間週一回のスイミングスクールに通い続けている。どうやら泳法の改造も出来、次第に力が抜けて楽に泳げるようになつた。スクールの度に一、三点改善すべきポイントを指摘されるのでスクール以外に週に二、三回はプールに行く。一回約千メーターは泳ぐので一年間に約五万メーターは泳いでいる事になる。

次にスイミングスクールの効用を述べよう。

第一に友達が出来ること。それも若い女性を含めて。スクールでないとプールに来ている女性に、やたら話しかける訳にはいかない。生徒同志ならば気軽に話題になる。中には世話好きの小母さんがいて「コーチを囮んで食事をしましよう」なんてことになる。

次にめったに風邪を引かなくなる。真冬には水温の低い日があり、立ち止まってコーチの説明を聞いていると震え上がる事もあるが、却つて皮膚が強くなるのだろうか。この点は太目の小母さんが絶対に強い。こちらが震えていても平気の平左、皮下脂肪の威力である。

三番目に泳いだ後サウナで汗を十分に出してから飲む

ピールの旨さである。これこそ天の美禄と言えよう。

さて、ここまで読んで戴いて、今から水泳を習つてみ

たいと言うお気持ちになられたでしようか。健康と体力維持のためにも是非お薦めする次第であります。

が掲げられている。

我が心深き底あり喜びも

憂の波もととかじと思ふ

西田の知名度が高くない今日、この歌のために歌人と誤解する人があるかも知れない。

西田哲学を論ずる資格が皆無の筆者は西田の唯一無二の大恩人、偉大な教育者北條時敬先生の事績の一端と西田との関係を記し、今は世の方には余り知られていない北條先生の没後六十六年の追悼としたい。（以下略敬称）

北條に初めて出会った頃の西田は懐旧記を広島高師校友会誌『尚志』（昭和四年十月）に寄せている。

北條先生に初めて教へを受けた頃

西田幾多郎

今年は「戦後五十年」であったが、西田幾多郎没後五十一年でもあった。

前者は論議百出、論壇をにぎわせたが後者は雑誌『思想』（十一月号）の西田没後五十年特集が目についた程度で、昔日、西田の講筵に列した者としては物足りない感がある。

西田記念切手が十一月に発行され、顔写真の傍に短歌

大きい山に接していると、それが全体どういふ山かよく分らない。私は先生についていつもそんな感じがする。それで幾度か先生のことを書いて見たいと思ったが、どうも考へが纏まらない。今は唯私が始めて教へを受けた頃のつまらぬ話を少しばかり書くに過ぎない。

私が初めて先生に御目にかかったのは、私の十六、七の頃と思ふ。先生が大学を出られて、すぐ金沢の専門学校に来られた頃である。私は専門学校へは補欠で中途から入ったので、まだ学校へ入ってなかつた時である。先生に教へを受けたいと思って或る人の紹介で、はじめて先生を御尋ねした。先生は玄関に出て来られて、今忙しいからと云ふので、蒟蒻板に摺つた数学の問題を渡され、これをやって来いと云ふことであった。其頃先生はまだ三十前であつたが、頭の禿げた喉仏の突出した人だと思った。

それから数日して、その問題を解いて持参したら、先生が逢つて話を下さつた。併しどうも沈黙な、話しくい人で困つた。

……中略……

それから私が高等学校に入り、先生から数学は云ふまでもなく、英語の訳説も教はつた。文学士の教師よりも、理学士であった先生の訳説の方がしつかりして居た。……中略……其頃先生は人物といひ、学力といひ、全校学生の景仰の的であった。当時、先生から教を受けたものは、

皆先生から多大の感化を受けた。先生が四高から一高へ移られる一年前、であつたかと思ふ。先生が自分の家へ来いと云はれるので、私は先生の御宅に御厄介になつた。先生はいつも学校から夕頃帰つて来られる。夜には、座敷で、先生のテーブルを真中に、左右に奥さんと私が机を並べて勉強する。……中略……先生は測り知られない様な深い大きいものがあり、非常に厳格な様で、その奥に何處かまた非常に暖かいもののある人であつた。併しその頃の私には先生は無口で、盤石にでも突き当つた様で、話し苦い人であつた。いつかも、先生黙つて居るから、此方も先生何か云はれるまで黙つて居ようと思って、夜深くまで黙つて対座して居たことなどもあつた。私が先生のお宅に居た頃かと思ふ。一日東京からT君が来て先生と話して居る時、先生は黙つて私とT君に遠羅天釜を一冊づつ下さつた。T君は禅といふものはどういふものかと云ふ様なことを云つたら、先生は脇腹に刃を刺し込む勇氣があつたらやれといふ様なことを云はれた。唯それだけである。私が学校をやめて、選科に入らうと思って、東京へ出た時には、先生から叱られた。選

科など学業の遅れたものの入る所だ。今から大学の入学試験を受けと云はれたのには困った。先生には多年御心配もかけ御世話にもなつた。……中略……今や先生なし。

無限なる寂寞の感に耐えないと、……中略……思ひ出るだに、涙の種ならざるはない。

次に北條の西田宛の書簡の一を掲げる。

拝啓頃者は勤学の模様如何に御座候哉先学年には貴君

甚だ缺席多く其為不覺の落第被遊候段右得止次第に有之候其後翻然御悔悟御勵精之由伝承大慶之至に奉存候課業を先にし自修を後にし以て内外を全ふせん事貴君に於いて難しと為ず自家の臆見を準尺とし敢て学校の成規に乖く固より其義に非ず順良寛温法に循ひ学に勤む学生の徳之より大なるは莫し貴君宜しく猛省す可し……中略……今日は日曜日にて朝半日の閑を得偶然思ひ出して此書面を寄す……中略……

去る頃は胡桃を沢山賜はり難有御納申候好物故折々烹て味ひ申候此段乍後れ御礼申述候

西田幾多郎様

机下（原文のカナはカタカナ）

この書簡は北條三十三歳、西田二十一歳の時のもの、厳格でありますから懇切鄭重、北條の為人と前掲の西田の回想を具体的に示している。

西田幾多郎編著『廬堂片影』（この書簡は明治二十三年なるべしと西田の註）

北條は禅に傾倒して参禅を重ねているが、西田は北條によって禅に教導され、北條に随行して越中高岡の国泰寺の雪門和尚にしばしば参禅し、終生、参禅、打坐に励んでいる。

北條は多忙中につても禅道修業に精勤し鎌倉円覚寺の洪川禅師、興津清見寺の真淨和尚、嵯峨天龍寺の滴水和尚、岐阜瑞龍寺の禪外和尚に参禅しているが、最も関係の深かったのは洪川禅師で「竹塙」の居士号を授けられ、禪外和尚からは「廓堂」の号を授けられ、この号が世によく知られている。

西田哲学の基底に禅があるとするならば、北條の影響によるものと考えざるを得ない。

五月十八日

北條時敬

明治二十一年、北條は第一高等学校に転じ、傍ら大学院に入学した。

北條は明治二十九年山口高等学校校長に就任し選科出身の故に四高の講師という不遇の西田を翌年、山口高校に招き教授嘱託とし、二年後、北條は第四高等学校校長に就任するや、明治三十一年西田を四高の教授に招いた。時に北條四十二歳、西田三十歳。北條は青年西田の人間的本質を洞察し、四高生、山口高教授、四高教授の時代のみならず、没するまで西田を叱責し激励した。死の病床にあつても「西田はどうしている」「労働問題をどうする」等々と見舞客に論議したことである。昭和四年逝去。

後記

北條の三女、絲は草鹿任一に嫁し畏友草鹿直太郎の母堂となつた。この縁で北條の存在を知り『廓堂片影』と『偉大なる教育者北條時敬先生』（上杉知行著）を読む機会を得た。

北條時敬 略年譜

安政五年（一八五八）金沢市に生まる

明治十八年（一八八五）東京大学理学部数学科を卒業し石川県専門学校教諭に任ず。（同校は後に第四高等中学校となる）

明治二一年。第四高等中学校教諭となるも大学院入学のため辞職し、第一高等中学校（後の一高）物理及び数学授業を嘱託せられる。

明治二十四年 第一高等中学校教諭に任ず。
明治二七年 山口高等中学校教授に任ず。

明治二九年 山口高等中学校教授に任ず。

明治三一年 第四高等学校校長に任ず。

明治三五年 広島高等師範学校長に任ず。

大正二年（五六歳）東北帝国大学総長に任ず。

大正六年 学習院長に任せられる。

大正九年 右を辞任、宮中顧問官、貴族院議員に勅選さる。

昭和四年（一九二九）一月肝臓癌のため入院、四月二七日逝去、享年七二歳。

こんばん 金春演芸場の思い出

戦時下的の寄席

閔谷裕彦

“銀座に寄席があった”というとびっくりなさる方がいらっしゃるかも知れない。

昭和一〇年代の半ば、銀座五丁目の松阪屋百貨店の前を数寄屋橋方面へ入って行くみゆき通（舗装が固まらないうちに歩いたのであろうか？犬の足跡が左側の路上に点々とついているので、我家ではワンワン通りと呼んでいた）二本目の通りの右側、今のみゆきビルの角あたりに、道からちよつと引っ込んだ白い建物があった。これが金春映画劇場で、初期の頃のディズニー漫画、パラマウント、パテー等外国のニュース映画に加え、朝日、東日・大毎等の国産ニュース映画を上映していたのだが、太平洋戦争突入と共に洋画が入らなくなり、国内ニュース映画も統合されて、映画館としては立ち行かなくなつたのである。いつの頃からか演芸場に衣替えした。気

楽な椅子席である。出演者も顔触れが揃っていたので結構流行った。

私は小学校の低学年であったが、父の御供で良く足を運んだ。残念ながら入場料がいくらであったか、はつきりとはおぼえていない。多分九〇銭から一円二〇銭ぐらいではなかつたろうか？

戦時中ということで種々厳しい規制があつたようだが子供にとってはあまり関係がなく、とにかく笑えるし、テレビの無い当時、ラジオでお馴染みの師匠連が目の前で熱演するのであるから正に感激である。

前座で柳亭痴樂りゅうてい痴樂というのがいた。やせてとんがつた顔で、もちろん未だ“綏方教室”などはやらなかつたが、妙に粘つこく根性のある感じであつた。そして斜視で弱視の三代目三遊亭歌笑さんゆうていかっしょう。彼は無類の読書家であつたそうで、まだ二つ目だったが印象に残つている。戦後“歌笑純情歌集”等で爆発的人気を博したが、昭和二十五年銀座の真ん中で米軍のジープにはねられ早世したのは惜しまれる。

中堅どころでは眼が大きく愛敬のある三遊亭小円馬さんゆうてい 小円馬

(のちの四代目円馬) の若旦那ものが新鮮で、かたや當時としては珍しい毒舌調の鈴々舎馬風は、"皆よく来たな"で始まりお客様が静かに聞いてくれていると思ったら、"眠るがごとく大往生"であつたという現代風の枕、この人もそれなりに面白かった。馬風などは今であつたらもつと人気がでたであろう。

真打ちの中で父親のお気にいりは三代目春風亭柳好^{しゆうふうていりゅうこう}、六代目春風亭柳橋^{しゆうふうていりゅうきょう}、そして縁起をかついで八代目を称したという六代目桂文樂^{かつぶんらく}。"がまの油"で有名な柳好は何とも言えない明るい高座で、私は彼の"野ざらし"が大好きだった。

"宮戸川(隅田川の上流)"で釣をしていた浪人が生き倒れた人の髑髏を見て氣の毒に思い酒をかけて供養したら、その夜、美女が礼に来た。話を聞いた粗忽者が真似をして美女を釣り上げようと好きでもない釣に出かけ、手当たり次第に髑髏に酒をかけて歩く。良く考えるところいよいよある。父の話だと、その夜美女ではなく、樊噲^{はんかい}が出て来るという。漢の武将樊噲が何でお江戸に出て来るのか、まあその辺が落語なのだが。残念なことに、

時間の関係か、あまりに雄大というか、荒唐無稽で車が差し止めたのか? 柳好はいつも中途でやめて、樊噲が出るまでやつてくれない。それでもおもしろかった。

柳橋の方は正反対のじっくりタイプで、「……でな」と結ぶのがくせ。この人の"青菜"、"時そば"、"支那そばや" (胡椒をかけ過ぎて大騒ぎする嘶) 等はすべてキッチリと手順がきまっているのだが、それでも何度聞いても面白かった。文樂がこの一人とは一寸別の風格があり、正直のところ子供には少し上品過ぎるような感じがした。

わかりやすいのは、金歯むき出し名前がピッタリとう感じの三代目三遊亭金馬の"居酒屋"。一寸抜けた声を出す小僧と客のやり取りで笑わせ、与太郎っぽい"孝行糖"も面白かった。若干さわがしいが、"水道のゴム"等の新作落語で奮闘した五代目古今亭今輔も印象に残っている。

芝居が好きな私は、一代目三遊亭内歌の"さんま芝居"を楽しみにしていたのだが、ついに高座では見られなかつた。似ているような嘶で"権助芝居"、(素人芝居に

飯炊の権助が狩出され腰元役になるが、かつらに煙草の吸いがらが飛び込んで大騒ぎになる）これは円歌ではなく柳橋のを見たようだ。

戦時下ではどちらかというと冷遇された落語に比べ、忠臣孝子の活躍する講談の方はまさにわが世の春で、老境に入っていた六代目一龍齋貞山は機会が無かつたが、弟子の貞丈、後に貞山を継いだ貞鏡、貫禄十分だが一寸鼻声の神田山陽、色浅黒く眼光鋭い神田ろ山、神田伯龍、浪曲から転じたという服部紳、ユーモラスな語り口の大島伯鶴等そうそうたる顔触れ。

私は特に貞丈の語り口が気に入り、「時なるかな元禄十五年極月十四日、会稽山に越王が恥辱を雪ぐ大石が、山と川との合言葉、末代目出度き忠義の亀鑑……」などといふ『義士銘々伝』のさわりを一生懸命おぼえたものであつた。漫歳では落語界出身のリーガル千太（元柳屋緑郎）、万吉（元柳屋悟郎）の独擅場。題は忘れたが、義士焼（今川焼の一種）を扱つたのが何とも言えず面白く、ずんぐりした千太と一寸洒脱な万吉のコンビが絶妙だった。あの漫歳をもう一度聞いてみたいなどとい

つも思い出している。

海老一の大神樂は丁度世代交替期であったのか芸が淋しく、むしろ北京出身という触れ込みの中国手品師の李彩（この人は氣の毒に昭和二十年三月十日の大空襲でなくなつたという。）や、演目は单调（三番叟と、醉払い骸骨の骨寄せ）だが結構子供には楽しめる結城孫二郎の繰り人形が記憶に残っている。

素晴らしいのは林家正楽の紙切りで、古き良き時代の江戸一子そのもの（実は出身地は信州飯田）というこの元咄家は休む間もなく紙とはさみを操つて、藤娘、勧進帳弁慶の引っ込みなどという古典的な作は当然のように作り上げ、時節柄「三国同盟！」なんて声が掛かつたら、ヒトラー、ムッソリーニに加えて東條さんらしき横顔を見事に切り上げたのには本当にびっくりした。

たまたま歌舞伎に興味をもつていたから声色が楽しみだったのだが、第一人者の古川緑波は出演せず、目玉がギョッとしている悠玄亭玉介と櫻川春菜の二枚ではいさか弱かった。

残念なのは三平の親父の七代目林家正蔵、柳家金語楼、

柳家権太樓、昔々亭桃太郎等、を見る機会がなかつたことである。

私がもう少し年が行つていれば（もっとも戦争に狩り出されて一巻の終わりになつてはいたかも知れないが）、父をあてにせずに神田須田町の立花亭、人形町の末広、四谷の喜よし、上野の鈴本等をあの時代に覗くことが出来たであろう。

今になつて考えて見れば、当時は時節柄芸人が悪ふざけ出来る雰囲気ではなく、その点演目に制限はあつたとしても皆眞面目に高座をつとめ、殺伐とした世の中に笑いをもたらし、観客に感動を与えていたと思う。

観客の方も親代々落語や講談（講釈）に馴れ親しんでいたから、基礎的知識は十二分にあつたわけで、いい加減なことをすればすぐ叩かれる。昨今のようなくねタやドタバタがたやすくまかり通る時代ではなかつた。

戦後一時子供の頃をしのんで上野鈴本に通つたが、林家三平流（正蔵ゆずり）の大汗かいての騒々しいしゃべり全盛の頃で、他方れろれろの志ん生あたりが江戸つ子の生き残りとしてもてはやされているし、何か馴染め

ないまま足が遠のいて仕舞つている。

現代の落語家達も、テレビ出演や、司会業も結構であるが、客にこびを売るような態度はいい加減にやめて、古典ものを今一度じっくり研究し、少し息を吹き返した講談界共々古き良き時代の寄席の楽しさを復活させてもらいたいと心秘かに願つてゐるのである。

新春雜想

小林正憲

一、君は仏さま

一昨年カミサンに先立たれ、昨年は喪中でした、だから今年は一人で過ごす初めての正月です。一昨年の正月は何変わることもなくカミサンがオセチなどを作ったのにとの思いがはしります。

死後の世界とか、あの世だとかは、全くのそらごとで、

人間死んだらゴミになる、というのが私の持論ですが、現実に接するとそのようには考えたくないのも人情です。夫唱婦隨で、二人とも死後の世界を信じなかつた。運命のなせる業で、おまえは早々と死んでしまつたが、どうだ僕らの考えていたことは正しかつただろう、と亡き妻の靈に問いかけた。という訳の分からぬ矛盾した逸話が生まれそうです。

本当に死後の世界があつて、そこにカミサンがいるのなら、私もどんなにか気が楽になるでしょう。私自身の一人暮らしも、不自由には違ひありませんが、都合がよいことも楽しいこともあります。

同様に死後の世界であつて、地獄であれ極楽であれ、それが存在するのであれば、離婚したのと同じで、私どは別の世界ではあるものの、当人の工夫次第で喜びがつく

れると考へるからです、少なくとも憐びんの情はなくなります。しかし、これは物語であつて在りうることではありません。

死んで火葬にされ、物質としては離散して、また何かを構成するとしても、それは当人とは別のものであるし、

ハードウェアなくしてソフトウェアが保存される筈もないのですが、ソフトが生前接した人に、断片的にしろ伝わつて記録されていることは確かでしよう。何かの機会に、「あの人生きていたら、きっとこう言うよ」などの会話があるのは、その現れだと思います。

その意味でカミサンのソフトは、三十数年つれそつた私に一番残つていると思います。但し、その結末は語る人が自分に都合よくアレンジしてしまつものらしいのです。

例えば生前のこととして、私が浮氣をしたとする。実際にカミサンがその場に遭遇したら、目をつりあげ、髪をさかだてたかも知れません。けれども今私は、カミサンなら、「よかっただね」と言ってくれるだろうと勝手にきめてしまします。

「少しくらい浮氣をしてもいいわよ」と言つたことはあっても、あえて見ないようにして、何事もトラブルを生じさせなかつたカミサンだったから言えることなのです。

世にいう「仏さま」や「神さま」も、もとはといえば人間の偉大な発明の一つで、もう一つの発明品である

「お金」よりも歴史が古いような気がします。そして個々

の仏さま神さまのキャラクターは人間の創造力と、正しく伝わっているかいないかの問題はあるにしても、遺さ

れた具体的な事実でしよう。

そう考えれば、死んだカミサンは私にとって、心が広く、都合が悪いことも容認してくれる慈悲ぶかい仏さま、ということになります。

仏さままでない人もいます、私が年少のときに家に来たオヤジの後妻です、随分と意地悪をされました。自分の願望を達成するためなら、周囲の迷惑はかまわない、いや、むしろ周囲が不幸になれば嬉しい、という性格の持ち主でした。だから、私のカミサンが死んだことを知つたら、「やっぱり早死にしたね、ウフフ」と喜ぶだろうと、私に伝わっているソフトが答えます。

彼女は数年前に哀れな最後を遂げましたが、私については仏さまになれない人です。永遠の惡魔としての存在なのです。

今、私はカミサンに「君は仏さま」と言つて、仏壇におさまってもらっています。そう言えるカミサンであつ

たことが、私の「妻への感謝状」なのです。

二、慈姑

カミサンが作るオセチのなかには、どういうわけか、必ず慈姑（クワイ）がありました。「今年はクワイが高かつたから、ボロよ」と言って、見掛けの悪いものが食卓にのぼった年もありましたが、結婚いらい一昨年まで、欠かすことなく続きました。

中国から渡来したクワイは寒いときに泥沼から芽を出すことから、「めでたい」にかけた縁起物として正月の料理に加えられていました。

ゼロからの出発で、社会的なターミエにとらわれていた我々夫婦だったので、私に世に出て欲しい、クワイのように芽を出して欲しい、というひそかな願望があったのかも知れません。そうだとすると残念ながら望みが叶わなかつたわけで、かわいそうな気がします。

カミサンは、宇田零雨先生が主宰される「くさぐき」という結社のお世話になって、長年にわたり俳句を趣味にしておりました。そちらのソフトは私に伝わらなかつたので、どの程度の勉強をしたのかは分かりませんが、

同人誌上でほめられたことなどはあったようです。カミサンはオセチのクワイを私にすすめながら、心のなかで芽のない男が喰らう慈姑かな

と詠んだのではないでしょうか。ソフトの伝わりかたは、この程度のものだと思います。

三、そして

今年は、昔の秘書がクワイを料理しにきてくれました。まるい大きなクワイの根から、太くて丈夫そうな芽が出ていました、そして詠みました。

私がたててあげますあなたの芽

こちらは狂句です、ただしこの芽は下半身の芽のようです。話が落ちてきました。

秘書は社会的な結びつき、妻とは生物本来の生活的な結びつき、というのがタテマエのようですが、現実に接するとそのように考えたくないのも人情です、「死後の世界は存在しない」ということと同じように。

い。

この番組の問題はこれだけではなかった。例えば日本からステッカーを持参してこれを車に貼りつけ、あたか

やらせ

藤岡 豊

「やらせ」というのは、決して心地よいひびきを持つ言葉ではない。その行為自体が不正、かつ不快なものである以上、これは当然のことかも知れない。

テレビのドキュメンタリー番組などで、ありもしない架空のできごとを、いかにも事実らしく演技させることをやらせと呼んでいる。まだ記憶に新しいが、NHKのスペシャル番組「奥ヒマラヤ禁断の王国ムスタン」が大きな問題となつた。スタッフが高山病に罹った演技をしたり、岩をゆすって流砂現象を故意に起こさせたりもした。また現地の少年を雇つて雨乞いの祈りをやらせている。これらすべて視聴者を欺くためのやらせに他ならない。

もはるばると現地踏査に乗りこんだかのような印象を与えた。実際には、スタッフは全員ヘリコプターで現地に到着しているのである。

それ以前にも、テレビ朝日のアフタヌーンショーや、少女たちのバーベキュー・パー・ティとセックス・リンクを、生々しい映像で報道したことがある。実はテレビ局が暴走族のリーダーに金を払って、二人の少女にセックリンクを実演させたものであり、これが判つて大騒ぎとなつた。また中国残留孤児が書いたという手紙が、本当は九州朝日放送の職員がねつ造したものであることがばれ、物議をかもしたことがある。

これらは「やらせ」が露顕したほんの一部のものに過ぎず、実際には視聴者が騙されている報道が幾つもあるといわれる。早い話が街頭インタビューでも、街を歩いている不特定の人を掴まえて意見を聴いているのだと我々は思っているが、中には回答をあらかじめ用意して特定のひとに渡しておき、それをしゃべらせるといった馴れ合いのインタビューもあるそうだ。こうなると選挙の当選予想など、素直には信じられないくなるてくる。

事実でないものを報道し、そのウソを信じさせるというのは、詐欺と言わても仕方がない。たしかに報道の自由は憲法で保障されている。しかし報道をねつ造する自由はない筈である。マスメディアの倫理は、もつと厳しく問われて然るべきではなかろうか。

ではこの「やらせ」に走らせる背景は一体何なのか。言うまでもなく、かの視聴率至上主義に他ならない。毎週のように発表される視聴率なる数値は、どのテレビ局にとつても頭の痛いものらしい。これはスポンサーでなり立っている民放に限られたことではなく、公共放送のNHKも同様といわれる。視聴率を上げるために、刺激的なタイトルをつけ、迫力のある映像を見せねばならない。これがため放送マンは、モラルを棄てて詐欺に走るのである。

しかし見る側にも、つけこまれる隙があるのでないか。すなわち人間の意識のウラ側にある部分、例えば刺激性を求める心理、不道徳なものに見える共感、他人の不幸をひそかに喜ぶ冷たさ、のぞき趣味、こういったものが放送マンをかり立てるとも言えるのではないか。

オウムの残酷な仕業に見入る視聴者的心の底には、このような隠された意識があるのかも知れない。

ところで「泣き屋」と呼ばれる商売がある。人前で大げさに泣くことにより金を稼ぐもので、葬儀などに雇われて参列し、まるで故人の死を悼み悲しんでいるかのように声をあげて泣くのである。これにつられて会葬者も泣くという、葬儀の悲しい雰囲気をかもし出させるのが仕事である。かつて北朝鮮の金国家主席が逝去した折、国葬の場面がテレビで報道されたが、最前列で十数人の女性が大声をあげ、身をよじって泣く姿が映し出された。国家主席の死に対する国民の悲しみの気持ちに、いたく感動したものだが、これが泣き屋の演技だと聞かされて、白げてしまつたのを覚えている。

また売店に群がるサクラも、株主総会で「異議なし」、「議事進行！」と叫ぶ人たちも、同じくこれで金銭を稼いでいるのだろうが、テレビのやらせと較べれば、その罪はまだ軽いと言えよう。しかし国会で与党議員によるやらせ質問は、全く人を馬鹿にしている。いやしくも国権の最高機関たる国会がこれでよいのだろうか。国民の

納得がいかないまま、その血税をしたい放題に使う身勝手さも、この「やらせ」が道具立てとなっている。

「やらせ」の一種にスポーツの八百長がある。プロレスはショーダと思えば腹も立たないが、賭け屋に買収されたピッチャーやノックアウトされるのは、善良なファンに対する裏切りに他ならない。大相撲でも演技が下手でそれと判る負け方は、怒りと軽蔑を買はばかりである。千秋楽の優勝決定戦はめったに見られるものなく、観客もテレビの視聴者も熱戦を期待して見守っている。兄弟対決であればなおさらのことである。それが八百長であっては、誰も納得しないのは当然だろう。これでもプロといえるのか、入场料を返せ、受信料を返せと言いたくなる。とはいへ、ことさら罪悪感にさいなまれているのは本人たちであろう。負けてやつた力士も、そして負けてもらった力士も、人を騙した後ろめたさはいつまでも拭いきることができないだろう。

ドイツの戦後五十年序説（その1）

＝戦争責任と戦後処理について＝

鳴澤 宏英

ダヤ人に対する「最終処理」の名の下にその絶滅を図った。また肉体や精神に障害のあるドイツ人も、同様の考え方から、ナチスの手によって殺害された（その数は十万人にのぼる）。

実存哲学で有名なカール・ヤスバース（Karl Jasper）は、「ナチ国家は犯罪者国家であり、犯罪を行なう」ともある国家ではない」と断じている。彼は夫人がユダヤ系であったため、ナチスに睨まれ、離婚を勧告されるがこれを拒否し、ハイデルベルグ大学教授の椅子を失う。そうした個人的事情を抜きにして、この言葉の意味を噛みしめてみると、それが正鵠を得てることがわかる。

ナチス・ドイツ（第三帝国）は、ヒトラーの政権掌握（一九三三年）から、ベルリン陥落、ヒトラーの自決、そして無条件降伏（一九四五年）まで続いた。この狂気の十二年間に、ナチスは優生学的な人種観（ドイツ人こそ最優秀なアーリア人種の中核であり、血の純潔はまもらねばならぬとの狂信的な思想）の上に立って、他民族の大量殺りくを意図的かつ計画的に行つた。わけてもユ

ダヤ人に対する「最終処理」の名の下にその絶滅を図った。また肉体や精神に障害のあるドイツ人も、同様の考え方から、ナチスの手によって殺害された（その数は十万人にのぼる）。

こうしたナチスの犯罪を論じるとき、どうしても触れなければならないのは、例のアウシュヴィッツ（ボーランド語ではオシフィエンチム）の悪名高い強制収容所である。日本の京都にあたる古都、クラクフの町から車で一時間ほどのところにある収容所あとを訪れたものは誰しも思わず息を呑み、顔をそむけたくなるものを目のあたりにする。

まず入口の門の上に掲げられた「労働は（人を）自由にする」（“Arbeit macht frei”）との鉄製の看板が目に入る。所内のすさまじさとは全くちがつた空々しい言葉であり、それは悪魔の声のごとき響きをもつていて。中に入ると夥しい犠牲者の遺品の数々とともに、人の毛髪で織った布、人体の脂肪から作った石鹼など身震いするような品々が、無造作に陳列されている。またガス室は、天井にノズルがいくつかある殺風景な石造りの部屋

で、何の変哲もない。しかし、シャワー・ルームだと騙されてここに入り、二度と出ることのなかつた多数の犠牲者に思いを致すと、暗然たる気持ちにならざるを得ない。庭の一角に盛り土で作った高台があり、その上に絞首台が残され、記念碑となっている。戦後ユダヤ人たちが草の根を分けてドイツ人収容所長を探し出し、ここで処刑したと記されている。

このようにナチスの行つた残虐行為は、通常の戦争犯罪と比較すべくもない非人道的かつ計画的な犯行である。さればこそニュールンベルグの軍事法廷では、人道に対する罪として、ナチスの指導者たちはきびしく処断された。ちなみに極東軍事法廷（東京裁判）では、平和に対する罪はドイツ人の場合と同様問われたが、人道に対する罪は結局不問に付されている。このちがいは重要な意味をもつことを知らねばならない。

以上ナチス国家の本質的部分にいさか立ち入ったが、これはわが国の戦時体制（たしかにある時期以後、軍部独裁の色彩が濃くなつたのは事実だが）とは明らかに質を異にする、という客観的事実を明確にしておくことが、両国の戦後処理のちがいを正しく理解するのに不可欠との判断に基くものである。

より重要なことだが、ナチス・ドイツはドイツ民族の歴史の中で、全く前例のない突然変異的なものとして、歴史の流れから完全に切り離されている。換言すれば、第三帝国の時代は、それに先立つワイマール共和国の時代とも、また言うまでもなく戦後のドイツ（西独）とも連続性をもたない特異な一時期と位置づけられている。いわゆる非連続性の論理である。この認識は客観的にも正しいものとされている。注目すべきは、戦後のドイツがこの論理を重視し、戦後処理の基本原則とした事実である。

ワイツゼッカー前大統領は、ドイツ人の良心を代表する人物として、国内外で高い評価を得ている。戦後四十周年（一九八五年）の記念演説の中で彼の述べた言葉、「過去に目を閉ざす者は現在に対しても盲目となる」は、彼の良心の率直な表明として、幅広い支持を受け、賞賛を博した。とりわけわが国では、戦後処理（とくに個人に対する補償問題）をめぐる政府の曖昧な姿勢を批判す

る際、きまつて引き合いに出される。外国の例を引用して批判や攻撃の論拠にするのは常套（とう）的な手段のひとつだが、この場合は、相手が戦時中同盟国として行動を共にしたドイツである上に、人道問題にかかわるだけに、ワイツェッカーの言葉には、特別の迫力と説得力がある。少なくとも論者はそう考えている。

だが外国の事例を無批判に持ち出すことは、往々にして危険を招く。ドイツの場合についても、このことは当てはまる。なぜなら前述した非連続性の論理によれば、戦後のドイツは、ナチス時代とは別の体制（国家）とされ、ナチスの行った犯罪に対する責任を自動的に継承するものではないとするのが公式見解となっているからだ。そこにあるのはどこまでも道義的ないし政治的な責任にとどまる。その認識の上に立って、前大統領はナチス時代への反省の意を表したのである。

これに対してわが国の場合には、一億総懺悔という言葉に代表されるごとく、戦前、戦後の日本は連続し、一貫しているとの考え方が定着している。そこから戦時中の侵略行為なり戦争犯罪については、連続性のゆえに日本

国自身に法的な責任があるとの論理が生まれる。わが国は進んでこの論理を受け入れたと言い得るのである。もつとも一億総懺悔の思想の背後に、天皇に戦争責任が及ぶのを阻止するため、国民全体の責任に置き換える意図があつたことは公知の事実である。

このような日独間の立場なり認識の相違は、当然のことながら、戦争責任のとり方、戦後処理の方式についてのちがいに直結する。ここではふたつの論点を挙げておこう。

その第一は、ナチスの犯罪に対するドイツ自身による徹底した責任追及である。ナチス・ドイツの敗戦は、連合国の勝利であるとともに、ドイツ国民にとっては、ナチスの桎梏からの解放を意味した。戦争犯罪はむろん連合国もきびしく追及したが、ドイツ自身も、非ナチス化（Entnazifizierung）に積極的に協力した。ナチスの犯罪に関する限り、時効は適用しないとの特例法まで制定したのも、こうした政策意図の反映にほかならない。

第二は、前に触れた道義的、政治的責任の論理に関連するが、ドイツの戦後補償は、すべてナチスの犠牲者な

いし被害者に対する個人補償である。ただイスラエルとは、例外的に国家間協定が締結された。その理由はとくに説明する必要はあるまい。個人補償の総額は、将来の支払い分を含めれば約七兆円に達する。これはわが国の賠償支払総額の十倍に当たる金額だ。この数字をみると、たしかにドイツの補償が手厚いことは明らかである。しかしナチスの行った犯罪（とくに大量殺戮）の重大さ、非人道性を考慮し、さらに陸続きの近隣諸国との修好が絶対の要請であったドイツの地理的、経済的条件にかんがみれば、巨額の補償も必要不可欠な代償ないしコストであったと言える。その意味で、両国の補償なし賠償額を単純に比較対照するのは、必ずしも適当でないのである。

最後に、きわめて重要な論点として、西欧諸国の日独両国を見る目について触れておかねばならない。まずナチス・ドイツが犯罪者国家であったとの見方は、西欧各国にほぼ共通している。見のがしてならないのは、前述した非連続性の論理も、明示ないし默示の差こそあれ、各国が認めていることだ。すなわちドイツはもともと西欧諸国と、人種、文化、宗教したがって価値観を共有する仲間であり、たまたまヒトラーという悪魔の登場によって、ナチス・ドイツという極端な偏向国家が出現したに過ぎない、と彼らは考えている。

ところがわが国については、戦前、戦後を通して、人種、宗教、文化を異にする異質の国との基本認識がある。そこからやもすれば戦時中の日本軍の残虐行為は、日本人の本質に根ざしたものとの固定観念が生まれる。この事実を思い知らされたのは、一九七二年秋の昭和天皇の訪欧時である。当時はロンドンに在勤していたが、反日感情は、国民の深層心理の中では、なお根強いものがあった。パブ（大衆酒場）の入り口のマットの上に日章旗をひろげ、わざと来店客に土足で踏ませるとか、王

立植物園（キュー・ガーデン）の記念植樹に、夜陰に乗じて硫酸が注がれ、無残な姿になるという事件も起った。それよりも何よりも重大事と痛感したのは、タイムズ紙（いやしくも英國の代表的なクオリティ・ペーパーである）が載せた次のとき内容の社説である。

ヒトラー、ムッソリーニと並ぶ戦犯である日本の天皇が、ひとり生き残って来英する。女王の賓客だからわれわれは歓迎する。しかし同じ敗戦国でも、ドイツと日本は全くちがうことをこの際想起すべきである。ナチス・ドイツは、一時的な「異常」状態であった。（同紙はここで、『aberration』という言葉を使っていい。この語には正常ならざる病理現象というニュアンスがある）。それにひきかえ、日本人の非人間性、残虐性は本来的なものである。それに根ざした日本の戦争犯罪を、「われわれは許しはするが忘れはしない」とこの社説は結んでいる。こうした考え方は今なお生きており、またそれは英國に限られたものではないことを知るべきである。

らしい。

明治以後、「湯葉」の名前で売られてきた。京都では

京ゆば雑記

藤井長治

ゆばはうばか？ うばはゆばか？ これは些か禅問答めくが、ゆばとは湯葉のことであり、湯波、湯婆とも書く。うばは豆腐の「上皮」^うと「姥」^{うば}からきている。

山東京伝の「骨董集」（文化二二年＝一八一五年＝刊）

によれば、俗説に豆腐皮をユバといふは訛方なり。本名はウバなり。その色黄色にて皺あるが、姥の面皮に似たるゆゑの名なりといへるは、みだりことなり。豆腐上物とあるこそ本名なるべけれ。豆腐をつくるに、上にうかむ皮なればさはいへるならん。略てトウフノウハといひ、音便にハモジを濁りて、うばといへるより俗説なるべし。ゆばといふも、うとゆと横にかよへば、はなはだしき訛にもあらず。”とあり、江戸中期にはうばと呼んでいた

「御湯葉」といわれ、昭和になって「京湯葉」の名でひろがったが、最近は「京ゆば」が一般化している。

話はちょっと逸れるが、京料理とはいつたまにか？

京都のいろいろな人にきいてみても、はっきり言える人は余りいない。京都の長い歴史のなかで育まれてきたものは、何千何百とあり、夫々が時代とともに生き、時代とともに廃れてしまい、ついこの間まで食膳を賑わせていたものが、いつの間にか姿を消している。このめまぐるしく変わる現代は、京都の食生活をどんどんかえていくようで、いま京料理とは何かと、定義するのはむつかしいようだ。

その京都にあって、一千年も前から現在まで続いている食物の一つがゆばである。ゆばは、鎌倉時代に禅僧が中国から持ちかえたとも、平安時代、仏教の伝来とともに持ちこまれたとも、あるいは、もっと古く奈良時代に入ってきたとも言われているが、このように長いゆばの歴史は、仏閣の食事—精進料理—からはじましたが、京都が清淨な水に恵まれ、ゆば製造に最適の場所であったことも幸いした。

あとで述べるが、ゆばは栄養価が高く、長期に保存がきくため、寺僧の食膳には欠かすことのできない副食であった。げんざい、東寺湯葉、大徳寺湯葉、建仁寺湯葉などの品名で売られているのは、往昔、寺院で作られたいた証左である。精進料理の主役をなったゆばは、その後、朝廷や公家の膳所にはいりこみ、所謂有職料理になくてはならない一菜として、汁物煮物などに使われた。その後、ゆばは茶懐石にとりいれられ、さらに会席料理の隆盛につれ、その利用は一段と伸張した。

このゆばはいかに作られるのか？

ひと晩水につけた大豆を、粉碎機でこまかくつぶして豆汁にし、それを鍋で煮、しづると豆乳とおからができる。この豆乳（ゆば汁）を、木の仕切り棒のはいった畳一、二畳ぐらいの平鍋にうつし、再び加熱すると、十五〜二十分で表面にうすい膜（蛋白質）ができる。

この膜を竹の棒でくいあげたものが生ゆばであり、このすくいあげを七〜一〇回ほどくりかえす。生ゆばは最初のものが極上、あとになるほど少しづつ質はおちる。生ゆばを乾燥させたものが、乾ゆばである。

ゆばは、このように文章にすれば、簡単にできるよう
に見えるが、実際はそんな生やさしいものではない。つ
ねに加熱されている作業場は、夏は四十度をこす暑さ、
冬でも半袖シャツで通せる暖かさのなかで、早朝六時ご
ろから午後の二時三時まで、ゆばのあげ作業がつづく。

そのあと、ゆばを巻いたり、重ねたり、切ったり、結ん
だりして、袋つめにし出荷の準備を終えると、夜は更け
ている。一人前の職人になるには、十年はかかるという。
明治の湯葉屋を舞台にした芝木好子原作、田井洋子脚
本のテレビドラマ「ゆば」の、シナリオにこんな場面が
ある。

みよ（奉公人） 眠れないの？ 淋しくはないの？

蕗（花嫁） いいえ…ここは賑やかですもの。職

人さんも大勢、みんな忙しそうに生き生きと働いて…見えていても気持ち
がよくって……

その代わり、ごはん食べるヒマもな
いくらいよ。

ます（年配女中） いつまでべチャベチャやってんだよ。

朝は四時起きなんだから いいかげ
にしとくれよ！

ゆば屋「美濃屋」の女中部屋

こうした状況は、現在もそんなに大きく変わっておらず、それはもっぱら家族従業者にしわよせされている。

このゆばは、栄養価がはなはだ高い。左表のよう、

蛋白質や脂質は、牛肉よりはるかに大きい。	ゆば	牛肉
一〇〇瓦中のカロリー	四七〇	一四三
蛋 白 質	五八%	二〇%
脂 質	二四%	六%
炭 水 化 物	一二%	一%

往時の寺院では、ゆばに栄養の多いことが、直感的に分かっていたのではなかろうか。色合いがよく、美味で栄養価の高いことが、その存在をながらしめている所以だが、ゆばの醍醐味は、なんといっても生ゆばにある。最初のすくいあげの、柔らかな生ゆばを、しようが醤油かわさび醤油でたべる。

これは、正に「ゆばの刺身」というべきもので、絶品である。前出のテレビドラマ「ゆば」で、湯葉屋に嫁いだ花嫁が、はじめて生ゆばをたべさせられるシーンがある。

吉衛（湯葉屋主人）どうだ？

蕗（花嫁）（目を輝かせて）おいしい…おいしい味です…

吉衛 どう おいしいのだ？

蕗 少し甘くて…こくがあつて…なんだかお乳のよう…口では言えない。なつかしい味がいたします。

このように生ゆばは淡白で、まろやかな、それこそ口で言えない床しい味、京都弁の「まつたり」した風味がある。

生ゆばは、小売りのほか業務用として、料亭、旅館、

仕出屋に卸され、吸物、鍋物、揚物、炊き合わせなどに使われる。製造元では、銀杏や百合根、木耳などを生ゆばでつみ、油で揚げた乙なものも売られている。

乾ゆばは、舌さわりがよく、上品でまろやかな味だが、

なかには味がうすいといった声もある。乾ゆばは、その仕上りの形により、太巻ゆば、小巻ゆば、かせゆば、とゆば、渦巻ゆば、結びゆば、平ゆば、大原木ゆばなどの名のもとに、全国のデパートやスーパーなどで売られている。京都では、みやげもの店、八百屋、乾物屋などでひらく売っている。

ゆばは、京都のほか日光、東京、箱根、神戸、奈良、広島などで生産されているが、京都が全国生産の八割がたを占めるという。

読書子よ！ 京都に足をはこんだら、生ゆばの味をぜひ一度はためされよ。すぐたべられる所は左の禅寺である。（予約必要）

京都市西京区上桂東ノ口町四十五

巢林庵 電話 ○七五—三八一一七三八四

註・本稿は、筆者の戦友で、ゆば会社社長のMさんによる聞き書きと、同氏提供の資料をもとに脱稿した。

発想の原点

佐 份 利 治

研究テーマとしておられた。（当時増幅作用を持つ素子としては、真空管しか無かつた。）

一九四八年の夏のある日、一冊の学会誌を手にして教壇に立たれた教授は大変な興奮で話しあじめられた。

約五十年前、私が学生であった頃、大学の電気工学科の「電気材料」の講義は、電線の被覆材料や銅線、変圧器のオイル等、強電機器や配電に用いられる材料を対象にしていた。

その内容は、電気工学ポケット・ブックを見ればすべて判るような陳腐なものであった。

ある

当時五十五歳の阿部教授は満面を紅潮させて、トランジスタの原理を講義された。学生たちも何か興奮に引き込まれた。

しかし、私が二回生になつたとき「電気材料」を担当された阿部清教授（後に京都大学名誉教授）の講義の内容は全く従来のものと異なっていた。

それは量子力学や物性論から始まり、半導体や強誘電体セラミックス等、当時最新の材料を網羅して、現在でいう「電子材料」に相当するものであった。

阿部教授は当時整流器として用いられていたセレンを使い、固体で増幅作用を持つ素子を作ることを「自分の

阿部教授は指示された。

「ゲルマニウムでトランジスタが出来たからには、周期律表で同じ族にあるシリコンでもトランジスタが出来

一苦である。ゲルマニウムと違つて、シリコンは地球上に無尽蔵にある。君はシリコンでトランジスタを作る研究をやりなさい」

四月の新学期をまたず、阿部研究室に入った私は、シリコンの精製を始め、トランジスタ特性を測定する装置を作った。

一年間の卒業研究では、充分なシリコンの精製ができず（やっと九九・九九%）、ダイオードは出来たが、遂にトランジスタは実現できなかつた。

しかし、この研究のおかげで、私は半導体の諸特性やそれらの測定方法について充分勉強ができた。また、当

時シリコンでトランジスタを作ろうと試みた世界中の数少ないエンジニアの一人になり得たと密かに思つている。今や、トランジスタやその延長線にあるICが殆どシリコンで作られているのは、ご案内の通りである。

一九五〇年、大学を卒業してセラミック・コンデンサのメーカーに入つた私は、引き続き阿部教授のご指導を受けながら、酸化チタン・コンデンサやチタン酸バリウム磁器の研究・開発・製造に取り組むことになつた。

一九五八年のある日、突然阿部教授の電話で社長と私が教授室へ呼び出された。

ベル研究所の月報にあった半ページ程の報告を指示しながら、阿部教授は言われた。

「チタン酸バリウムにある種の添加物を加えると正の抵抗温度特性を持った半導体が出来るという報告が出ている。原理的に温度特性は負であるべき半導体が正の特性を持つのは異常なことである。しかも、この材料は君たちが手掛けているチタン酸バリウム磁器である。佐福利君は学位論文のテーマとしてこの材料を徹底的に研究しなさい」

かつて学んだ半導体特性やその測定法と、当時毎日扱っていたチタン酸バリウム磁器とを組み合わせることにより、私の研究は飛ぶように進んだ。

約一年間で、チタン酸バリウム系の各種磁器や種々の添加物について半導体諸特性の実験を終わり、三つのペーパーで「チタン酸バリウム系半導体の総合的研究」を世界で初めて報告した。

ここで改めて振り返りたいのは、阿部教授の発想の原

点である。

第一には「ゲルマニウムで出来たトランジスタは同じ族のシリコンでも出来る筈」。第二には「理論的に抵抗の温度特性が負であるべき半導体が正の特性を持つのは注目すべきである」という発想である。

最近、「創造性が重要」「日本の教育は創造性を伸ばすのに適していない」とよく言われる。事実は正にその通りである。柔軟な思考力と、何が必要かを見通す洞察力は、創造性の根本になる。しかし、いくら「やわらか頭」を養成しても、物事の原理原則を心得ていないと、何もあたらしいものは出て来ない。

周期律の原則を知っていてこそシリコンへの類推が出てくる。半導体の基本特性を心得ていればこそ異常なものに疑問が湧く。

日本人の創造性が問題になる度に、私の頭には、恩師の発想の原点が甦るのである。

いつの間にか、数え年で八十歳になった。

よくも生きたものである。生命保険の外交員に敬遠される族となってしまった。そして漸く人生がわかり始めたような気がする。

漱石の「草枕」中学時代から幾度か読んだ名作である。文章が難しくて、その筋も中々解りにくい。だがこの齢になって、あらためて読み直すとどうやらその味が解ってきたような気がする。

その書き出し『山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ、情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角この世は住みにくく』

八十年を振り返ればこのようなことの繰り返しであつた。

人生はこの世に生を受けてから正に一本路である。引

八十歳年寄りの戯言

野村嘉彦

き返すことは出来ない。おぎやあーは出発点、終点は墓場である。人間は誰でも通らなければならない路である。

別の路は絶対にない。しかも終点は誰にでも必ず来る。明日かもしれない。或いは五年、十年或いはそれ以上かも知れないが、何人も必ず到着することは間違いない。ある意味でそれは絶対的真理である。

終点への到着時は必然ではあるが何人も予知出来ない。

小学生と同時代の友の多くは大戦でこの世を終点までの途中で消えて行つた。それは一種の人生の必然的道中の途中小での偶然に出くわしたものといえよう。

かくて人間はこのような偶然と必然の不可思議な組み合せによって終点を迎える。とにかく老人が死ぬことは真理である。

人間の思考力の不思議 動物は現在のみに生きている。

単純な生き方である。従つて余り大きな苦しみは無いのではないかろうか。唯、本能的に死を恐れており、危害を加えようとすれば手向かう。

人間のみが有限の肉体でありながら無限の思考力、即ち過去を回顧し将来を予見する能力を持つてゐる。その

事が人間に苦しみとか楽しみとか悩みといった不思議な現象を与えてゐる。

死の恐怖 必ず来る終点、死への恐怖、死後の世界を考えると、果てしない悩みに取りつかれる。とにかく死は自分だけのものである。そして人間のすべてが持つてゐる宿命、しかもお互に交代できない宿命である。そこに人々は何かに救いを求めて、所謂宗教が生まれたのではないだろうか。

マインド・コントロール 「イワシの頭も信心」という言葉がある。信ずるものは強い。何かに縋りたい弱い人間。それに救いの手をさしのべたのが宗教だと思う。それを信ずるものはそれで良い。で多くの老人が信仰で救われているのも事実である。

宗教集団はややもすれば自己顯示のために壮麗な建物を建築して信者の信仰心をかき立てて、更に巨大な集団になろうとしその為に無理やりに信者を増やそうとする事は矢張り邪道と言えよう。そのため信者にお布施を強要する。信者は時としてその調達に苦慮する。かくて計り知れない波紋を周囲に起こすことになる。ましてや

それが一市民に危害を加えるに至っては、最早人を救うべき宗教とは言えない。今マスコミのドル箱となつてゐる集団は、正にその典型といつても過言ではなさそうである。

人間は元来迷える生き物である。それが迷わなくなつた時には既に人間の迷える特典を放棄したとも言えよう。迷える気持ちが無くなり、世に言う「悟り」の境地に到達した者はある意味で人間を放棄したものとも言えよう。こんな人ばかりが存在したら世の中は全然面白くなくなり、みんな死にたくなるのでは無いかとも考えたい。

ちょっと異常な考え方かも知れない。中学時代に先生との雑談の中で、先生が古今東西の聖人たち、キリスト、釈迦などのお話をした際に小生が突然「その人達は矢張りアブノマルなのではないか」と発言して座が白けたことを覚えている。

論議の自由とマインド・コントロール 大戦の前、当

時の学生はこの儘では世界、特に日本は戦争状態になる危険性が極めて高い。それを防ぐには我々日本両国の学生が立ち上がるべきだと考えて、先輩達の指導の下にア

メリカに呼びかけて日米学生会議を開催し、それは小規模ながら一九三三年から行われていた。

軍国主義に走る日本では各種の弾圧、妨害の下、次第に大規模となり、一九四〇年、大戦勃発の直前には東京の津田塾大学のキャンパスに五十名の米国学生を招致して共同生活を営みながら率直な意見の交換を行つた。その中では日本の大陸進攻などに激しい攻撃をうけた。一方日本側は欧米列強のそれまでの飽く無いアジア侵略と植民政策に鋭い批判を試みた。

その中で我々日本人学生が羨ましく思つたのは、米国学生の発言の中で自由言論と世論を重視する立場が明瞭に示されたことである。だがしかし日本側は世論は誰が作るのかとの奇想天外の質問をしたのに對して、彼らは率直に「矢張り時の政府が作り出す。何故なら我々学生は今まで学校で我が米国が過去、一度も悪いことをしたことが無いと教わってきた」と率直な返答を出した。矢張り彼等も別の形の言論統制の下に生きていたのである。

人はすべての環境の中で「マインド・コントロール」

を受けていた。それは差し当たり新聞とTV報道である。我々はそれを通じて世界の動きのごく一部を知り、それを根拠に勝手な批判や意見を語り合う。だがそれを自由に行なえるのが民主主義である。他の政治体制下では許されない。だから、現在最も無難なのはこの方式と言えよう。

だがここにも落とし穴がある。それは言うまでもなく報道自体がマインド・コントロールされており、従つてそれを根拠とした議論は極言すれば「砂上の楼閣」とも言えるのである。結論的には人間社会は迷える羊の集団とも言えよう。

「亀の甲より年の功」といわれるが多少とも長く人生を経験した老人がまず襟を正して、自我を抑えて今日まで生き永らえた事を感謝すべきであろう。そうすることにより平素の不満や焦りなども忘れる事ができると思う。かくて残された後僅かな人生を豊かに楽しみたい。このように自らを楽しめば他人に迷惑を掛けることも少なくなると思う。

日本では敗戦前最も迫害され制圧されていたのは正しく言論界であった。それが日本を惨めな戦争へと駆り立てたといつても過言ではない。アメリカが無謀なベトナム戦争に突入したのもマスコミ。そして撤退を余儀なくさせたのもマスコミの力である。ここで我々は自由とは如何なるものか考える必要に迫られる。

真の自由とは他人の自由を尊重することである、と小生は言い切りたい。無制限に自由を主張するかぎり、必ず他人の権利を傷つける結果、マスコミの場合はともすれば、読者の不信を買い結果的に自殺行為となり兼ねない。自由勝手な言動は必ず他人の権利を侵害し迷惑を掛けれる結果となる。こんな簡単なことが現在の社会でともすれば忘れられがちなのは残念である。

このことがやがてこの世をより明るくすることに寄与出来ればと期待したい。

中国の自動車工業について

上澤準一

一 はじめに

この五～六年、中国は毎年G.N.P九～一二%の経済成長を続けている。人口十二億の国がこれだけの成長をとげて、中心軸に、産業、とくに鉄鋼、自動車電気機械、化学品など重化学工業の伸びがある。毛沢東時代一時停滞していた農業も何とか回復の軌道にのせてきた。

中国というと、朝晩路上にあふれる、自転車のラッシュ

風景を思い浮かべる人は少なくない。だが同時にその中国にモータリゼーションの波が押し寄せたらどうなるかを想像された人も多いはずである。

然るがゆえに、世界中が「自動車市場」としての中国に注目したのも、無理はない。

だが「社会主義的市場経済」を標榜する中国政府の自動車産業への「思い入れ」に対し、各国の対応はまちま

ちである。中国側の要望を機敏にフォローしたドイツ、フランスの欧州勢がまず、乗用車の合弁産業に踏切り、ついでアメリカ勢が進出する。

これに対し、技術移転した中国車の日本進出、つまりブーム現象を警戒した日本大手メーカーはそろって出遅れた。

わずかに、ダイハツが小型車で北京、天津地区における合弁生産を始めたほか、最近になって日産が南京地区でエンジン工場を、またホンダが四川省で組立工場を計画しており、トヨタが各地の技術研修所の立ち上げ支援に動きだした。姿勢としては慎重そのものである。

二 中国自動車産業の特質と課題

① 巨大な国内市場の存在

故障率がどうであれ、量産して一定価格で売り出せばとにかく売れる——輸出しなくとも売れ残る心配はまずない。(もちろん部品供給とアフター・サービス体制を整備する必要はある)。

② 過去三十年間に蓄積した独自の経験と技術

技術レベルはともかく、生産面、開発面でも、この三十年の歴史の中で培った「経験と能力」は既に持っているのである。

ただ最新の開発ノウハウ、生産技術／生産管理技術を海外から導入して、自ら持っている基礎力になれば、効果的な急速展開が可能となる——というだけである。この点は他のアジア諸国とは基本的に異なる特質である。

(3) 但し、過去三十年の積上げは、中心がトラックに偏る。トラック中心の生産体制を如何にして「乗用車」を中心とした「量産体制」に移行せしめるか。④また、そのためには専門能力を發揮できる、優秀な部品工場をどのように育成するか。

(5) さらには地理的環境が隔たると、とかく連携が乱れがちな、国家権力と地方権力、地方と地方、企業と企業、部門と部門、それらの利害をどう調整するかにかかっている。当然海外諸国との協調も大切となる。

(6) しかもこれら難問を、急速に拡大する国内需要に

見合った形で、短期間に、効率的に解決してゆかなければならぬ。

(7) 部品工業についていえば、老朽設備を酷使しながら生産を続いている。これら手工業的・零細規模の部品メーカーの今の姿を放置していくには、(5)(6)の難問を解決することは殆ど不可能である。

(8) 部品工業こそ、中国側も外国側も、これまでの組立中心の視点を変えて新たに取組む必要が出てきている。

以上の状況を踏まえ、一度中国の自動車工業を見せて貰いたいと考えていた。たまたま、当O.B.ベンクラブ会員の竹内京一氏の御推薦もあり、九五年十一月、天津にある「中国自動車技術中心」の王秉剛センター長の肝入りで、竹内氏等と渡航する機会を得た。

機械工業省直属の国家機関である同センターをくまなく見せて貰ったほか、天津地区の乗用車組立工場、エンジン工場、スター工場、下請け部品工場などを見せて頂く。

その上で、改めて中国自動車産業とくに部品工業の課

題について噛み直してみた。

I、工作機械を中心とする設備の老朽化と数量不足

中国自動車業界が保有する工作機械は、約四〇〇万台といわれる。その内比較的新しい、八〇年代以降製作のもので、一〇〇万台程度しかない。機種的にみても、普通旋盤が四〇%、中ぐり盤、ボール盤、研削盤などが二〇%も占める。つまり粗加工機械が中心で、精密加工機械はごく少ないという状況にある。

N C（数値制御）工作機械やマンシング・センタ、機械工作用ロボットなどの数も限られており、しかもこれらは大手国営企業に集中している姿が問題である。

「自動車部品」は「回転部分」はもちろん、曲面、水平面を含め高い精密度を要する。五〇～六〇年代の中国製機械と六〇～七〇年代に輸入された「中古」機械では、精度の高い、九〇年代の「自動車部品」を大量に、かつ均一品質で連続生産することは出来ない。

特に、自動車産業の裾野を支える縁の下の力持ち、中小部品メーカーが「ガタの来た」老朽機械を抱えて、エッチャラ、オッチャラ仕事をしているというのでは話にならぬ

い。問題点の第一として指摘しておきたい。

中小部品メーカーについて、もう一つの課題は「地域固定型」「アセンブラー専属型」であるということである。地域を超えて、ピストンならピストンを複数アセンブラーに供給する「専属メーカー」が育ち難いということである。

日本でも一頃「系列化」ということで、アセンブラー専属型下請けメーカーが固定した時期がある。独立型専属メーカーは出にくかったが、最近は、競争原理に基づく独立専業メーカーが成立するようになっている。そのシステムが中国にはまだない。

II、原材料不足と安定供給確保の困難性

九五年、中国では一四〇万台の四輪車を生産した。それを向こう五年間で三〇〇万台まで拡大すると言う。しかし、銅・鉄鋼などの金属材料一つを取っても、幾つかの難問を抱える。

まず自動車用薄鋼板について見ると、上海宝山製鉄所の圧延・冷延プラント（年産二〇〇万トン）がフル稼働に入れば、乗用車を中心に年一〇〇万台分の生産体制を

維持出来るはずであったが、どうやらその見通しがあやしくなつてゐる様子である。

鋼材が不足ならアルミ素材を用いたらどうか。すでに中国では廉価でしかも加工しやすいアルミ素材を使ったガソリン・エンジンが多数作られている。これは電気代の塊といわれるアルミ用電力料金が政治的に安く押さえられているからこそ、成立している仕組みである。

もし電気料金の逆ザヤに国家財政が耐えられなくなつたときは大変なことになる。まずエンジン・ブロックを铸造するときに必要な、良質のアルミ・スクラップ素材が中国では、ほとんど調達出来ないという問題がある。

次に柔らかいアルミは加工できても、硬度の高い铸物を加工できない機械設備が多く、アルミ不足は即、設備不足に繋がる。

現在中国には、優秀な高速小型ディーゼル・エンジンはほとんど存在しない。高速小型ディーゼル・エンジンはアルミ・ボディでは製造できないからである。

さらに、合成樹脂・天然ゴム・ガラスなどの素材も深刻な問題である。自動車生産用資財の生産計画と自動車

生産計画が国家計画経済の中で密接な連携のもとに運営されるはずが、現実にはそうなつていなかつてある。

自動車は多数の素材を必要とし、たとえ一つの素材でも不足すれば、自動車製造はストップせざるを得ない。まして「量産品」となれば、ライン・ストップは致命的結果をもたらす。

今回の新自動車産業政策でも、國務院は関連工業の協力を特に訴えている。しかし、他部門との協調の悪い中國では、一つの産業の都合に関連部門が一致協力するとはまず考えられない。それが現実の姿である。

III、人的能力不足（特に技術者・管理者・技能者）

この問題は、自動車産業に限つたものではない。今の中国の全産業あるいは社会全般に係わる深刻かつ重大な問題である。

全産業分野で、近代科学技術を正しい角度・方向で理解し捉え得る「技術者／管理者」、近代的管理技術を正しく理解出来る「専門家／技術者」、各種の情報をそれぞれの活動領域で実際の製品や組織活動に具体化出来る「中間管理職」—— こうした「人材」が極度に不足して

いる。

その数だけでなく、その質も問題になつてゐる。また技術者だけではなく、経営全般／人事労務／生産／購買／販売などの専門管理職の不足も深刻である。

このような段階では、とかく「機械」購入などのハード面が重視され、それを支えるソフト面が後回しとなりがちである。

近代技術が導入され、近代設備を据付ければ、ただちに近代的製品が流れ出るかというと、決してそうではない。「そうではない」という認識を持つことがまず知的能力の第一歩である。

この問題解決の一つの手段は「企業内教育」の徹底である。トヨタが支援し、沈陽市に開設した「自動車技術者訓練センター」がある。このような協力事業は派手さこそ少ないが、中国自動車産業に対する「貢献度」は実質的で高いものと評価されている。

IV、一貫性／継続性に欠ける「行政指導」「行政方針」

この問題は「人材」以上に厄介な問題である。政府の指導なり行政の方針のみが「金科玉条」とされる中国で

また長い間、すべての物資が統制されてきた、計画経済体制の中国で、「行政方針」が権力闘争の度毎に、大きく変動したという問題である。

たとえば、ある時は「自力更正路線」で「外国への戸口」は完全に閉ざされ、外国技術の導入など「もってのほか」。ところが一度政権が変ると、国産車両の品質と数量不足を「外国車購入」で補い、国内企業の生産体制に大きな打撃を与える結果を招く。

さらに「輸入増で外貨不足」が起ると、またまた方針転換で「技術導入は歓迎」しながら「完成車と生産資財の輸入は制限」となり、折角生産技術を導入した自動車工場で、「国産化未達部品」の輸入を止められたため、完成車が出なくなる騒ぎに繋がっている。

困ったことに、このような場合、「責任の所在がハッキリしなくなる」。「社会的な穴」があいてしまう。

北京社会科学院主催の「国際問題シンポジウム」に二

回にわたって参加したが、中国側の発表ではほとんど全員がこの「朝令暮改」と「責任の曖昧性」を捉え、産業発達の阻害要因として指摘している。この点には今後と

も目が離せない。

計画に従つて工場建屋は建設した。しかし、政策変更で設備の導入が不許可になった。資金計画が突如挫折し支払いの日途が立たず設備購入計画が実行不可能となる、そして外国との契約を破棄し国際問題に発展した。対外事例、国内事例を問わず、そのような社会的ロスの例は枚挙に暇がない。

最近中央指導体制が次第に力を失い始めたのも、基本的な「行政欠陥」に大きな原因があるものと思われる。

もう一つ、「口は出すぐ、金は出せない」中央政府の財政上の制約がある。国有企業である、第一汽車製造、東風汽車製造は別格として、地方政府が管轄する地方企業に対しては、中央政府は行政上の許認可権は持つが、財政上の支援は全く行なえなくなつた。

そこで地方企業は地方政府と組んで、独自路線を取り始めたのである。「中央に政策あらば地方に対策あり」このチャッチ・フレーズが示す通り、地方の力がつくるとともに、中央の指導力はしだいに弱まっている。V、外国技術導入に当たつての姿勢の誤り

金を払つて導入するのだから、常に一流技術が欲しい。それも懇切完璧なものが欲しい——導入する側からすれば、当然の気持ちである。

しかし、ある特定の部分的技術のみ導入しても、たとえばその前後の技術が遅れていたり、関連産業の原材料手配がうまく行かなければ、導入技術は生きてこない。そういう状況は到るところ発生し得る。

そこを無理やり、ひどいのは「承知の上で」一流技術にこだわる。しかも完璧性を要求して相手の責任のみを追求する。面倒見を良くするようハッタリをかける。

これもどこかで「社会的ロス」につながる欠陥姿勢である。あくまで現実に立脚して「合理的展開」を計るのが技術世界の鉄則であることを忘れてはいけない。

三 自動車産業における日本の対中協力方策

八〇年代後半、中国が日本に乗用車生産協力を申込んできたとき日本勢は躊躇した。そして欧米諸国に比べ、大幅に出遅れる結果となつた。その理由は五つほどある。

I、共産主義に対する本能的警戒感

日本人には、日本文化のルーツである中国文化と大陸

というスケールの大きさに対する憧れがある。日清戦争以来の侵略行為にたいする贖罪意識もある。しかし、底辺には共産主義に対する、本能的警戒感がある。

Ⅱ、八〇年代クレーム交渉時の悪い印象

最近日本で話題となつた山崎豊子氏の「大地の子」にも「クレーム交渉」の場面が出てくる。日中国交回復後相当量の日本製車両が中国に輸出された。そして八〇年代の「クレーム交渉」につながる。

日本側は純経済的または純技術的に議論をすすめようとした。だがそうすればするほど、中国側は理不尽とも思える法外な要求を大声で繰返し突きつけてきた。

そのとき交渉の場に立たされた、多くの企業幹部は、強い戸惑いと強い反感を持つに至り、それまで持っていた良好な中国感と、協力への情熱を無くしてしまつていった。それからも多くの新規生産協力要請であった。

Ⅲ、日本のボトム・アップ方式では前進しにくい中国

現在、日本企業が新規事業決定方式として多く採用している「事前完全審査方式」は中国での思い切った新規事業の発足には適切でない。

欧米諸国はどのプロジェクトでも「トップダウン」方式ではじまる傾向が強い。まず企業トップが中国側首脳と事業概要を決定する。

そのあと自國政府に「後ろ盾」を求める。その上で万一大の場合の保証を中国側より取付けるか、問題が複雑となつた場合の政治折衝を自國政府に求めておく。

IV、日本大手は丁度欧米進出で多忙を極めていた

八〇年代にはいつてから、トヨタ、日産はじめ乗用車大手各社はアジア地域をはじめとする開発途上国での生産拡大が続いていたうえ、欧米市場からは厳しい完成車輸入制限を突きつけられ、欧米各地での現地生産を拡大しはじめた時期に当り、超多忙であった。

V、繁栄の中にうまれた驕りと甘い判断

戦後間もない頃の日本は、自動車に関しても、とるに足りない国であった。それがいまや世界最大の自動車生産国となり世界の自動車先進国に脅威を与える存在となつた。そこに自負を超えた「驕りと甘い情勢判断」が生まれてはいなかつたか。

しかも、自動車先進国がズラリと並ぶ欧米市場にまづ

進出して、そこに日本車の地歩を築くことが先決との判断が、ごく自然に出てきた。その時、中国に対しある種の「驕り」や「甘さ」が無かつたとは言いがたい。

四、日本政府の「対中自動車協力」スタンス

上述のような理由で、欧米に出遅れた日本であるが、日本政府のスタンスは「対中協力を徐々に回復していく」という構えであり、そのための「調整・推進役」も果たそうとしている。(通産省／機情局自動車課)

① 日中自動車産業発展交流会

(九三／第一会／北京)

(九四／第二会／東京)

(九五／第三会／北京)

中国側——政府関係ふくめ約一〇〇名

日本側——岩崎会長始め各メーカー幹部、通

産、外務関係者

② 日本側問題点

中国進出計画について

(国家計画委員会がkey)

③ 日中自動車産業協調連絡会 平成八／三月予定

担当局——機械工業部、機電軽貿司と打ち合せ中

協力スキーム：具体的提案先方に要求中

△参考文献△

① 中国汽车工业年鉴／一九九五年（中国機械工業部・

汽車工業司中国汽车技术研究中心）

② 中国の自動車産業と部品工業（p八八／九六）東

西貿易通信社

△調査見学先△

① 中国汽车技術研究中心／天津

② 天津汽車工業總公司 微型客車廠

③ その他天津地区二工場（スタークー組立及び機械

部品下請）

イタリア旅行

原 信

三月の下旬の春休みを利用して八日間のイタリア行のツアーリーに参加した。妻がかねてからイタリア、イタリアと騒いでいたのが、折りからの円高・リラ安で、全食付一人十五万円という安さを利用して実現することになった。

コースは、ミラノ・ニース・フィレンツェ・ナポリ・ポンペイ・ローマという順で、駆足ながら見る処は見るという、まずまずのプランだった。

時間と金があつて、それに治安がもう少しよければ、ゆっくりと楽しめるとと思うが、その何れも駄目なので、残念ながらサワリだけの旅行となつた。それでもそれなりに、古代、中世の歴史とルネッサンスの美術に触れた感動は大きい。とくにミケランジェロの存在の大きさを痛感した。だが目の前の現代のイタリアはいささか

さびれている。私は、ラテン民族の高い芸術的才能とくに音楽や造形美術には大いに敬服するが、どうも食い倒れの民族だという印象、もしくは偏見を持っている。とくに政治は何をやっているのか分からぬ。（日本も大きなことは言えないが）しかしあのぐらい陽気に調子よく振舞えたら人生もさぞ楽しかろう。

そんな思いを片隅に抱きながらの旅行だった。

イタリア旅行

原 青蜂子

雪嶺に向かって長き湖を航ぐ

花冷えのドーモに掏摸が忍び込む

春宵のローマを目指す松の道

囃りがこだましてくる闘技場

春浅し心通わぬダビデ像

物乞いが咳いてローマは暮れにけり

陽春の口笛ナポリの八百屋かな

千年の廢墟にリラの花らしき

法王庁の番卒若し春衣

窓のなき城壁続く謝肉祭

短歌会について

細川 謙 三

毎月第二水曜日、午後二時から養和会八号室できわめ

てアト・ホームな雰囲気のなかで行つてきたが、今年もそれは変わらない。

新しく藤岡豊さんは加わられたが、最近、アドルカーダー・栄子さんの作品が見えなくなつたので、結果的には私を含めて合計七人というのはいささかさびしい。

短歌というのは歳氣を競う文学形式ではなく、真情を吐露するところにその特質があり本質があるのでから、当クラブの知性的な方々には少し氣質が合わないところがあるのかも知れないが、もう少し参加して頂かないと私も張り合いがない。もう一つ申し上げたいことは、参加する以上は世間的な見栄などはいさぎよく剥ぎ取り、真情に即して詠うことを心がけて頂きたいということだ。

土屋文明の作品に、

ただ一人吾より貧しき友なりき金のことにて交絶てり

（大正十四年）

吾がもてる貧しきものの卑しさを是の人を見て堪へが
たかりき

石炭を仕別くる装置の長きベルト雨しげくして滴り流

る
（昭和八年）

吾が見るは鶴見埋立地の一隅ながらほしままなり機械專制は

というのがあるが、ここまで自己凝視的になり、ここまで社会事象を客観視し抉りだして現実の自己と対決せしめよ、とは言わないが、一つの現代の短歌の究極の姿がここにあることだけは心におきながら作歌をし、お互に虚心に批評し合っていただきたいものと念願している。

とは言うものの今年の皆さん短歌が著しく進境を示したことは顯著であった。作品を挙げて今年度の短歌会の成果を示しておく。

北田純一

芝青くメタセコイヤの影ながくゴルフ場朝の光しづけ

し

ブリテンを逃れ来たりしカルトらがつくりし国をアメ

リカと言う

蔓薔薇の揺れてテラスの夕光一人しずけくダージリン

愛ず

復員の兵は黙して壊滅の広島駅に無蓋車を待つ

帰還せる我に安堵の涙せる母の面影よ遠き夏の日

年ごとに老けゆくものと聞きいしが日毎衰えゆく嘆きあり

術後七年造影剤の映し出すわが心臓のきれぎれのさま
律なす野茨の実の色深み入り日明るし西の山辺に
き朝
カルカツタの乞食群がる町並みは二十年前と変わることなし
若き日にともに夢みし赤旗の道一筋に友はなお行く
潮ひきし干潟の砂に目を掘る職退きしのちの誕生日今
日は

三枝亨

ジャンパー手に厚目に着よと声高く追いくる妻の息白

き朝

朝はやく公園のベンチに本を読む老婦人ありて目礼を

する

炎昼の取材終え来て汗を拭く冷房効きし茶房の卓に

遅れたる見舞が野辺の送りなり冷えゆく兄の手を握り

しむ

あるかぎり菊を手向けて別れたり兄はひたすらマルキ

ストなりき

藤岡豊

子らの声テニスコートにこだましてイギリスに住むわ

が娘を思う

論文のワープロ打ち終え月かけの明るき厨に水割りつく

父母のみ手に抱かれ安らかに眠り給えよ信濃路は秋
—坂本竜彦ちゃんに—

老い母と歩む小道は木犀の花こぼれつつ西多摩は秋
イギリスで職探しいるというわが娘の手紙に今宵吾は
もどかし

久ひさのふる里神戸三の宮タコ焼き売りの声はたくま
し

西川 知世

鏡餅をサイドボードに飾りおき穏やかなり一人住まい
の春は

空澄みて高くひろがるその下の焦土と瓦礫故郷の路
六甲の山の麓へ続きいし家並は崩れなおそこにあり
り
宗教を装うテロ集団と思えども若き信徒らの瞳澄みた

水銀灯の下ゆく若き一人連れフランス語のアクサン夜
のしじまに

いつの世も犠牲となるは弱者なりベク・ドク君の手術

痛まし

静かなる秋の病舎の庭歩む明るきガウンと白衣の人ら

山中に埋め捨てられし幼な児に虫鳴く秋の幾度過ぎし

か

住み替えの間取り図の前話し込む親とは隔たれり我の
心は

大切に包み置かれしアルバムに学生服の舅の顔あり
前向きに残る年齢數えつつ生きよと熱く君は言いたり
非業の死遂げたる王の愛でしという白亜の城は青葉の
なかに

鳴沢 秀影

おはようとキスを受けたり今朝もまたやさしき夫よ窓に風花

細川 謙三

「望郷」というドイツ語を言うドイツよりの吾娘の年

ガラス窓に迫る公孫樹の黒き幹ロダン見終えて憩う口
ビーに

昇りゆく日輪の輪のひろがりよ雪野はるかな木立の間

枝伐りし公孫樹の続く冬の路美術館出でて歩みゆく午
後

始の電話はかなし

ボヘミアのチエロの旋律聴き終えてシクラメン白し夜
更けの居間に

看護婦の資格をもちて巣立ちゆくきょうの式典こでま

マグノリア咲くアメリカの北の町住みたる四年還ることなし

よりの花びらに露光る土に散りても尚おご

梨の花過ぎたる丘をくだり来て家鴨やがもの遊ぶ流れ澄みたり

立ち居り

くくれないのバラの花びらに露光る土に散りても尚おご

ほのかなる紅をふふみて白玉のロードデンドロン開き

ること

浅野 正春

下総の四街道の雄蛇が池のほとりの蕨羊齒となりけり

河骨の咲く水澄みて蛙鳴く湿生花園徑かわきたり
ヘミングウェーのペーパーバック幾日も持ち歩きしが

十谷の山に日暮の朧月光増しつ湯の煙立つ

秋となりたり

武藏野のくぬぎ林の冬木立年の始めの光さし込む

みすずかる信濃の谷の奥深き小田切村は父の故郷ぞ
幼き日立ちつくしたるコンクリートの田舎の橋よすこ

やかにあるか

ペシ俳句二年の歩み

||その一||

平間 真木子

日溜りの光りを吸へる福寿草

湖を一階より見ししじみ汁

飛鳥山花にいくさのあともなし

亡き母の好みしものに江戸切子

町工場夾竹桃を垣根とし

山の氣を吸ひて青める秋の湖

蓼科のビーナスライン月白し

池田 耕治

水上バスに乗りて八十八夜かな

高原のセミナーハウス風薰る

妻生れし日は巴里祭ワイン抜く

向日葵を卓にハンバーガーの店

夾竹桃咲き汚れたるダンプカー

バーベキュー片付けしとき大夕立

庭下駄の緒に来てとまり赤とんぼ

釣竿を持ち熱爛の座につけり

この主人ならではの味覗汁

春一番島の裏側波高し

落日や向日葵の影子らのかげ

海岸の夾竹桃のみ変らざる

湖をかくす朝霧関所跡

秋の海見てをり紫煙くゆらせて

山寺や虹の喰れる外廻

足浸すことの樂しき夏の川

向日葵の影長々と夕日かな

愛犬の眠りてをりし百日紅

稻光まさかと思ふ訃報あり

江田島のこと思ひ出す秋の海

ハローイン終り庭芝枯れはじむ

亀井 弘次

石川 正達

遅滞稿仕上げし窓に風薰る

旅支度終り金魚に目を移す

ロワールの古城はるかに夏の月

鬢白く鏡の中に秋立ちぬ

着陸や稻妻雲を行く手にし

北京郊外香山に見る望の月

炊き上げて賞つる故郷の今年米

臥竜梅幹くろぐろと濡れてゐし

虻一つ唸りやまざり屋下り

故郷の生家に端居してをりぬ

幸福の木に花咲けり梅雨晴間

鉢の金魚見てゐて何かもの憂しや

霧ながら鰯の唄の九十九里

寅さんの帽子あみだに菊人形

厨なる覗の私語のひそやかに

六甲山に赤き日をおき夕桜

鳥翔ちて一樹の落花しきりなる

上沢準太

縁日や陽気な金魚売りのゐて
巴里祭石井好子に会ふ日なる

骨董市立ちて手児奈の萩こぼれ

カレンダーに書き込み多き師走かな

未來図を妻と語りぬしじみ汁

馬の尾に打たれて虻のたじろがず

観梅の疲れや土手に片手つき

大き日輪青嶺に沈みゆきにけり

古本屋の主残暑の中にある

ちぎりたるパンやはらかに秋立ちぬ

佳きことのつづきしあとの酉の市

大寒やブーツの女性闊歩して

虻一つ閉じ込められしままにして

春一番友の訃報をもたらしぬ

夏の川北山杉の競ひ立つ

父のせしごとく朝顔仕立てけり

待ちてゐし伊予のくになる青蜜柑

北田純一

櫻井清治

佐份利

治

音立ててをり新米の脱穀機

東風吹くと子等の帰国の近づきぬ

鳴澤秀影

出不精や座して廊下に梅を見て

特攻の友をこころに花の中
受賞せる友と八十八夜かな

蛙鳴く父の生家の夜明けかな

愛犬の姿の見えず木下闇

喉越しのワインの味よ花疲れ

格勤の身に夾竹桃赤し

論争のあとは寿司屋へみどりの日

菜園に新米磨ぎし水流す
チャルメラの音霜月の夜なりけり

ドラムの音ことに大きく巴里祭

吉井米三郎

フランスの短き秋よ古書の市

吉井米三郎

旅の夜の枕なじめず遠蛙

西川知世

磨かれし床屋の鏡福寿草
きさらぎや唐招提寺に月高く
日は暈を着て低くあり春一番

吉井米三郎

薰風を来てエアメール投函す

吉井米三郎

大向日葵被災の家の軒を越し

花冷やアトリエに裸婦立ちてをり

吉井米三郎

てのひらに確かな重さ黒葡萄

残雪の木曽駒よりの風薰る

吉井米三郎

月光や富士の稜線あきらかに

赤潮の発生兆す原爆忌
面一つ求めて酉の市出づる

吉井米三郎

銀杏散るビルの石柱彫り深き

転居後の風のつのりし二月かな

吉井米三郎

故郷のしみじみ遠し酉の市

ふうふうと吹きてなつかし蜆汁

吉井米三郎

春の雪鶴大きな翅拡げ

誘はれて來たり公園梅祭

吉井米三郎

自転車のペダルの重し冬の霧

森田茂

アブドルカーダー

栄子

木の芽和にごり酒をば添へられし

つたが、方針としてはその内に零にしてゆきたいと思つてゐる。

平間 真木子

さくら散る王家の紋の大天使館
薰風や貨車より下ろすワイン樽

夕富士に向ひて夏の川渡る

傷心や向日葵の芯黒く焦げ

月の宴象牙の箸の揃へあり

帆船の白きが浮かび秋の海

十一月となりし帽子を購はむかな

飛鳥山花にいくさのあともなし

浅野正春

都内に花の名所はいろいろあり、飛鳥山は江戸時代より格別に賑わうところ。戦後五十年、すでにいくさの跡のあろう筈も無いが、花の下に立ったときの感慨とはこうしたものであろう。或る年齢の作者の姿が想像され、

共感を覚える。

ベン俳句二年の歩み

||その二||

平間 真木子

秋の海見てをり紫煙くゆらせて

石川正達

昔、北原白秋はその住居を「紫煙草舎」と号した。い

機會に、兼題を減らし自由に季語を選んで、身辺・写生の句を作る方法をとることにした。兼題は作句のときの手がかりとなるので、無いと作りにくいとのご意見もある

が思われるるのである。

向日葵を卓にハンバーガーの店

池田耕治

遅れて参加された方であるが、俳誌「青山」にて勉強をされているので、表現が豊かであり、把握の仕方が巧みである。子供たちの大好きなハンバーガーの店。卓に置かれた向日葵に目を止めての一句、無駄のない楽しい作品といえよう。

江田島のこと思ひ出す秋の海

亀井弘次

亀井さん、北田さんほか江田島に学ばれた方は多い。期間としては短期のようであるが、その若き日の思い出

はいまも鮮烈であるらしい。きらめく秋の海の前に、先ず思い出される江田島のこと。次の世代になれば「江田島」は忘れられるのではないか、との思いを深くした。

白く鏡の中に秋立ちぬ

上沢準太

秋には「木の葉髪」など季語にもさびしさが揺曳する。

餐の白さに目がゆくことも、やはり秋ゆえの自然という

ものであろう。旅の多い方のようであるが、日本にあれば、おのずから「鏡の中に秋立ちぬ」と、まことに繊細な感覚を示されることはうれしい。

寅さんの帽子あみだに菊人形

北田純一

男性にとって「寅さん」は一種の偶像なのであろうか。その自由な生き方を羨望する気持ちがあるようと思われる。菊人形の世界にも登場している寅さん。あみだ被りの帽子にも生きる自由を感じるのは、多分作者ばかりではないのであろう。この作者の目指す句の世界に注目したい。

巴里祭石井好子に会ふ日なる

三枝 亨

席題に「巴里祭」と出たとき、みなさんは非常にいきいきとした句を発表された。わが意を得たり、の感があつた。日本における日本人好みの「巴里祭」を十分に心得ておられるせいであろう。楽しい俳句、それを作つて行きたいものである。

ちぎりたるパンやはらかに秋立ちぬ 櫻井 清治

毎朝のパン食はごく普通のことであるが、この作品にみるパンの白さ、やわらかさは格別美味に思われる。それは秋立つ朝の微妙な感触というもので、季節の喜びがここには詠い上げられている。些細なことの中に見つける意外な喜びと楽しみである。

大寒やブーツの女性閑歩して 佐介利 治

今年はまた大変ブーツが流行っている。それらはみな豪華で、また奇を競うというか目を見張るばかり。男性の目にも楽しいことであろう。すでに大分前より「ブーツ」を季語と認めている結社もある。この際「ブーツ」の佳句を沢山作って、季語として定着させてゆきたい。

論争のあとは寿司屋へみどりの日 鳴澤 秀影

昭和天皇の誕生日はいま「みどりの日」として、ゴー

ルデンウイークの始めの日となっている。したがつて未だよき例句に乏しい。この作品は、いかにも作者そのもので、歯切れよく明解、そして楽しい。「みどりの日」

の俳句として推薦したいものである。

てのひらに確かな重さ黒葡萄 西川 知世

俳句が好き、俳句を作ることが好きと、若い力をもつて目下邁進中の知世さん。俳句との巡り合いを幸せの一つとしておられる。事実、この作品の的確な把握と表現は優れている。普通の葡萄ではなく「黒葡萄」とした感覚が冴えているのである。

菜園に新米磨ぎし水流す 森田 茂

兼題の「新米」のときは、もつとも身近な季語としての楽しさ面白さがあつて、良い作品が多くった。反面、新米を磨ぐ、炊ぐの動作の句が多くみられた。この作者の場合は、菜園に新米を磨いだ水を流す、という意表をついた内容に成っている。自家菜園の青さが目にしみるところが楽しい。

面一つ求めて酉の市出づる 吉井米三郎

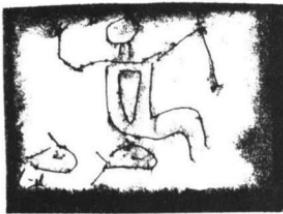
今年は三の酉まであって、何處のお酉様も賑わったよ

うである。折角行つても、あの大きく高価な熊手を買うことはない。賑わいに身をまかせて、年中行事をひそかに楽しむというところ。作者は「面」を一つ買ったといふ。なにの「面」か分からぬ。分からぬままに、作者の心の屈折を垣間見るだけである。

春の雪鶴大きな翅拡げ

アドルカーダー栄子

岩手県にお住まいとお聞きしているだけで、お会いしたことがない。地方のゆっくりとした生活を、しづかに楽しんでおられるように思われる。春の雪の上に漆黒の鶴、その大きな翅を広げた姿。なにかの象徴のようでもあるが、春の雪の美しさとして観賞したい。



悠遊の記

日本の技術と米国の軍事技術

許斐義信

アジア諸国との技術格差の縮小、そして米国的情報産業の活性化の狭間で、日本の製造技術は世界に冠たるものであるという自信が喪失し、将来の道が見えなくなっている。

特に米国のインターネットは軍や教育用のものを民間に放出することが引き金となっているし、また半導体の機械メーカーは軍事産業の金属加工技術を基盤にし、その上に起業家精神に溢れる事業家が新しい会社を興している。米国の技術は最早死んだのではなく、本腰を入れて競争力の回復を図っている。

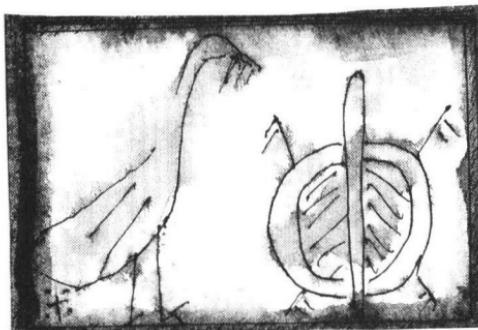
今こそ進取の気性と挑戦心、その活力が、日本の技術者に求められている。

書籍の再販制度と欧日比較

許斐義信

書籍や新聞の再販制度撤廃の問題が公正取引委員会で取り上げられ、それに関する当事者間の議論が白熱化している。書籍は文化であるという出版業界に対して、独占禁止法の例外品目の原則撤廃を前提にしている公取との間でその議論が収斂する様子はない。

ところが欧州ではEC委員会で十年以上もこの案件に取り組み、米豪などの調査を実施し、書籍の文化性だけではなく、小型書店の経営問題にまでも注目している。データを取らずに抽象的議論に明け暮れる日本の実情は、文化に対する価値観が原点から忘れ去られているとしか言いようがない。



企業O B ベンクラブのあゆみ

平成七年（一九九五年）

年表（原則として敬称略）

年史

一月例会（十八日）

。理事の担当変更

事務局長 森田 茂

業務担当 佐份利 治

。入会 都甲 昌利 今村 亮

。ゲスト講師

長銀総研副理事長

吉富 勝氏「経済を見る目」

二月例会（二十二日）

。今年の基本的活動方針決まる

。入会 大島 義園田 秀俊

。会員講演

中川路 明「石油化学の興るまで」

一、組織変更と強化

。理事の一部担当の変更があった。上記の通り、事務局長森田茂、事務担当佐份利治とした。

。運営委員は六名増員し、二十名となり、会の一層の活性化が図られた。追加委嘱された方は、岩崎洋一郎、莊司忠志、都甲昌利、中川路明、林篤一、村田孝四郎。

。今年の入会者は十一名で、年末現在の会員数は七十六名となっていた。

。プロジェクト等については、①プロジェクト②ミーティング・勉強会③短歌・俳句の三分類とした。勉強会の「国際情勢」と「国内情勢」を一本化して、「国内外情勢の勉強会」とした。

二、会の規約等の整備

。「会則の一部改正」で、来年以降の理事定数を五名から七名以内とした。「役員選任手続」を定めた。また、「印税収入の配布基準の一部改正」を行い、最低限の規約等が整った。

三月例会（十七日）

。ゲスト講師

東洋英和女学院大学教授 神谷 不二氏

「最近の朝鮮半島情勢」

四月例会（十九日）

。運営委員に四名追加委嘱

都甲 昌利、中川路 明
林 篤一、村田孝四郎

。入会 中洲 靖雄

。会員講演

岩崎洋一郎「ビジネス英語にまつわる話」

五月例会（十七日）

。ゲスト講師

伊藤忠商事常務取締役 藤野 文晤氏

「最近の中国情勢」

六月例会（二十一日）

。入会 武井 康二 山内 了一

熊谷 真

三、プロジェクトについて

今年は、単行本の出版はなかつたが、活発な活動が行なわれたので、来年には花開くプロジェクトが数件まとまりつつある。

。日本実業出版社から以前出版した「よくわかる商社業界」は好評を得ており、この度「改正版」を出すことになり、来年一月頃に同社から出版される。（プロマネ・三枝亨）

。「のんびり働く法則」は書苑新社との出版合意の下に、現在執筆が行なわれている。（プロマネ・櫻井清治、出版社交渉・石川正達）

。「海外体験よもやま話」の原稿は出来上がり、数社の出版社と交渉中である。（プロマネ・村田孝四郎、森田茂、岩崎洋一郎）

。「六十歳からの趣味達人」が台湾で中国語に翻訳され、「企業人必読一〇〇」シリーズで販売されている。その他「六十歳からの健康問題」、「どうやって英語を勉強したか」など新しい企画も進捗しつつある。

。雑誌関係をみると、①にじゅういち出版の「スクエア21」と「マテリアル・マネジメント」との四年の長期にわたる連載を十一月号で終了した。①東京商工リサーチの「ザ・ビジネスサポート」は、四月号で一年間続いた「ビジネスマンの海外駐在日誌」を終えたが、来年一月号から「ライフワークのすすめ」で半年間連載することとなつた。

。会員講演

林洋「自動車事故工学という私の仕事」

七月例会（十九日）

。入会 金澤 正綱

。ゲスト講師

日本原子力研究所副理事長

松浦祥次郎氏 「原子力のこれから」

八月例会は休み

九月例会（二十日）

。入会 三好 克彦

。ゲスト講師

日本経済新聞社取締役論説主幹

市岡揚一郎氏

「日本の将来・三つのシナリオ」

十月例会（十八日）

。運営委員委嘱 岩崎洋一郎

。入会 岸田 健

。会員講演

③社会保険広報社によるオムロンの「碧空」誌への季刊連載が、昨年に引き続行なわれた。

④アジア調査会の「アジア時報」は順調に継続されている。

四、ミーティング・勉強会

。「国内外情勢勉強会」は充実した内容で大きな成果をあげている。

（座長・鳴澤宏英会長）

。「何でも書こう会」がスタートし、多くの原稿が寄せられ、一回目の批評会が行なわれた。（プロマネ・浅野正春）

。前記した「のんびり働く法則」は、「サラリーマン・企業もの勉強会」から生まれている。

。ダベリ会 六月より毎月第三土曜日に、東京銀行・青山寮で昼食会形式で、フリーに情報交換をするミーティングである。

五、短歌・俳句は細川謙三、平間眞木子両先生の指導で、楽しく学ぶ会合になっている。

六、同人誌「悠遊」第二号でようやく軌道に乗って来た。そして紀伊国屋書店、栄松堂、有隣堂などで店売りを開始した。

七、講演活動

。横浜市労働福祉財団からの要請で「四十歳からのマイ・ライフプログラミング」について一～二月に講演を行なった。プロマネ・遠藤俊也、講演者・鳴澤宏英、石川正達、八木大介、田中良平、森田茂、吉崎清

鳴澤 宏英会長「円高問題のすべて」

十一月例会（十五日）

。ゲスト講師

チベット文化研究所長 ペマ・ギャルポ氏

「異文化コミュニケーション」

十二月例会（二十日）

。運営委員委嘱 荘司 忠志

。次期新役員決まる

会長・鳴澤 宏英

副会長・会計担当 上澤 準一

副会長・佐份利 治

事務局長・森田 茂

同代行・莊司 忠志

業務担当・運営委員長 櫻井 清治

同代行・中川路 明

監事 遠藤俊也

。会員講演

熊谷 真 「高齢化時代と社会保障」

己。なお、会場で、会の著書二十冊を販売した。

。建設省の建設大学校で、十一月に、櫻井清治、莊司忠志が、アジア諸国の国際マナーについて講演した。出席者全員が、前もって会の著書「国際マナー常識事典」を購読されていた。

八、ペルー・フジモリ大統領の四月の再選を祝って、会の基金から一千ドル贈呈した。初回の折には、三菱鉛筆を寄贈してマスコミに話題を提供した。

九、会のPRを兼ねて、「ご案内」の送付を行なっている。現在までに、拓殖大学、中央学院大学、国際大学、信州大学、愛知学院大学などの学会の外に、千葉県の関係行政機関や新聞社などがある。十、今年は、残念ながら二人が逝去された。

元事務局長・木村親と間淵達明の両氏のご冥福を祈る。

十一、会員個人の著作などの活躍が目立っている。（紹介順）

岩崎洋一郎「交渉の英語」

池田善行「ハイ・ゲンキは慢性病に克つ」

莊司忠志「息子たちは“脱・帰国子女”」

村田孝四郎「英文ビジネスレター表現集」

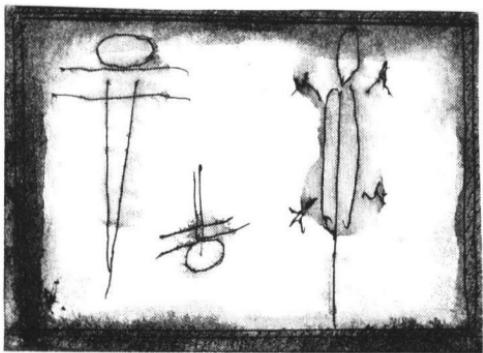
許斐義信「これから日本の経営」

八木大介「ボンバ・アトミカ」

林洋「成熟期」の交通論」

十二、まとめ

社会情勢の沈滞などの諸事情があり、年初計画の単行本の出版こそできなかつたが、来年への展開の礎となつてることを考えると、企会としては充実した年であったと思う。また若手の評価は高く、企業O B ペンクラブの将来は明るいと考えている。（森田）



執筆者名簿

氏名	(カッコ内は本名)	出身会社	生年
浅野正春	あさの まさはる	(株)日立製作所	1934
アブドルカーダ 一栄子	アブドルカーダー えいこ	ニューサウスウェルズ 州立コレスポンデンス スクール日本語教師	1933
新井 進	あらい すすむ	伊藤忠商事(株)	1931
池田 耕治	いけだ こうじ	第一勧業銀行	1927
池田 善行	いけだ よしゆき	日商岩井(株)	1917
石川 正達	いしかわ まささと	毎日新聞社	1921
今村 亮	いまむら りょう	京セラ(株)	1931
岩崎 洋一郎	いわさき よういちろう	三菱レイヨン	1929
岩瀬 昭三	いわせ しょうぞう	北海道建設業信用保証(株)	1928
衛藤 甲子郎	えとう こうしろう	住友商事(株)	1924
遠藤 俊也	えんどう としや	(株)東京銀行 丸紅(株)	1924
大沢 章伸	おおさわ ゆきのぶ	日商岩井	1934
大塚 滋	おおつか しげる	国鉄	1929
角谷 朗宏	かどや あきひろ	三井物産(株)	1928
上澤 準一	かみざわ じゅんいち	三菱商事(株)	1927
亀井 弘次	かめい こうじ	キリンビール(株)	1928
北田 純一	きただ すみかず	三菱商事(株)	1928
岸田 健	きしだ たけし	住友商事(株)	1927
きりん たかし (正木 豊 まさき ゆたか)		(株)マサリヤ社	1930
許斐 義信	このみ よしのぶ	三菱商事(株)三井物産(株)	1944
小林 正憲	こばやし まさのり	大和毛織国際工機	1930
三枝 亨	さいくさ とおる	三井物産(株)	1927
斎藤 効	さいとう つよし	呉羽化学工業(株)	1925
櫻井 清治	さくらい せいじ	三井物産(株)	1926

氏名	(カッコ内は本名)	出身会社	生年
佐份利治	さぶり おさむ	京セラ(株)	1926
清水喬	しみず たかし	(株)ポーラ化粧品本舗	1933
莊司忠志	しょうじ ただし	石川島播磨	1932
関谷裕彦	せきや ひろひこ	ローヤル・ネドロ イドラインズ	1932
園田秀俊	そのだ ひでとし	旭ガラス	1938
都甲昌利	とこう まさとし	日本航空	1933
内藤徹翁 (内藤徹雄)	ないとう てつおう ないとう てつお)	さくら銀行	1944
中川十郎	なかがわ じゅうろう	ニチメン	1935
中川路明	なかかわじ あきら	ダイセル化学工業(株)	1929
中洲靖雄	なかす やすお	三菱レイヨン	1927
鳴澤宏英	なるさわ こうえい	(株)東京銀行	1922
西島力	にじしま つとむ	住友商事(株)	1930
野村嘉彦	のむら よしひこ	三井物産(株)	1917
林篤二	はやし とくじ	毎日新聞社	1924
原信	はら まこと	(株)東京銀行	1924
平間真木子	ひらま まきこ	(社)日本機械輸入協会	1925
福井律	ふくい たかし	明光証券(株)	1924
藤井長治	ふじい ちょうじ	三井物産(株)	1919
藤岡豊	ふじおか ゆたか	三菱商事(株)	1932
細川謙三	ほそかわ けんぞう	(株)東京銀行	1924
水谷汎	みずたに ひろし	満鉄・友愛信用組合・横浜メキシコ名誉領事館	1917
村田孝四郎	むらた こうしろう	新日本製鉄	1934
森田茂	もりた しげる	出光興産(株)	1930
八木大介 (木本平八郎・きもと へいはちろう)	やぎ だいすけ	三菱商事(株)	1926
吉井米三郎	よしい よねさぶろう	三井物産(株)	1926
吉寄清己	よしさき きよみ	関西ペイント(株)	1925
西川知世	にしかわ ちよ	企業OBペンクラブ事務局	1948

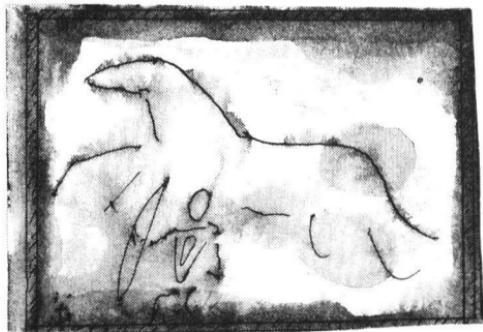
事務局から

西川 知世

皆様には多大のご迷惑やご不自由をおかけしましたことを心よりお詫びいたします。今までの非常に単純で浅薄な私の性格・生活が、これからは多少なりとも厚みや深みのあるものになって、皆様の後につけるのではないかと淡い期待をしています。

三年前、確かに三枝亨会員からだつたと思ひますが、企業OBペンクラブと言うからには「同人誌」を出したいとの意見が出され、たちどころに賛同を得て、さっそくに石川正達会員を中心にして第1号が出来ました。その時は

つくづく企業OBペンクラブの機動力に感心いたしました。それからは滞ることなく、林篤一会員を始め関係者のご尽力で参加者、頁数とも増えつけこの度めでたく第3号の発刊です。企業OBペンクラブの充実と活力を大変心強く感じています。事務局もうかうかしてはいられません。皆様の足を引っ張らないように、願わくば後押しができるまでになりたいものと思っています。私事ですが、昨年末から九十歳と八十歳になろうとする両親との同居を始めました。その折りは引っ越し等で会員の



「どうなる・どうする21世紀」という、いささか肩に力がはいった特集テーマでしたが、皆さんたいへんまことに受け止められて、このテーマだけで十八編もの力作が集まりました。この特集以外の評論・エッセイも個性豊かな作品ぞろいで、質・量ともに前二号を凌駕するものがあると思います。

今号でますます顕著になつた皆さんの筆力の向上を考えると「四〇〇字詰め、八枚前後」の原稿の指定量は、テーマによつては、ある程度巾を持たせてよいのではないかとの思いも湧きます。また、市販の道も追々ひろがつてゆく現状を考えると、同人誌から一步踏み出した編集方針の検討もなされてよいとも考えます。皆さん方の積極的な発言を期待します。

なお、当初の「十二月原稿締切り、二月刊行」の予定が年末に原稿が集中したためもあって、編集作業が対応し切れず、刊行が一ヶ月遅れたことをお詫びします。

〔編集世話人〕

石川正達・林篤一

〔編集メンバー〕

鳴澤宏英、浅野正春、遠藤俊也、
上沢準一、北田純一、櫻井清治、
平間真木子、細川謙三、森田茂

〔事務局〕

西川知世

企業OBペンクラブ同人誌

「悠遊」第三号

一九九六年三月十三日発行

編集・発行者 企業OBペンクラブ「悠遊」刊行委員会

代表 鳴澤 宏英

印刷所 株式会社 ヨコタ

東京都江東区亀戸三一〇一三(〒136)

TEL ○三一三六三八一五四一一

連絡先 企業OBペンクラブ事務局 森田 茂

船橋市小室町二七三六(〒270一四)

TEL ○四七四一五七一八四三八

口座 第一勧業銀行丸の内支店 企業OBペンクラブ

(普通 1633830)

価格 1000円

